


英語教育中核教員育成研修

令和3年度
**授業改善
プロジェクト
報告書**



アクション・リサーチによる
高等学校英語授業での実践研究

神奈川県立総合教育センター

目 次

英語教育中核教員育成研修とは	1
「教師が変わり，生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト	3
「聞くこと」にかかわる指導	
生徒が自信を持ってリスニングに取り組むための指導の工夫	5
まとまりのある英文の概要や要点を聞き取る力を伸ばす指導	9
Bottom-up 処理と Top-down 処理を意識したリスニング指導	13
会話文の概要を聞き取る力を伸ばすリスニング指導	17
「読むこと」にかかわる指導	
基礎的読解力を育てる指導	21
初見の英文を読むためのリーディング指導	25
生徒の意欲を引き出すリーディング指導の工夫	29
自立した読み手を育てるリーディング指導	33
概要・要点を的確に理解するためのリーディング指導	37
「話すこと【やり取り】」にかかわる指導	
会話を続ける力を身に付けさせるためのスピーキング指導	41
論理的・発展的なインタラクションの技能を育てる指導	45
論理的に意見をやり取りする力を養うスピーキング指導	49
基礎的なインタラクションの技能を育てる指導	53
基礎的な英語でやり取りする力を伸ばす指導	57
やり取りを深める力を育てる指導	61
身近な話題についてやり取りする力を養う指導	65
基本文法を使って会話する力を育てるスピーキング指導	69
「話すこと【発表】」にかかわる指導	
身近な事柄について即興で話す力を育てるスピーキング指導	73
日常的な会話をする力を育てるスピーキング指導	77
生徒が自信を持って自分の意見を話すスピーキング指導	81
教科書のオーラルサマリーを活用したスピーキング活動	85
「書くこと」にかかわる指導	
表現する喜びを実感できるライティング指導を目指して	89
一貫性のある正確な意見文を書くためのライティング指導	93
読んだ内容を深く思考させるライティング指導	97

＊それぞれの実践レポートの内容については，言語活動の呼称などに関し，厳密な用語の統一はしていません。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し，生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について，読者に参考となる情報を個人情報の保護に留意して記述する。
3. 実践報告については，理想論にとらわれず，現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については，統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れ，授業改善の手だての効果を記述する。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては，過去の文献や研究成果，私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して一授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、他の活動とのつながりをあらためて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に多くの時間を費やしてしまい、生徒に自己表現をあまりさせていない。

教科書英文の読解活動には取り組むが、初見の英文に対応できる読解力が育っていない。

3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

5. 改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安(数値目標)」として明確に言語化します。

6. 目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) プレリーディング活動を工夫すれば、興味や背景知識が活性化され、主体的に読解に取り組むようになるだろう。

7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にも良さはありますが、生徒のニーズを質的・数量的に調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をとまなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ教員が、仲間を増やしながら、より良い授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

○ 過去のテーマ分類

国際言語文化アカデミアにおける「英語教育アドヴァンスト研修」を含めた、過去の受講者が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると、次の表のようになります。平成 26 年度までは、「動機付け・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが、平成 27 年度からは、『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し、4 技能（令和 3 年度より 5 領域）のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
聞くこと	0	1	0	0	1	1	2	2	2	0
話すこと	2	1	2	7	9	4	7	3	7	4
読むこと	5	4	4	6	11	8	6	6	4	4
書くこと	4	4	3	3	4	2	0	4	2	1
動機付け・学習意欲	6	3	1	5	—	—	—	—	—	—
語彙・文法	3	1	2	3	—	—	—	—	—	—
計	20	14	13	25	25	15	15	15	15	9

*1：「技能統合型」

	R3
聞くこと	4
読むこと	5
話すこと【やり取り】	8
話すこと【発表】	4
書くこと	3
計	24

生徒が自信を持ってリスニングに取り組むための指導の工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス80名（男子29名，女子51名）の生徒である。ほとんどの生徒が，個別の学習には集中して取り組み，ペアワークやグループワークにも協力的ではあるが，英語学習に対して消極的な生徒や苦手意識を持っている生徒がいる。進路に関しては，例年9割以上の生徒が4年制大学への進学を希望しており，そのうちのほとんどが一般選抜での進学を目指している。

解決すべき課題

日常的な学習習慣が身に付いている生徒が多く，単語や文法などについても積極的に学習しているが，それらの知識が英語の各技能に十分にかかされていないように思われる。大学入試のための問題演習に取り組ませるだけでなく，どのように知識を使うのか，どのように各技能の力を伸ばすための練習をするのか，ということも指導する必要がある。また，間違いやできないことを隠してしまう雰囲気も感じられるため，「間違ふこと自体は悪いことではない。間違えたらその原因をしっかりと考えて次にいかそう」という前向きな雰囲気を作ることで自信につなげたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数75）

1. この授業で特にどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか（複数回答可）。

読む力	話す力	書く力	聞く力	語彙の知識	文法の知識
50人(66.7%)	48人(64.0%)	33人(44.0%)	54人(72.0%)	30人(40.0%)	23人(30.7%)

2. 英語の各技能の力はこれからの生活の中で必要だと思いますか。

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
読む力	45人(60.0%)	27人(36.0%)	3人(4.0%)	0人(0.0%)
話す力	62人(82.7%)	12人(16.0%)	1人(1.3%)	0人(0.0%)
書く力	33人(44.0%)	32人(42.7%)	10人(13.3%)	0人(0.0%)
聞く力	64人(85.3%)	11人(14.7%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

3. 英語の各技能について、得意だと思いますか、苦手だと思いますか。

	得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
読むこと	6 人(8.0%)	24 人(32.0%)	34 人(45.3%)	11 人(14.7%)
話すこと	1 人(1.3%)	13 人(17.3%)	29 人(38.7%)	32 人(42.7%)
書くこと	0 人(0.0%)	16 人(21.3%)	42 人(56.0%)	17 人(22.7%)
聞くこと	3 人(4.0%)	13 人(17.3%)	38 人(50.7%)	21 人(28.0%)

<分析と考察>

アンケートの結果、聞く力を向上させたい生徒が最も多い(72.0%)ことが分かった。また、聞く力と話す力が必要だと強く思っている生徒の割合が高い(それぞれ 85.3%, 82.7%)ものの、どちらも約 80%の生徒が「(どちらかといえば) 苦手である」と答えた。そこで、生徒たちが苦手意識を持ちつつも、技能向上の必要性を感じている「聞く力」を、授業改善のテーマにすることにした。

・第1回リスニングテスト（5月実施：受験者数 73）

大学入試センター試験のリスニング問題（2016 年，2017 年 第4問 A，B）の12問を1問1点として出題した（音声の聞き取りは1回のみ）。※Aは長めの英文，Bは長めの会話の聞き取り

平均点	標準偏差	最高点	最低点	平均得点率	6割以上正解	8割以上正解
7.2 点	1.92	12 点	1 点	60.3%	30 人(41.1%)	7 人(9.6%)

・第1回リスニングテスト後のアンケート（5月実施：回答者数 71）

今回のリスニングテストに、どのくらい自信を持って解答できましたか。

自信がある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	自信がない
0 人(0.0%)	6 人(8.5%)	40 人(56.3%)	25 人(35.2%)

<分析と考察>

大学入試センター試験のリスニング問題(50 点)の平均点は毎年 30 点前後で、得点率は 60%前後ということになる。今回の平均得点率は 60.3%で、全受験者の平均的な得点率を達成することができていたが、生徒の進路実現のためには、現行の大学入学共通テストのリスニング問題で 80%以上得点できるようにする必要がある。また、65 人(91.5%)が、解答について「(どちらかといえば) 自信がない」と答えており、内容を的確に聞き取れず曖昧なまま解答している可能性もうかがえた。正確に聞き取り、自信を持って解答できるような指導の必要性を感じた。

リサーチ・クエスチョン

自信を持って、長めのアナウンスや対話のリスニングに取り組み、要点や概要を的確に聞き取る力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・大学入試センター試験のリスニング問題で平均得点率が 80%以上になる。

・アンケートで「授業を受けて、以前よりも自信を持ってリスニング問題に解答できるようになった」と回答する生徒が全体の 70%以上になる。

改善のための手だて

- 内容に関する導入活動を行えば、自信を持ってリスニングに取り組むことができるだろう。
 - ・背景知識を活性化するために、キーワードや写真等から内容を予測させる。
 - ・内容理解の鍵となる未知語のみを事前に指導しておく。
- 明示的な音声指導を行えば、内容を的確に聞き取ることができるだろう。
 - ・消える音、つながる音、変わる音、アクセントなどを意識して、ディクテーションやシャドーイング、音読等に取り組ませる。
 - ・聞き取りが難しいと思われる箇所について解説し、再度リスニングさせることで、英語の音の特徴についての理解を促す。
- 応用的なリスニングタスクに取り組めば、聴解の方略が身に付き、的確に要点や概要を聞き取れるようになるだろう。
 - ・目的、場面、状況に応じた聞き取り方やメモの取り方等のリスニングストラテジーを指導する。
- 定期的なリスニングタスクに取り組めば、自信が高まるだろう。
 - ・教科書や演習問題などを使用し、リスニングタスクに取り組む機会を定期的に設ける。
 - ・問題演習に取り組んだ際には達成度を確認し、振り返りをさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回リスニングテスト（11月実施：受験者数 72）

第1回と同様に、大学入試センター試験のリスニング問題（2019年、2020年 第4問A、B）の12問を1問1点として出題した（音声の聞き取りは1回のみ）。

	平均点	標準偏差	最高点	最低点	平均得点率	6割以上正解	8割以上正解
第1回	7.2点	1.92	12点	1点	60.3%	30人(41.1%)	7人(9.6%)
第2回	8.6点	1.78	12点	3点	71.3%	56人(77.8%)	22人(12.5%)

<分析と考察>

平均得点率は、改善の目安とした80%には届かなかったものの、第1回の60.3%から71.3%まで上がった。平均点は7.2点から8.6点まで上がり、事前・事後のデータが揃っている生徒68人の得点についてt検定を行ったところ、統計学的に有意な伸びが認められた（ $p = 0.00 < 0.05$ ）。また、6割以上正解した人数は30人(41.1%)から56人(77.8%)に増え、8割以上正解した人数も7人(9.6%)から22人(12.5%)まで増加した。目標には届かなかったが、聞く力の向上を目指した一連の手だてに、一定の効果があったと言ってよいだろう。

・第2回リスニングテスト後のアンケート（11月実施：回答者数 71）

1. 今回のリスニングテストに、どのくらい自信を持って解答できましたか。

	自信がある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	自信がない
第1回	0人(0.0%)	6人(8.5%)	40人(56.3%)	25人(35.2%)
第2回	0人(0.0%)	29人(40.8%)	36人(50.7%)	6人(8.5%)

2. 授業を受けて、以前よりも自信を持ってリスニング問題に解答できるようになりましたか。

自信を持てるようになった	多少は持てるようになった	ほとんどないまだ	自信がないまだ
9 人(12.7%)	55 人(77.5%)	6 人(8.5%)	1 人(1.4%)

<分析と考察>

リスニングテストの解答に「(どちらかといえば) 自信がない」という生徒は 65 人(91.5%)から 42 人(59.2%)に減った。事前・事後のデータが揃っている生徒(65 人)の結果を検定にかけたところ、統計学的な有意差も認められた (Wilcoxon 符号付順位検定: $p=0.00<0.05$)。また、授業を受けて以前よりも自信を持ってリスニング問題に解答できるようになったかという質問に対して、64 人(90.2%)の生徒が「(多少は) 自信を持てるようになった」と回答し、改善の目安の 70%を超えることができた。

授業後の生徒の振り返りには、「導入活動のおかげで問題が取り組みやすかった」「数字の聞き取り方やつながる音などの説明が役立った」「授業でディクテーションやシャドーイング、音読の重要性に気付いた」など、手だての成果を感じられる記述が見られた。また、定期的リスニングタスクに取り組んだことによって、「耳が慣れた」「できるようになったことの確認ができた」「積み重ねの重要性を実感した」「苦手意識が薄れた」という感想もあり、この手だてが自信を高める一つのきっかけとなったと考えられる。

教師の変化

生徒の実態の把握と教材研究の重要性を再認識した。授業後に振り返りを記入してもらうことで生徒の実態やニーズが明確に分かり、次の授業へつなげることができた。また、活動の目的や効果を説明し、生徒と共有することで、生徒の取り組む姿勢や意識が変わることを実感した。

今後の課題 (次の改善点など)

明示的な音声指導に難しさを感じたまま授業を行っていたので、正確で分かりやすい指導ができるように、自己研鑽を続けていく必要がある。また、大学入試のためのリスニングという即応的な指導になってしまったので、基礎的な音素レベルの聞き分けから始めて、徐々に難易度を上げた聞き取りのタスクを適切な時期に設定するなど、3年間の発展的なリスニングの指導計画が必要であると感じた。

まとめ・感想

今回の研修とアクション・リサーチを通して授業改善に取り組めたことは、自分自身の授業を客観的に振り返り、分析する非常に貴重な経験となった。自分の経験や感覚だけで授業をするのではなく、生徒の実態を把握した上で授業の目標を立て、活動の目的を理解しながら指導を積み重ね、実践と改善を繰り返していく流れの重要性を実感した。また、生徒と目標を共有し意見のやり取りをしたことで、生徒の懸命な努力や前向きな反応が分かり、より良い授業をしたいという意欲と責任感の向上につながった。研修で得られたことを日々の授業にいかすことができるように、そして自分自身も常に学びながら、生徒とともにより良い授業を作っていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

竹岡広信. (2015). 『センター英語 満点のコツ』 教学社.

まとまりのある英文の概要や要点を聞き取る力を伸ばす指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	-----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス79名（男子47名，女子32名）の生徒である。真面目な生徒が多く，全体的に英語の基礎・基本は定着している。指示した課題にはしっかり取り組むことができるが，自分の考えを発信したり，推論や判断を要するような問いに対して主体的に考えたりすることが，あまり得意でない生徒が多いと感じる。進路については，例年多くの生徒が大学進学を希望している。

解決すべき課題

対象生徒のほとんどが大学進学を希望していることもあり，英語学習の必要性を感じながら真面目に授業に取り組む様子が見られる。昨年度から始まった大学入学共通テストを受験する生徒も多く，特に配点が大きくなったリスニングに関心が高い様子が見受けられる。大学入学共通テストのリスニング問題では，ある程度まとまった量の英文を聞いて情報を処理する能力が求められるため，リスニング能力の向上に課題を感じている生徒も多いと思われる。一方，初めて見る問題や難易度の高い課題に対しては受け身で解説を待つことが多いので，主体的に自信を持って課題に取り組む姿勢も同時に育成したい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語学習に関するアンケート（5月実施：回答者数70）

1. あなたは英語が得意だと思いますか，苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
2人 (2.9%)	18人 (25.7%)	22人 (31.4%)	28人 (40.0%)

2. 英語の授業の内容はどれくらい理解できていると思いますか。

ほぼ全部できている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
15人 (21.4%)	41人 (58.6%)	12人 (17.1%)	2人 (2.9%)

3. この授業で特にどのような力などを伸ばしたいと思いますか。（一つ選択）

英語を読む力	英語を聞く力	英語を話す力	文法の知識	英語を書く力	単語や熟語の知識
22人 (31.4%)	21人 (30.0%)	10人 (14.2%)	9人 (12.9%)	4人 (5.7%)	4人 (5.7%)

<分析と考察>

英語が「苦手」「どちらかといえば苦手」と答えた生徒が全体の7割以上であった。一方で，「英語

の授業の内容を理解できている」と答えた生徒は約 8 割であった。実際は授業内容を理解しているのに、自信を持って「英語が得意である」とは言えない生徒の心情がうかがえた。これは「解決すべき課題」でも述べた、初めて見る問題や難易度の高い課題に対する自信のなさともつながっていると考えられる。

授業で特に伸ばしたい力として「英語を読む力」と「英語を聞く力」を挙げた生徒が、それぞれ全体の約 3 割と多かった。予想した通り、アンケートの自由記述でリスニングについての課題に言及した生徒が多かったことから、今回の授業改善ではリスニング指導に焦点を当てたいと考えた。英検準 2 級を取得している生徒が全体の約 4 分の 1 いることも踏まえ、短い英文の聞き取りにとどまらず、ある程度まとまった量の英文を聞いて、その概要や要点などを理解する力を伸ばしたいと考えた。

・第 1 回リスニングテストの結果（5 月実施：受験者数 76）

まとまりのある英文の概要や要点を聞き取る力がどれくらい身に付いているのか調べるために、英検 2 級のリスニング問題の第 1 部と第 2 部からそれぞれ 5 問ずつ、計 10 問を出題した。（1 問 1 点、計 10 点）

平均点	標準偏差	最高点	最低点	6 割以上得点した生徒数	3 割以下得点した生徒数
3.6 点	1.67	9 点	1 点	8 人(10.5%)	37 人(48.7%)

<分析と考察>

平均点は 3.6 点で、英検 2 級合格の目安とされている 6 割以上得点した生徒は全体の約 1 割にとどまった。また、得点 3 割以下の生徒が 48.7%と、ほぼ半数いた。大学入学共通テストのリスニング問題に対処するには、より一層の努力が必要であることを再認識した。

リサーチ・クエスチョン

ある程度まとまった量の英文を聞いて、その概要や要点、必要な情報を的確に理解する力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・英検 2 級レベルのリスニングテストで、得点率 6 割以上の生徒が、全体の 7 割以上になる。
 - ・アンケートで、「自分なりのやり方を持って、主体的にリスニングに取り組んでいる」と回答する生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

- まとまりのある英文を聞いて概要や要点を理解する練習を継続的に行えば、様々な目的に合わせて情報を聞き取ることに慣れるだろう。
 - ・教科書の本文のプレリーディング活動として、簡単なタスクを設定したリスニング活動を行う。
 - ・段階的なリスニングタスクに取り組ませる（単語の聞き取り→要点理解→概要理解）。

- リスニングストラテジーの指導を行えば、まとまりのある英文を主体的に聞き、その概要や要点を的確に理解する力を身に付けさせることができるだろう。

・「メモの取り方」や「会話中の音声の強弱に注目する聞き方」などを明示的に指導する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回リスニングテストの結果（11月実施：受験者数 62）＊形式は第1回と同じ

平均点	標準偏差	最高点	最低点	6割以上得点した生徒数	3割以下得点した生徒数
4.5 点	1.91	9 点	1 点	21 人(33.9%)	22 人(35.5%)

<分析と考察>

第2回テストでは、6割以上得点した生徒は約3割となった。目標とした7割には届かなかったが、第1回の10.5%からは23.3ポイント増加し、2回とも受験した生徒の得点データの変化について t 検定を行ったところ、有意な向上が認められた ($p=0.01<0.05$)。日々の授業の中で、キーワードの聞き取りや要点の聞き取り、概要を掴む問題へと、スモールステップを踏みながらリスニング活動を行ったことや、リスニングの副教材を使用し、リスニングのストラテジー指導を行ったことで、リスニング力が向上した生徒が一定数いたのではないかと考えられる。

一方、得点3割以下の生徒は、37人(48.7%)から22人(35.5%)へと、わずかな減少にとどまり、6割以上得点した生徒の増加率と比較すると、その減少率はあまり大きくなかった。リスニング力は一朝一夕に伸ばせる技能ではないということは想像に難くない。それに加えて、今回の取り組みでは、ある程度まとまった量の英文を聞き取る力の向上に焦点を当てたため、もともとリスニングを得意としていない生徒にとっては力を伸ばすことが難しく、このような結果になったと推測できる。

- ・英語学習（リスニング活動）に関するアンケート（12月実施：回答者数 60）

1. 英語を聞く力は伸びたと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
22 人 (36.7%)	26 人 (43.3%)	8 人 (13.3%)	4 人 (6.7%)

2. 自分なりのやり方を持って、主体的にリスニングに取り組んでいますか。

している	まあまあしている	あまりしていない	ほとんどしていない
19 人 (31.7%)	31 人 (51.7%)	8 人 (13.3%)	2 人 (3.3%)

<分析と考察>

事後アンケートでは、8割の生徒が「(どちらかといえば) 英語を聞く力が伸びたと思う」と回答した。まだテスト結果には十分に表れていない、生徒のリスニング力向上の達成感を確認できたことは、この授業改善の一つの成果であると思う。

また、生徒の学習への主体性を推察するための、「自分なりのやり方を持って、主体的にリスニングに取り組んでいますか」という問いに、8割を超える生徒が肯定的な回答をした。ストラテジーの学習や様々なリスニングタスクに積極的に取り組む中で、初めて見る問題や、難易度の高い質問に対し

ても、自分の力で臨む姿勢が育ってきたことがうかがえる。このような主体的に学習に取り組む態度は、他技能の活動に対しても、さらには、卒業後の英語学習や様々な問題解決に対しても発揮されることを期待したい。

教師の変化

今までの自分の授業ではあまり力を入れてこなかった「リスニング指導」を、今回のアクション・リサーチのテーマにすることに最初は不安があったが、結果として、リスニングの指導法や活動を多く学ぶきっかけとなった。リスニングは受容技能であり、その活動はどちらかといえば受け身の活動と捉えていたが、最終的には、主体的にまとまった量の英文の聞き取りに取り組む生徒の姿を見ることができ、積極的に授業改善に向き合うことの大切さを改めて感じる事ができた。また、リサーチを通し、校内の他の教員や、本研修の他の受講者の方から多くのアドバイスをいただくことができたことも大きな成果の一つであった。

今後の課題（次の改善点など）

リスニングは生徒の得意・不得意の差が大きく、今回の結果を見ても、リスニングを不得意だと感じている生徒の力を十分に伸ばすことができなかったのが一番の反省点である。生徒の熟達度に応じた支援について、もう少し工夫すべきであった。今回は3年生のみを対象としてアクション・リサーチに取り組んだが、高校入学から卒業までの3年間をトータルで見ても、リスニング力向上のための指導計画を考えることが今後の課題である。

まとめ・感想

1年間の研修を通し、授業づくりや指導と評価のあり方など、様々なことについて深く学ぶことができた。今後の自分の授業改善にとって大きな糧となったと感じている。一緒に学んだ他の学校の教員の取り組みや考えにも多く触れることができ、自分自身の授業づくりを振り返る良いきっかけともなった。今回のプロジェクトで終わりにすることなく、研修で学んだことを参考にしながら試行錯誤を重ね、日々より良い授業をつくっていききたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

鈴木寿一・門田修平(編著). (2018). 『英語リスニング指導ハンドブック』 大修館書店.

酒井英樹. (2021). 「児童・生徒の『聞くこと』の力をどのように伸ばしていくべきか」『英語教育』2021年6月号. 大修館書店.

Shane Dixon. (2016). *100 TESOL Activities for Teachers: Practical ESL / EFL Activities for the Communication Classroom*. Katoomba: Wayzgoose Press.

Bottom-up 処理と Top-down 処理を意識したリスニング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 2 クラス 81 名（男子 45 名，女子 36 名）の生徒である。ほとんどの生徒が 4 年制大学への進学を希望し，難関大学を目指している生徒も多い。学習意欲も高く，活動にも積極的に取り組んでいる。

解決すべき課題

指示された課題には熱心に取り組む，学習意欲は高い。一方で，自ら課題を発見して解決方法を探すなどの主体的に学ぶ力が十分とは言えない。大学入学共通テストを受験する生徒が多く，高得点を取るためにリスニング力を高める必要性は感じているが，主体的に学習に取り組んでいるとは言えない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第 1 回 英語の授業にかかわるアンケート（4 月実施：回答者数 59）

1. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（複数回答可）

英語を聞く力	英語を読む力	英語を話す力	英語を書く力
40 人 (67.8%)	30 人 (50.8%)	27 人 (45.8%)	21 人 (35.6%)

2. 英語を聞く力はこれからの生活で必要だと思いますか。

そう思う	どちらかと言えば そう思う	どちらかと言えば そう思わない	そう思わない
51 人 (86.4%)	6 人 (10.2%)	1 人 (1.7%)	1 人 (1.7%)

3. 英語の勉強について，困っていることや分からないこと，知りたいことがあれば書いてください。
（リスニングに関して）

- ・リスニングのコツを教えてほしい
- ・リスニングの勉強方法が分からない
- ・リスニングの勉強で意識した方がいいことは何か

<分析と考察>

4 技能の中では，「英語を聞く力」を伸ばしたいと考えている生徒の割合が，全体の 67.8%と最も多かった。また，ほとんどの生徒が「英語を聞く力はこれからの生活で必要だ」と考えていることが分かった。ただ，どうすればリスニング力が身に付くのか，リスニングをどうやって勉強すればいいのか分からない生徒も多いことが推察され，効果的な学習方法を指導する必要があると感じた。

・第1回 リスニングテスト（5月実施：受験者数 76）

テスト内容：英検2級程度のリスニング問題

（会話の内容一致問題 5 問，文の内容一致問題 5 問，1 問 1 点，計 10 点）

結果：

人数	標準偏差	最大値	最小値	全体（10 点満点）	
				平均点	正解率 6 割以上の生徒
76	2.20	10	2	6.5	54 人 (71.1%)

<分析と考察>

平均点は 10 点満点中の 6.5 点で，英検合格の目安とされる正解率 6 割以上の生徒が 70%以上いたことから，全体としてある程度のリスニング力を有していることが分かった。生徒の進路希望を踏まえ，さらに高いレベルのリスニング力を育成するための指導の工夫が必要だと考えた。

リサーチ・クエスチョン

英語での日常的な会話や説明を聞いて，概要や要点を理解できるようにするには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検 2 級程度のリスニングテストで正解率 6 割以上の生徒が全体の 8 割以上になる。

改善のための手だて

- 授業の中でより多くのリスニングの機会を設ければ，英語を聞くことに慣れるだろう。
 - ・帯活動として副教材を使ったリスニングの小テストを行う。
 - ・教科書英文の読解に際し，オーラルイントロダクションや本文の音声を使ったリスニングタスクによって，英語を集中して聞かせる。
- 明示的な音声指導を行えば，的確に聞き取る力の向上に役立つだろう。
 - ・小テストの後にディクテーションを行い，聞き取りにくかった箇所について復習させる。
 - ・英語の音変化（linking, reduction, flapping 等）について説明する。
 - ・シャドーイング，オーバーラッピング，リピートイングによって英語の音声を体得させる。
- リスニングストラテジーを指導すれば，自分の力で概要や要点を聞き取ることに役立つだろう。
 - ・ディスコースマーカーや談話構造（抽象～具体，主張～理由・例など）について指導し，聞き逃した部分を推測したり，次に話されることを予測したりする力を身に付けさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第2回 英語の授業にかかわるアンケート（12月実施：回答者数 71）

1. 4月当初と比較して，自分のリスニング力は伸びたと思いますか。

伸びたと思う	伸びたと思わない	分からない
20 人 (28.2%)	13 人 (18.3%)	38 人 (53.5%)

2. リスニングの勉強法が分かるようになりましたか。

分かるようになった	まだよく分からない
40 人 (56.3%)	31 人 (43.7%)

3. リスニングにかかわる活動のうち、特に効果があったと思うものはどれですか。(複数回答可)

シャドーイング	オーバーラッピング	リピーティング	音変化の学習・練習	ディスコース マーカー等の学習
55 人 (77.5%)	15 人 (21.1%)	13 人 (18.3%)	8 人 (11.3%)	4 人 (5.6%)

4. リスニング学習の感想 (原文のまま)

- ・リスニングの勉強の仕方が分かり、それを継続していくのが大変だと思うけど信じて続ければ効果は出てくると思った。
- ・リスニングは自分ひとりでは何から勉強すればいいのか分からなかったもので、勉強の仕方が分かってよかった。
- ・テストでも音声を手の中でシャドーイングすることで点が前より取れるようになった。
- ・繰り返し復習する習慣がついてよかった。
- ・先生の推奨する勉強法はとても良いと思う。
- ・今までよりリスニングのテストが楽になった。

<分析と考察>

「自分のリスニング力は伸びたと思うか」という問いに対し、53.5%の生徒が「分からない」と回答し、多くの生徒は伸びを実感しておらず、約8か月に渡って取り組んだ一連の手だてでは十分でなかったことが分かった。引き続き、生徒が主体的にリスニング学習に取り組むことができるよう支援していく必要がある。また、「リスニングの勉強法が分かるようになったか」という問いには、56.3%の生徒が「分かるようになった」と回答し、「まだよく分からない」を上回った。全体の半分以上の生徒がリスニングの勉強法が分かるようになったことは一つの成果である。個別コメントでもそれを裏付ける記述が複数見られた。手だてとして行った活動のうち、特に効果があったものとして、シャドーイングと回答した生徒が77.5%いた。比較的難易度の高い活動であるにもかかわらず、多くの生徒が前向きに取り組んでいたことが分かり、嬉しく思った。コメントにも、授業で実践した勉強法についての好意的な感想が複数あり、継続して練習することの重要性も実感していることが分かった。

・第2回 リスニングテスト (11月実施：受験者数 67)

テスト内容：第1回と同様

結果：

人数	標準偏差	最大値	最小値	全体 (10 点満点)	
				平均点	正解率 6 割以上の生徒
67	1.80	10	2	5.5	32 人 (47.7%)

<分析と考察>

アンケート結果とは合致せず、第1回から平均点が1点下がってしまい、正解率6割以上の生徒の割合も大幅に減少してしまった。テスト実施が3年生の11月ではほぼ全員が入試の準備態勢にあり、学校の授業よりも、予備校・塾の課題や入試問題演習などをこなすことを優先した生徒が多かったの

ではないかと推察する。大学入学共通テストにもリスニング問題があるにもかかわらず、学校の授業での学びと大学等の受験を切り離して考えているとすれば、それは好ましい状況ではない。学校の授業にしっかり取り組んでいれば大学受験も乗り切れる、と生徒に思わせるようにしなければならないと強く感じた。また、たとえ適切な指導をしたとしても、リスニング力の伸びが結果として現れるまでには、ある程度の時間が必要であると考えられるため、1年次から計画的に音声指導やリスニングストラテジーの指導を行う必要があるという認識を新たにした。

教師の変化

これまでリスニングの指導といえばたまに小テストを行うくらいで、どうすればリスニング力が伸びるのか、明確に生徒に示すことはできていなかった。今回のリサーチをきっかけに、様々な文献を読むなどして、リスニングの指導法や学習法について改めて深く学ぶことができた。また、アクション・リサーチを行うことによって、生徒のニーズや変化などに気付くことができた。リスニング以外の指導においても、生徒の現状やニーズに基づいて目標を設定し、効果的な指導を考え、生徒の伸びを検証しながら、さらに改善を行っていくというプロセスが重要だということを再認識した。

今後の課題（次の改善点など）

まず、生徒の英語学習への意識を変えることが急務である。大学入試は英語学習の流れの途中にあるもので、学校の授業と別物ではなく、授業にしっかり取り組むことが大切である、ということを生徒が理解し、納得できるようにしなければならない。そのためには、3年間の指導計画を綿密に立て、リスニングを含む各技能の向上のためにどの時期に何をするかを決めて、生徒とも共有する必要がある。「学校の授業でしっかり学習すれば、このような力が身に付き、大学入試にも対応できる」と生徒が思えるような学習到達目標（CAN-DO）を設定し、それに基づいたシラバス・授業デザインをした上で、目標達成に寄与する指導・活動の詳細を決める、という手順を改めて確認し、実行しなければならない。

まとめ・感想

今回この研修を通じて、改めて自分の授業を振り返った。生徒の現状や課題を把握し、授業計画や手だてを考え、それを実践して検証してみる、という当たり前に行わなければならないことも、日々の忙しさに追われてないがしろになってしまうことが多い。この研修で学んだことを、これからも実践していきたいと感じた。今後、新学習指導要領において求められる指導力、新しいICTの活用法など、教師に求められるスキルは増えていくと思われる。生徒が力を伸ばせる英語の授業を提供できるよう、自己研鑽を継続していきたいと強く感じた。

授業改善にあたって参考にした資料等

鈴木寿一・門田修平(編著). (2018). 『英語リスニング指導ハンドブック』 大修館書店.
酒井英樹. (2021). 「児童・生徒の『聞くこと』の力をどのように伸ばしていくべきか」『英語教育』2021年6月号. 大修館書店.

会話文の概要を聞き取る力を伸ばすリスニング指導

科目名	英 語	学 年	中 3	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	-----	-----	-----	-----	-----------------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 1 クラス 40 名（男子 20 名，女子 20 名）の生徒である。明るく友好的で，授業時間にも休み時間にも和やかな様子が見られる。英語の授業については積極的に取り組み，力を伸ばそうという意欲が高い。学習が進んでいる生徒もいる一方で英語に対して苦手意識を持っている生徒もいる。

解決すべき課題

授業内のパフォーマンステストでは，英語特有のリズムや抑揚を意識して上手に発表ができる。しかし，英語に苦手意識を持っている生徒が多く，実用英語技能検定試験（3 級以上）の取得率は 41.1% だった。実力相応の検定問題に挑戦し，また明示的にリスニング指導を行うことで上達の実感を得させ，英語学習に対する自信につなげたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第 1 回リスニングテスト（7 月実施：受験者数 33）

英検準 2 級過去問題リスニングパート B (10 問：1 問 1 点) を使って，生徒のリスニング力を調べた。

人数	平均点	標準偏差	最大値	最小値
33 人	7.0	2.77	10	0

得点	4 点以下	5 点	6 点	7 点	8 点	9 点	10 点
人数	5 人	4 人	4 人	5 人	2 人	5 人	8 人
(割合)	(15.2%)	(12.1%)	(12.1%)	(15.2%)	(6.1%)	(15.2%)	(24.2%)

< 分析と考察 >

全問正解の生徒が 8 人(24.2%)いる一方で，全問不正解の生徒もあり，リスニング力に差が見られた。7 割以上正解する生徒の割合は 60.6% であった。リスニングの問題を解くことに慣れている生徒とそうでない生徒の差が出たのではないかと考える。平均点は高いが，得点のばらつきが見られるため，全体的に会話の概要を聞き取る練習の機会を設ける必要があると感じた。

- ・第 1 回 英語学習に関するアンケート（4 月実施：回答者数 39）

1. あなたは英語の学習が得意だと思いますか，苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
4 人 (10.3%)	12 人 (30.8%)	10 人 (25.6%)	13 人 (33.3%)

2. あなたはこの授業でどのような知識や力を伸ばしたいですか。1～3個選んでください。

項目	選択人数	項目	選択人数
英語を聞く力	19 人(48.7%)	英語を書く力	12 人(30.8%)
英語を話す力（発表）	6 人(15.4%)	英文法の知識	12 人(30.8%)
英語を話す力（やり取り）	20 人(51.2%)	英単語や熟語の知識	10 人(25.6%)
英語を読む力	7 人(17.9%)		

<分析と考察>

英語学習についての意識調査では、「苦手」「どちらかといえば苦手」と答えた生徒が 58.9%だった。授業で身に付けたい力についての調査では、「英語を話す力（やり取り）」、「英語を聞く力」を選んだ生徒が多く、英語のリズムや発音を指導することは生徒のニーズに合うと考えた。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題についての会話を聞いて、概要や要点を理解する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準2級レベルのリスニングテストにおいて、7割以上正解する生徒が全体の7割以上になる。

改善のための手だて

- シャドーイングの練習を繰り返しすれば、英語の音により慣れ親しむようになり、リスニングの力が伸びるだろう。
 - ・シャドーイングの方法を教え、自宅学習で取り組むよう指導する。
 - ・シャドーイングまでの足場掛けとして音読やオーバーラッピングの練習を日常的に授業で行う。
- 音変化について明示的に指導すれば、知っている語と聞こえた語がつながり、リスニングの力が伸びるだろう。
 - ・レシテーション発表のための練習段階において、音声変化の4項目（音の連結・子音の脱落・縮約・同化）について明示的な指導を行い、自分で発音ができるように練習させる。
 - ・上記4項目が紹介されているWEB上の動画（YouTube）を見せる。
- 初見問題での腕試しを繰り返せば、学習・練習したことを発揮する機会が増え、リスニングの力が伸びるだろう。
 - ・単元計画の中で、新しい教材を導入する際には内容の概要を問うリスニングクイズを実施する。
 - ・英検準2級や、教科書の付属のリスニング問題など、利用できる音声素材をできるだけ活用する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回リスニングテスト（12月実施：受験者数35）

英検準2級過去問題リスニングパートB（10問：1問1点）を使って、再度生徒のリスニング力を調べた。

人数	平均点	標準偏差	最大値	最小値
35人	8.8	1.39	10	5

得点	4点以下	5点	6点	7点	8点	9点	10点
人数 (割合)	0人 (0.0%)	1人 (2.9%)	2人 (5.7%)	3人 (8.6%)	6人 (17.1%)	8人 (22.9%)	15人 (42.9%)

第1回、2回の両方を受験した生徒31人の得点率を累計人数で比較した。

得点率	5割未満	5割以上	6割以上	7割以上	8割以上	9割以上	10割
第1回	4人 (12.9%)	27人 (87.1%)	23人 (74.2%)	19人 (61.3%)	14人 (45.2%)	12人 (38.7%)	7人 (22.6%)
第2回	0人 (0.0%)	31人 (100%)	30人 (96.8%)	28人 (90.3%)	25人 (80.6%)	19人 (32.2%)	15人 (48.4%)

<分析と考察>

平均点が1.8点上がった。改善の目安としていた7割以上正解する生徒の割合は90.3%に達しており、全体的にリスニング力を向上させることができたといえる。

・第2回 英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数34）

1. あなたは英語の学習が得意だと思いますか、苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
2人 (5.9%)	9人 (26.5%)	11人 (32.4%)	12人 (35.3%)

2. あなたは英語のリスニングが得意だと思いますか、苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手	*無回答
3人 (8.8%)	6人 (17.6%)	12人 (35.3%)	12人 (35.3%)	1人 (2.9%)

*「苦手」「どちらかといえば苦手」と答えた生徒の理由（原文のまま）

- ・知らない単語があると意味が分からなくなるから。
- ・単語が頭に入ってきてても意味がすぐに出てこなくて考えてしまうと一部聞き逃したりする。
- ・問題を読んでいる間に次の問題が始まるから。
- ・聞き取れない。選択肢が読み切れない。
- ・聞いた内容を忘れちゃうから。

＜分析と考察＞

英語学習への意識については、前回の調査よりも「得意」「どちらかといえば得意」と答えた生徒が減ってしまった。文法項目や語彙などの学習内容の難化や、力を付けている生徒がより高い自己の目標を設定するようになったことが背景にあるのではないかと推測される。一連の取組みの後で、リスニングの得意・不得意を尋ねたところ、7割以上の生徒がまだ苦手意識を持っていることが分かった。原因としては、語彙力の不足や問題文・選択肢の不十分な理解などが考えられる。綴り・音・意味を結びつけた語彙指導を反復的に行うことによって、聞く・読むなど、様々なモードで即時に処理できる語彙を増やす必要があると感じた。

教師の変化

これまでは年度始めに用意した教科書や副教材を1年間で終わらせることを目標にして授業を行っており、振り返ってみると、各単元での活動の展開が単調でメリハリがなかった。この研修を受講して、身に付けさせたい力やそのためのアプローチを明確にしながら中長期的な視野を持って授業を構成する必要性を強く感じた。

今後の課題（次の改善点など）

英検準2級の会話文レベルであれば、生徒は概要を聞き取ることができるようになってきた。一方で生徒にリスニングに対する自信をつけさせるためには、達成感や充実感を与えられるような活動の工夫が必要であると考えます。また、語彙力増強についても音声指導を含めながら取り組むべき課題だと感じている。

まとめ・感想

この研修を受講して TESOL の知識を学ぶことができた。2度の授業訪問では担当の指導主事から具体的なお助言をいただき大変勉強になり、集合研修では向上心のある他の受講生からも多くのことを学べた。新学習指導要領実施の前後に、このような研修を受けることができて良かった。

アクション・リサーチの手法には以前から興味を持っていたため、実践する機会を持つことができ、嬉しかった。しかし、今回は仮説の立案やテーマ設定などの準備が足りず、対象とした人数も少なく、授業改善のためのデータとしては質・量ともに不十分だったようにも思う。より効果的な改善を行うためには、日頃から課題意識を持ち、英語指導法についての情報を集めておくべきだったと感じた。この視点を、今後の授業改善にいかしたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

上田 功. (2021). 「音の変化に着目したトップダウン的な音声指導のアプローチ」『英語教育』2021 年 6 月号. 大修館書店.

武井昭江(編著).(2002). 『英語リスニング論－聞く力と指導を科学する』河源社.

基礎的読解力を育てる指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3クラス，合計117名（男子70名，女子47名）の生徒である。比較的まじめで素直な生徒が多い一方，英語に対して苦手意識を持つ生徒もあり，力の差が大きい。積極的に取り組むクラスと消極的なクラスがあり，ペアワークやグループワークを好む生徒とそうでない生徒がいるが，ほとんどが教師に指示されたとおりに取り組む。例年，約7割の生徒が学校推薦型選抜や総合型選抜を利用し，2割の生徒が一般受験をする。4年制大学への進学は約5割で，1割の生徒が就職する。

解決すべき課題

基礎的な文法知識や語彙が不足している生徒が多く，知らない単語があると読む気力を失ってしまったり，知っている単語のみから文の意味を推測することで，誤った意味理解をしてしまったりすることが多い。また1文1文の意味理解に注力し，本文全体の概要や要点を的確に把握することに課題がある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回 アンケート（4月実施：回答者数117）

1. 初見の英文を読む時，本文の概要を素早く理解することができているか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
8人(6.8%)	42人(35.9%)	52人(44.4%)	15人(12.8%)

2. 初見の英文を読む時，筆者の主張だと思われる文を探しながら読むことを意識しているか。

かなり意識している	まあまあ意識している	あまり意識していない	ほとんど意識していない
11人(9.4%)	44人(37.6%)	47人(40.2%)	15人(12.8%)

・第1回 読解力テスト（6月実施：受験者数106）

初見の英文で，パラグラフの要点やパッセージの概要を読み取る力がどれくらい身に付いているかを調べるために，英検3級過去問題の大問3Cを2題出題した。

	人数	標準偏差	最大値	最小値	合計点 (10点満点)		要点問題 (8点中)	概要問題 (2点中)
					平均点	7割以上	平均点	平均点
第1回	106	2.39	10	1	6.6	58人 (54.7%)	5.6	1.0

＜分析と考察＞

アンケートの結果から、初見の英文を読む際に、概要を素早く理解することができていないと自覚している生徒、筆者の主張を理解しながら読むことを意識していない生徒が、それぞれ半分以上いることが分かった。また、自由記述には、「どのように読んだらいいのかわからない」「単語の意味がわからないから読めない」などのコメントがいくつか見られた。読解力テストでは、合計点の得点率は英検合格の目安とされる 6 割を超えたが、半数の生徒が概要問題に正答できていなかった。これらの結果や日頃の授業での取組状況を踏まえ、意欲的に英文読解に臨み、自分の力で読み進めながら、一文一文の意味理解にとらわれずに、概要や要点、筆者の主張などを的確に理解する力を育てる指導の工夫が必要だと考えた。

リサーチ・クエスチョン

英文を読んで、概要や要点、筆者の主張を的確に読み取る力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検 3 級の大問 3 C で 7 割以上正答する生徒の割合が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 読解タスクの工夫をすれば、よりの確に概要・要点を読み取ることができるようになるだろう。
 - ・ワークシートに、パラグラフの要点やパッセージの概要を問う設問を設け、求められる読解スキルを明確にする。
 - ・パッセージを読み、パラグラフごとにタイトルをつけたり、パラグラフの内容を 1 文で表したりする活動を行う。
- リーディングストラテジーの指導をすれば、自分の力で最後まで読み進めることができるだろう。
 - ・接頭辞や接尾辞、前後の文脈などから未知語の推測をするよう指導する。
 - ・トピックセンテンスを探しながら読むよう指導する。
 - ・ディスコースマーカーに注目しながら、パラグラフの関係性や筆者の主張を読み取れるよう指導する。
- プレリーディングの活動・指導として適切な支援を与えれば、意欲を持って英文読解に取り組めるようになるだろう。
 - ・生徒が本文の内容に興味を持つように、生徒の生活や身近なものに結び付けたオーラルイントロダクションを工夫する。
 - ・新出単語の意味をすべて先に与えるのではなく、難しい単語や、分らないと内容理解に支障が出るような単語の意味だけを先に提示し、未知語の推測を促す。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第 2 回 読解力テスト（12 月実施：受験者数 97）

第 1 回読解力テストと同様に、英検 3 級過去問題の大問の 3 C を 2 題出題した。

	人数	標準偏差	最大値	最小値	合計点 (10 点満点)		要点問題 (8 点中)	概要問題 (2 点中)
					平均点	7 割以上	平均点	平均点
第 1 回	106	2.39	10	1	6.6	58 人 (54.7%)	5.6	1.0
第 2 回	96	2.43	10	0	7.1	60 人 (61.9%)	5.7	1.3

・第 2 回 アンケート（1 月実施：回答者数 76）

1. 初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することができているか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
7 人(9.2%)	28 人(36.8%)	32 人(42.1%)	9 人(11.8%)

2. 初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる文を探しながら読むことを意識しているか。

かなり意識している	まあまあ意識している	あまり意識していない	ほとんど意識していない
9 人(11.8%)	42 人(55.3%)	14 人(18.4%)	11 人(14.5%)

3. この授業でどのような知識や力が最も伸びたと思うか。（一つ選択）

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	語彙の知識	文法の知識
11 人(14.5%)	15 人(19.7%)	28 人(36.8%)	2 人(2.6%)	9 人(11.8%)	11 人(14.5%)

<分析と考察>

2 回の読解力テストの結果を比較すると、合計点の平均は 6.6 点から 7.1 点に上昇し、7 割以上正解した人数も 54.7%から 61.9%に増加した。要点問題の得点平均は 5.6 点から 5.7 点へ微増し、概要問題では、1.0 点から 1.3 点になった。2 回のデータがそろっている生徒の合計点に統計学的な有意差は認められなかった（対応のあるデータの t 検定： $p = 0.13 > 0.05$ ）が、生徒の読解力に一定の向上が見られたことはよかったと思う。

アンケート結果を比較すると、本文の概要を素早く理解することが（かなり／まあまあ）できていると回答した生徒の割合は、42.7%から 46.0%になり、あまり変わらなかった。生徒のレベルを考慮して、教科書の本文を分割して読解させるが多かったため、全体の概要把握をしようとする意識が根付かなかったのと、生徒自身の自信にまではつながらなかったのではないかと考える。今後は、英文の全体像の把握に意識を向けさせる読解活動をさらに充実させ、生徒の自信を高めるような授業改善をしていく必要があると考えた。一方、初見の文を読む時、筆者の主張だと思われる文を探しながら読むことを（かなり／まあまあ）意識しているという生徒の割合は、47.0%から 67.1%まで増加し、トピックセンテンスの指導やパラグラフのタイトルを考える活動などにより、筆者の主張を探そうとする意識が以前よりも上がったことが推察される。また、1 年間の授業で伸びたと思う知識・力のうち、英語を読む力が伸びたと回答した生徒が最も多かった。リーディングスキルの向上を目指した手だての効果と、授業改善の成果を感じることができた。

教師の変化

- ・生徒の反応に以前より注目するようになった。
- ・すべての指導・活動において、その目的を考え、目標を決めて授業を計画するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・一つのスキルだけでなく、4技能を総合的に伸ばせるような授業を計画していきたい。
- ・教科書の英文を使って身に付けたストラテジーを初見の英文で発揮し、自分の力での確な読解をする練習が十分にできていないため、今後はポストリーディングやプレリーディングの活動として、初見英文の読解に取り組ませたい。

まとめ・感想

本研究に先立って、英語のどのスキルを一番伸ばしたいかをアンケートで尋ねた。圧倒的にスピーキングが多いのではないかと予想していたが、スピーキングと同等にリーディングと答えた生徒が多かったことに驚いた。一般入試での大学受験をする生徒が少なく、読解の必要性を感じている生徒も少ないのではないかと思い込んでいたが、生徒のリーディングスキルを伸ばしたいと考えていた自分にとっては嬉しい誤算だった。また、アンケート結果によって、生徒の直面している課題やどのようなものに興味があるのかなど様々なことが分かり、それらをもとに授業を構成していくことができた。

リーディングを対象にしたアクション・リサーチを1年間かけて行った結果、1月のアンケートで「読む力がついた」と答えた生徒が多く、教師の働きかけが生徒にも伝わることを実感した。このことから、教師は、生徒の声に耳を傾けながら生徒のニーズや現状をつぶさに把握し、授業に反映させていかなければいけないと改めて感じ、より責任を持って英語の指導にあたらなければいけないと思った。

今後も、教師の一方的な指導にならないよう、アンケートをとったり、生徒とコミュニケーションを取ったりしながら、生徒がより主体的に英語学習に取り組めるような授業を展開していきたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』 大修館書店.

初見の英文を読むためのリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	-----------------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス115名（男子57名、女子58名）の生徒である。授業中は、教師の話をしっかり聞き、ノートを取ったり教師の指示どおりに活動に取り組んだりなど、受動的なタスクであれば意欲的に取り組む様子が見られる。一方で、知識を習得するために粘り強く学習したり課題解決に向けて主体的に取り組んだりする姿勢はあまり見られない。例年の進路状況としては、多くの生徒が専門学校への進学を希望し、大学進学者は全体の3～4割程度である。就職を希望している生徒もあり、生徒の進路希望先は多様である。

解決すべき課題

授業中、教師に教えてもらうことを待っている生徒が多いことが課題である。自分で考えて解答や意見を記述する場面では、空白のままにして教師の示す模範解答や他の生徒の意見を写している生徒が多く見られ、それらを暗記することが主な勉強方法になっている生徒もいる。生徒が自分の力で課題に取り組み、自分なりの答えや考えを言語化する時間を設けることが必要だと考える。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート調査（6月実施：回答者数115）

Q：英語を学習することで、どのスキルを伸ばしたいですか。

Reading	Listening	Writing	Speaking
46人 (40.0%)	40人 (34.8%)	18人 (15.7%)	11人 (9.6%)

<分析と考察>

多くの生徒が、リスニングやリーディングといった受容技能を伸ばしたいと考えていることが分かった。日頃の授業の様子から、インプットの先にあるアウトプットの段階に進む準備が十分に整っておらず、ライティングやスピーキングといった発表技能の活動に対して自信をもって取り組めないことが理由であると推察した。自由記述には、英文読解の際の課題点として「単語の意味が分からない」「1つでも単語の意味が分からないと、読み進めることができない」といったコメントが見られた。この結果から、アクション・リサーチのテーマをリーディングに設定することとした。

・第1回リーディングテスト（5月実施：受験者数109）

英検3級 大問3C（問1～4は要点問題，問5は概要問題：1点×5問）

平均点	6割以上正解	要点問題の 平均得点率	概要問題の 正答率
2.96点	54人(49.5%)	64.2%	35.8%

<分析と考察>

要点問題の平均得点率が64.2%であるのに対し，概要問題の正答率は35.8%にとどまっており，概要を捉えるスキルに課題があることが分かった。各パラグラフの要点を選択肢から選ぶことはできるが，英文全体の流れや論理構造を理解し，的確に概要を把握する力が身に付いていないことがうかがえた。また，アンケートの自由記述コメントからも，単語レベルの理解にとどまっており文章全体の流れを意識できていないことが推察された。そこで，初見の英文であっても，概要や要点を的確に理解する力を育成することが必要であると考えた。

リサーチ・クエスチョン

初見の英文を読み，概要や要点を的確に理解する力を身に付けさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検3級の長文読解問題で，6割以上得点できる生徒が全体の7割以上になる。

改善のための手だて

- プレリーディング活動を工夫すれば，内容に対する関心が高まり，積極的に英文の内容を読み取ろうとする意欲が高まるだろう。
 - ・ オーラルイントロダクションを通して生徒の読む意欲を高める。
 - ・ 事前に重要な単語の意味をヒントとして与えておくことで，読解の際の心理的抵抗感を下げる。
- リーディングタスクの工夫をすれば，英文の概要や要点，論理構造を的確に理解する力が身に付くだろう。
 - ・ 英文の構成を把握するために，グラフィックオーガナイザーに英文の内容を記入させる。
 - ・ ワークシートの設問を精選し，概要や要点を問う問題に継続的に取り組ませる。
 - ・ 本文中のキーワードを見つけさせ，それを手掛かりに話の流れを追うように指導する。
- 教科書以外の英文を読む活動を定期的，継続的に行えば，自分の力で初見の英文を読み進めることができるようになるだろう。
 - ・ 教科書の各パート終了後，本文のトピックに関連した初見の英文を読む活動を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回リーディングテスト（12月実施：受験者数 85）

英検3級 大問3C（問1～4は要点問題、問5は概要問題：1点×5問）

第1回リーディングテストと第2回リーディングテストの比較

	平均点	6割以上正解	要点問題の 平均得点率	概要問題の 正答率
第1回	2.96点	54人 (49.5%)	64.2%	35.8%
第2回	3.59点	66人 (77.6%)	75.6%	51.8%

- ・第2回アンケート調査（12月実施：回答者数 97）

1. 初見の英文を読んで、あなたの状況に近いものはどちらですか。

要点や概要が分かった	内容がほとんど分からなかった
62人 (63.9%)	35人 (36.1%)

2. 英語学習において春から変化はありましたか。（自由記述：一部抜粋）

- ・自分で理解できることが少し増えた。
- ・意味が分からない部分があっても、最後まで読み切ることも大切だと思った。
- ・最初に比べて大体的内容が分かるようになった。
- ・英文を読むことや話すことに少し慣れてきた。

<分析と考察>

英検3級の長文読解問題で6割以上得点できる生徒が全体の7割以上になる」という改善の目安を達成することができた。事前・事後のデータがそろっている生徒について検定を行ったところ、統計学的に有意な向上は認められなかった(t 検定： $p=0.09>0.05$)が、問題種別の正答率も上昇し、読解力の向上を目指した一連の手だてに、一定の効果があつたと考える。

第2回アンケートでは、「初見の英文を読んで要点や概要が分かった」と回答した生徒は62人(63.9%)おり、6割以上得点した生徒の割合(77.6%)に近いことから、多くの生徒が基本的な読解力を身に付けることができたと推察される。また、自由記述では、英語学習に対して前向きな回答を得ることができ、自分の力で英文を読んでみようという意欲を持ち始めた生徒も見られた。一方で、36.1%の生徒は「内容がほとんど分からなかった」と回答しており、英語学習に苦手意識を持っている生徒たちの読解力を向上させるためには、より基礎的な語彙・文法や読解スキルを着実に身に付けることができるよう、さらに指導方法を工夫する必要があると感じた。

教師の変化

今回のアクション・リサーチを通じて、教師によるオーラルイントロダクションやプレリーディングで行うタスクが非常に有用であることを改めて実感した。生徒にとって、支援なしの英文読解はハードルが高いが、プレリーディング活動の工夫により、意欲的に学習に取り組み、初見の英文であっても自分の力で読み進める様子が見られた。

授業では、教えるというよりも、生徒の主体的な活動を促すファシリテーターになることを意識するようになった。本文の内容を一方的に説明するのではなく、生徒が読解タスクに取り組む様子を観察し、理解が不十分な部分を補うという姿勢で授業を進めるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

リーディングの指導の工夫を通して、多くの生徒たちが、自分の力で英文を読み進める姿勢や英検3級程度の概要や要点を把握する力を身に付けることができた。しかし、大学入試問題など、難易度が高い英文を読むためには、読解の基礎となる言語知識がまだまだ不足している。今後は、現在の活動を発展させながら、技能にいかせる語彙・文法の知識の定着を図る工夫をしていく必要がある。

今後の展望として、まず、授業冒頭の活動の中に語彙・文法に関するものを加えていきたい。例えば、語の定義を英語で読ませたり、新出単語を使った文を書かせたりすることが考えられる。語彙・文法の学習を4技能に結び付け、機械的な練習に終始しないように留意し、生徒が思考力を働かせながら学習できる方法を探っていきたい。

まとめ・感想

1年間の授業改善を通して、生徒に身に付けさせたい力とそれに対する手だてを言語化し、実行していくことができた。言語化することで筋道の通った指導ができるようになっただけでなく、日常的に授業を振り返りながら改善点について考えるようになり、それをより良い授業実践につなげることができたと感じる。

リサーチを行ってみて、生徒の現状や向上を見取るためのテストは慎重に選ぶ必要があると感じた。生徒の背景知識に偏りがあった場合、一つのパッセージだけでは正確な読解力が測れないということを実感した。次回は、事前・事後のそれぞれのテストで、二つの読解問題を出題することも考えたい。今回の授業改善の経験をいかして、来年度以降も、アンケートやテストを活用しながら、生徒の状況やニーズに合った授業を行っていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

白井恭弘. (2012). 『英語教師のための第二言語習得論』 大修館書店.

Larsen-Freeman, D. & Anderson, M. (2011). *Techniques and Principles in Language Teaching*. Oxford University Press.

生徒の意欲を引き出すリーディング指導の工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	-----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3学年3クラス54名（男子20名、女子34名）の生徒である。英語を上達させたいと思っている生徒が多い。その一方で、実力テストや外部検定の結果から、高校で学習する語彙・文法の知識が十分に身に付いていない、初見の英文を読む力が不足しているという傾向が見受けられる。進路についてはAO入試や指定校推薦で進学する生徒が半数以上を占めている。

解決すべき課題

授業中の取組から、英語を読むことは英文を一字一句日本語に訳す作業だと認識している生徒が非常に多いことが推察される。また、読むことに対してそもそも意欲がわからない、1文1文は訳せるが文章全体の意味が分からないという生徒も一定数いるように思われる。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・英語に関するアンケート（5月実施：回答者数48）

1. 英語を読む力はこれからの生活の中で必要だと思いますか。

そう思う	39人(81.3%)
どちらかといえばそう思う	8人(16.7%)
どちらかといえばそう思わない	1人(2.1%)
そう思わない	0人(0.0%)

2. 英語の勉強について、不安なことや困っていること、知りたいことを書いてください。

（自由記述式の回答において、それぞれの技能等に言及のあったものの人数を示す）

読むこと	文法	単語	書くこと	聞くこと	発音
22人(45.8%)	12人(25.0%)	7人(14.6%)	4人(8.3%)	2人(4.2%)	1人(2.1%)

- ・第1回読解力テスト（5月実施：受験者数44）

実用英語検定準2級（2020年度第1回）の長文読解問題4Bを使い、制限時間を15分間として生徒の読解力を調査した（既存の要点問題4問＋自作の概要問題1問：5点満点）。

0～1点	2～3点	4～5点	平均点	標準偏差
11人(25.0%)	27人(61.4%)	6人(13.6%)	2.3	1.12

＜分析と考察＞

事前アンケートによると、ほとんどすべての生徒が、今後の生活で英語を読む力が必要だと認識していた。その一方で、半数近くの生徒が、読むことに不安を持っていることが分かった。実際、第1回読解力テストで8割（4点）以上得点できた生徒は13.6%にとどまった。また、集中力が続かずにテストの途中でペンを置いた生徒や、すべて無回答の生徒（2名）も見られた。生徒が今後必要だと感じながら、比較的苦手意識の高い英文読解の力を向上させるために、アクション・リサーチによる授業改善を行うことにした。

リサーチ・クエスチョン

自ら進んでまとめた説明文を読み、自分の力で的確に概要・要点を理解する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準2級レベルの長文読解問題に8割以上正答できる生徒が全体の7割以上になる。

改善のための手だて

- 英文トピックに関連した身近な話題についてのプレリーディング活動やゴールタスクに取り組ませれば、内容に関する興味が高まり、英文を読みたいという意欲を高めることができるだろう。
 - ・ 日常生活と関わりがあることについて、生徒の感想や意見を引き出すような発問をする。
 - ・ 動画や写真を使ったオーラルイントロダクションを行う。
 - ・ 実生活とつながりのあるポストリーディング活動を設定する。
- 読解ストラテジーを指導すれば、自分の力で英文を読み進め、的確に概要・要点を理解することができるようになるだろう。
 - ・ 教科書英文の各パラグラフのトピックセンテンスの探し方を指導する。
 - ・ パートごとにタイトルを付ける活動を個人やグループで行うことで、内容のまとまりを意識しながら読むことを促す。
 - ・ 「抽象～具体」の談話構造や、「譲歩～逆説～主張」の論理構成（英検準2級で頻出）についてワークシートを用いて説明する。
- 教科書以外の英文を定期的に自力で読む練習をさせれば、読解のストラテジーを使いながら英文を読むことに慣れるとともに、自信が高まって自分の力で的確に英文の概要・要点を理解することができるだろう。
 - ・ 教科書各パートの「要約文」の順番を無作為に入れ替えたテキストを、正しい順番に並べ替えるタスクに取り組ませる。
 - ・ 100語程度（1パラグラフ）の初見の英文を読んで、トピックセンテンスを探す練習を行う。
 - ・ 過去の英検準2級の長文読解問題について、初めに各パラグラフのトピックセンテンスを探してから問題に解答する練習を複数回行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回読解力テスト（12月下旬実施：受験者数41）

過去の実用英語検定準2級(2017年度第3回)の長文読解問題4Bを使って、前回と同様に生徒の読解力を調査した（既存の要点問題4問＋自作の概要問題1問：5点満点）。

0～1点	2～3点	4～5点	平均点	標準偏差
1人(2.4%)	5人(12.2%)	35人(85.4%)	4.2	1.01

・事後アンケート（12月下旬実施）

1. 昨年と比べ、初見の英文を読む時、筆者の主張や各パラグラフで大切だと思われる文を探しながら読むことを意識するようになったと思いますか。（回答者数46）

そう思う	17人(37.0%)
どちらかといえばそう思う	27人(58.7%)
どちらかといえばそう思わない	2人(4.3%)
そう思わない	0人(0.0%)

2. 1年間授業を受けて変わったと思うことを書いてください。（回答者数36）

（自由記述式の回答において、似たような趣旨の回答をまとめたものの人数を示す）

読解力がついたと思う。	7人(19.4%)
文脈から、単語の意味の推測ができるようになったと思う。	2人(5.6%)
筆者の意見が読み取れるようになったと思う。	2人(5.6%)
英語が楽しいと思うようになった。	12人(33.3%)
英語をもっと勉強したいと思うようになった。	6人(16.7%)
ペアワークなど、他の人で行う活動が楽しいと感じるようになった。	5人(13.9%)
書く能力、話す能力がついたと思う。	2人(5.6%)

<分析と考察>

読解力テストは、約9割の生徒が8割以上の得点率であった。2回分そろっている35名のデータについては統計的に有意な向上が見られ(t 検定： $p=0.00<0.05$)、今回の取組みに一定の成果があったと考えられる。また、事後アンケートでは、ほとんどの生徒（95.7%）が「初見の英文を読む時、筆者の主張や各パラグラフで大切だと思われる文を探しながら読むことを意識できた」と回答した。これらの結果より、全体として、生徒は読解のストラテジーを使いながら英文を読むことに慣れるとともに、自分の力で的確に英文の概要・要点を理解することができるようになったと思われる。

「1年間授業を受けて変わったと思うこと」というオープンなトピックに対する自由記述の中で、30.6%の生徒（11人）が明示的に「読むこと」に言及しており、「英語が楽しいと思うようになった」「もっと勉強したいと思うようになった」という生徒が合わせて50.0%（18人）いた。これらのことから、リーディング指導に焦点を当てた一連の授業改善が、英語学習への関心・意欲や読むことへの意識を高めることに、ある程度寄与したことがうかがえる。

教師の変化

教科書の内容と日常生活との関連を生徒が意識できるような、導入の仕方やタスク・発問を工夫するために、英語そのものにかかわる事柄だけでなく、日頃から世の中の様々な事象やトレンドに興味を抱くようになった。以前と比べて国内外のニュースや雑誌に目を通す機会が増え、英文のトピックに関連する書籍を読んだり、頻繁に他教科の教員と情報交換をしたりするようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・事前調査でも 14.6%の生徒が「単語」に不安があると回答していたが、英文を読んで詳細な内容を理解するには、一定の語彙の知識も不可欠であるため、今後は語彙力強化のための指導も併せて工夫していきたい。
- ・定期試験前以外の英語の自宅学習時間が全体的に少ない（12月のアンケートで「全く勉強していない」と回答した生徒が 60.0%であった）が、より一層難易度の高い英文を読めるようになるには、週あたり 90 分×2 回という限られた授業時間内だけでは足りず、自宅学習が欠かせないため、自律的学習を促す働きかけが必要である。

まとめ・感想

5 年前の初任の頃から、研修や書籍で学んだことや、他の教員から教わった活動を積極的に授業に取り入れてきた。その都度生徒から「毎回いろいろなことを行うので飽きずに授業に取り組めて楽しい」という声もあったが、正直なところ生徒の英語力を伸ばせているのか疑問があった。しかし、今回のリサーチを通して、生徒の現状を調べて課題を認識し、それに応じた指導・活動を行うことで生徒の力が伸びることを体験し、授業に対する自信が持てた。また、今後の課題を可視化することもできた。今後も、生徒が英語力の向上を実感できるような授業を展開していきたい。また、言語面の指導にとどまらず、学ぶ内容が実社会や将来とつながっていることを認識できるような授業を展開することにより、題材を通して得た知識を使って、よりよい社会を構築できるような生徒を育てていきたい。

最後に、毎回新たな知識や技能を学べる刺激的な研修の場を与えて下さった、総合教育センターの皆様から感謝を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編著). (1992). 『学習者中心の英語読解指導』大修館書店.
島田浩史・米山達郎(編著). (2005). 『英語長文読解の王道 パラグラフリーディングのストラテジー
(1) 読み方・解き方編』河合出版.

自立した読み手を育てるリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス79名（男子41名，女子38名）の生徒である。授業中は落ち着いて活動に取り組んでいるが，基礎的な語彙や文法の知識が十分に身に付いていないことがうかがえる。多くの生徒が4年制大学への進学を希望しており，大学入試に向けて勉強しなければいけないという認識はあるが，授業中は積極的な発言があまり見られず，英語に苦手意識をもっている生徒が多い。

解決すべき課題

日ごろの読解活動の様子や生徒からの質問内容などから，長文読解に際し，多くの生徒が逐語読みをする傾向にあり，その結果，個々の文の理解にとどまってしまっていることが懸念される。一語一語の意味に過度にとらわれずに英文を読み進め，文章全体の概要や要点，話の流れなどを的確に読み取る力を身に付けさせたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回アンケート（5月実施：回答者数72）＊人数(%)

1. 初見の英文を読む時，本文の概要を素早く理解することができると感じますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
2人(2.8%)	34人(47.2%)	32人(44.4%)	4人(5.6%)

2. 初見の英文を読む時，筆者の主張だと思われる部分や，大切だと思われる文を探しながら読んでいると感じますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
9人(12.5%)	41人(56.9%)	17人(23.6%)	5人(6.9%)

・第1回リーディングテスト（6月実施：受験者数78）

2019年 大学入試センター試験 第6問（1点×6問：25分）

平均点	標準偏差	最高点（6点）を 取った生徒	最低点（0点）を 取った生徒	4点以上(6割以上) 正解した生徒
2.6	1.32	2人(2.6%)	3人(3.8%)	17人(21.8%)

問題の種類別	概要を問う問題	その他の（要点等を問う）問題
平均正答率	38.5%	44.9%

<分析と考察>

5月のアンケート調査では、読解の際、約半数の生徒が英文の概要を把握できていると感じていることが分かった。また、7割近い生徒が筆者の主張や要点に着目するよう心掛けていると回答した。しかし、6月に実施したリーディングテストでは、4点以上取った（6割以上正解できた）生徒は21.8%であった。さらに、問題の種類別に正答率を調べたところ、概要を問う問題の正答率が低かった。これらの結果から、読解力に関する生徒の自己評価と、生徒の実際の読解力には隔たりがあることが分かった。そこで、的確に概要や要点を読み取る力を育成するための授業改善、特に概要の読解スキル向上のための手だてが必要であると考えた。

リサーチ・クエスチョン

生徒が自力で英文を読み進め、文章全体の概要や要点、話の流れなどを的確に読み取る力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：大学入試センター試験の長文読解問題（第6問）で6割以上正解する生徒が全体の6割以上になる。

改善のための手だて

- リーディングストラテジーを指導すれば、自分の力で英文を読み進めることができるようになるだろう。
 - ・スキミングやスキニングを明示的に指導する。
 - ・ディスコースマーカの指導をし、パラグラフ間の関係を把握する読解活動に取り組ませる。
 - ・英文から、生徒にとって未知語だと思われる語を取り出し、意味を推測する練習をさせる。
- 英文読解のタスクを工夫すれば、よりの確に概要や要点を把握することができるようになるだろう。
 - ・教科書の英文について、要点の理解を促す **information transfer task** を与える。
 - ・読解の副教材について、概要把握のタスク（英文のタイトルを考えるなど）を追加して与える。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回リーディングテスト（12月実施：受験者数75）

2017年 大学入試センター試験 第6問（1点×6問：25分）

平均点	標準偏差	最高点（6点）を取った生徒	最低点（0点）を取った生徒	4点以上(6割以上)正解した生徒
3.0	1.31	2人(2.7%)	1人(1.3%)	25人(33.3%)

問題の種類別	概要を問う問題	その他の（要点等を問う）問題
平均正答率	56.0%	48.5%

・第2回アンケート（12月実施：回答者数 71）＊人数(%)

1. 初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することができますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
0 人(0.0%)	25 人(35.2%)	41 人(57.7%)	5 人(7.0%)

2. 初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読んでいますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
7 人(9.9%)	41 人(57.7%)	17 人(23.9%)	6 人(8.5%)

<分析と考察>

第2回リーディングテストでは、改善の目安には届かなかったものの、6割以上正解できた生徒の割合は21.8%から33.3%まで増加し、一連の手だてに一定の成果があったと考えられる。2回のテストスコアがそろっている73人の合計得点に統計学的な伸びは認められなかったが(t 検定: $p=0.06>0.05$)、特に意識的に指導した概要の読解問題の正答率が前回より17.5ポイント上昇したことで、授業改善の効果を実感することができた。

第2回アンケートでは、読解に際し「概要を素早く理解することができる」「筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読んでいます」という生徒の割合は減少してしまった（それぞれ50.0%→35.2%，69.4%→67.6%）。これは、授業中に読解タスクに繰り返し取り組んだり、センター試験のような難易度の高い問題に挑戦したりする中で、生徒が自身の読解力について「まだまだ十分ではない」ということをより客観的に自覚したためであると推察される。

教師の変化

- ・英文の概要や要点の的確な読み取りのために、より適切なタスクを考えられるようになった。
- ・生徒の課題を把握した上でゴールを設定し、どのように目標達成へと導くかを念頭に置きながら授業展開を考えるようになった。
- ・生徒が取り組む一つひとつの活動の目的を考えるようになり、目的に応じて指導の仕方を工夫するようになった。
- ・それぞれの活動について、生徒に目的や目標を明示した上で取り組ませるようになった。
- ・データ収集を行い、長期的な視点で生徒の成長を考えるようになった。
- ・長期的な学習到達目標を達成するために、教員間の指導の統一、連携をより意識するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・読解活動を中心に授業を展開したため、コミュニケーション活動が乏しくなってしまうことがあったので、プレリーディング活動やポストリーディング活動としてコミュニケーション活動を取り入れるなど、バランスの良い授業展開を工夫していきたい。
- ・長期の指導目標と指導計画、目標への到達度を測るテストや評価方法を事前に立案をした上で、授業の構成を考えていきたい。
- ・ワークシートの共有などにより、担当者間で基本的な指導方針の確認はできているが、今後は各活動のねらいや取りませ方など、より詳細なレベルで一致した指導の実現を目指したい。
- ・文構造や語彙の指導の際、使用場面やコロケーションを提示するなど、読解やその他の技能に役立つ言語知識として定着するための工夫をしていきたい。

まとめ・感想

今回の授業改善プロジェクトを通じ、これまでの自分の授業展開を一から考え直すようになった。生徒の現状の課題と解決策を考え、目標を達成するために授業で何を指導するべきなのかを模索し、授業のつくり方について深く考えるようになった。以前は自分自身の経験に頼って授業を行っていた部分があったが、生徒の実態を把握し、生徒を伸ばす手だてを考え、成果を分析していくことで今まで気付かなかった生徒の成長や課題をより客観的に知ることができた。そして、その課題を解決していくことに改めて授業の楽しさを感じ、教師としてのやりがいを実感できた。また、この研修を通して、より一層自己研鑽に励み、引き続き体系的な授業づくり・授業改善に取り組んでいく必要があると強く感じた。

最後に、このような機会を与えていただいたこと、リサーチに協力してくれた生徒、ご支援していただいた皆様方に心から感謝を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司. (2011). 『英語で英語を読む授業』 研究社.

概要・要点を的確に理解するためのリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス38名（男子15名、女子23名）の生徒である。英語への関心はあまり高くはないが、授業には積極的に取り組む姿勢が身に付いている。例年4割程度が4年制大学への進学を希望しているが、そのほとんどが総合型・学校推薦型選抜で進学している。

解決すべき課題

教科書本文を和訳することが授業の中心となっており、学習した内容を丸暗記することが英語学習であると生徒たちに認識させてしまっていることが課題としてある。自分の力で英文の要点や概要を把握するスキルを育成することが必要である。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回アンケート（5月実施：回答数38）＊人数(%)

1. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
3人(7.9%)	14人(36.8%)	16人(42.1%)	5人(13.2%)

2. 初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識していますか。

かなり意識している	まあまあ意識している	あまり意識していない	ほとんど意識していない
2人(5.3%)	9人(23.7%)	21人(55.3%)	6人(15.8%)

3. 初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することができていますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
0人(0.0%)	10人(26.3%)	21人(55.3%)	7人(18.4%)

<分析と考察>

半数以上の生徒が英語学習に否定的な感情を抱いていた。また、7割以上の生徒が筆者の主張等を意識せずに英文を読み進めており、そのためか、7割以上の生徒が読解時に英文の概要を素早く把握できていないことが分かった。これらの結果から、生徒が英語学習に興味を持ち、リーディングスキルを向上させることができるよう、これまでの指導を改善することが必要であると改めて感じた。

・第1回リーディングテスト（5月実施：受験者数 35）＊人数(%)

内容：英検準2級の長文読解問題（設問 5 問＝要点問題 4 問＋自作の概要問題 1 問：1 点×5）

平均点	標準偏差	最高点	最低点	3 問以上正解した生徒
2.7 点	1.35	5 点	0 点	17 人(48.6%)

問題番号別正解者数

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5 (概要)
28 人(80.0%)	7 人(20.0%)	22 人(62.9%)	21 人(60.0%)	15 人(42.9%)

<分析と考察>

約半数の生徒が 3 問（正答率 6 割）以上正解しているが、設問によっては正答率が 2 割の問題もあった。設問中の単語と本文中のその出現箇所を照らし合わせることにのみによって解答を選択し、必ずしも要点を正しく理解できていない生徒が多く、その方法の（偶然の）成否によって得点が左右されているということが推察された。問題種別に見てみると、半数以上の生徒が概要を正しく理解できていなかった。これらの結果から、概要や要点を的確に把握しながら読み進めるための、リーディングストラテジーを指導することが必要であると考えた。

リサーチ・クエスチョン

英検準2級程度の初見の英文を自分の力で読み、概要・要点を的確に理解する力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準2級の読解問題の正答率が 6 割以上の生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 導入活動や読解タスクを工夫すれば、英文を理解するための視点が分かり、自分の力で英文を読むことに役立つだろう。
 - ・オーラルイントロダクションを通して、スキーマの活性化を図る。
 - ・読解の支援として、グラフィックオーガナイザーのタスクを与える。
- リーディングストラテジーを指導すれば、自分の力で英文を読み進め、概要・要点を的確に理解することに役立つだろう。
 - ・キーワードからおおよその内容を予測させる。
 - ・文脈から未知語を推測するタスクに取り組ませる。
 - ・ディスコースマーカに注目する読み方を指導する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回アンケート（12月実施：回答数 35）＊人数(%)

1. グラフィックオーガナイザーは本文の理解に役立ちましたか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
13 人(37.1%)	20 人(57.1%)	2 人(5.7%)	0 人(0.0%)

2. 初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識していますか。

かなり意識している	まあまあ意識している	あまり意識していない	ほとんど意識していない
2 人(5.7%)	13 人(37.1%)	16 人(45.7%)	4 人(11.4%)

3. 初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することができていますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
0 人(0.0%)	8 人(22.9%)	22 人(62.9%)	5 人(14.3%)

<分析と考察>

ほぼすべての生徒がグラフィックオーガナイザーは本文の理解に役立ったと回答した。これまでは英文を日本語に訳し、意味を捉えようとしていたが、グラフィックオーガナイザーのタスクを与えることで、難解な英文であっても生徒が自力で英文を読み進める様子が授業中に観察された。また、本文中から該当箇所を英語で抜き出すのではなく、日本語での空所補充とすることで、自分なりの言葉で要点を整理することにも効果があったと考えられる。

初見の英文を読む時に筆者の主張等を意識しながら英文を読み進めていると回答した生徒の割合は 29.0%から 42.8%に増加し、特にディスコースマーカに注意して読むストラテジーの指導に一定の効果があったことがうかがえたが、英文の概要を素早く理解できていると回答した生徒の割合は低い水準にとどまり、26.7%から 22.9%に減少した。これは、もともと生徒の英語力に比して教科書の難易度が高く、学習したリーディングスキルを初見の英文を読解する際に十分にいかすことができなかったためと推察された。

・第2回リーディングテスト（1月実施：受験者数 28）＊人数(%)

内容：英検準2級の第4問B（設問5問＝要点問題4問＋自作の概要問題1問：1点×5）

平均点	標準偏差	最高点	最低点	3問以上正解
2.3 点	1.58	5 点	0 点	10 人(35.7%)

問題番号別正解者数

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5 (概要)
14 人(50.0%)	13 人(46.4%)	10 人(35.7%)	12 人(42.9%)	14 人(50.0%)

各テストにおける得点分布

	5 点	4 点	3 点	2 点	1 点	0 点
第1回(35 人)	3 人(8.6%)	8 人(22.9%)	6 人(17.1%)	12 人(34.3%)	4 人(11.4%)	2 人(5.7%)
第2回(28 人)	4 人(14.3%)	3 人(10.7%)	3 人(10.7%)	6 人(21.4%)	10 人(35.8%)	2 人(7.1%)

<分析と考察>

正答率が6割以上の生徒を全体の7割以上にするという改善の目安には届かなかった。事後調査の結果からもうかがえるように、初見の英文の要点や概要を支援なしで理解するにはまだまだ時間を要することが分かった。3年間を見通し、1年次から計画的に語彙・文法やストラテジーの指導を行い、リーディングスキルの定着を図る必要性を痛感した。また、2回のテストの得点分布を比較すると、

1 点以下の生徒が増加していた。教科書の難易度の高さや早期の進路決定による学習意欲の低下などによる読解力の伸び悩みが、第2回リーディングテストの結果から浮き彫りになった。一方、一般受験に向けて英語学習に対する意欲を高く維持している生徒たちの多くが第2回リーディングテストを受験できていないにもかかわらず、5 点満点を得点した生徒が 4 人(14.3%)いた。一連の手だてが **advanced reader** を育てることに役立ったと考えることができ、嬉しく感じる。より多くの生徒が、評定など受験のための数値結果だけを目指すのではなく、中長期的視点で英語学習の意義を理解し、最後まで意欲的に取り組み、英語力の向上を感じられるような授業へと改善していく必要がある。

教師の変化

- ・オーラルイントロダクションやグラフィックオーガナイザーなど、本文の読解を支援する工夫を凝らすために、より教材研究に力が入り、自分自身が授業を楽しく感じることができるようになった。
- ・多様な読解タスクを準備するために、教科書本文の内容やハンドアウト作成について今まで以上に同僚と協働し、連携することができた。
- ・定期考査を作成する際、学習したリーディングスキルを測ることのできる作問を意識するなど、改めて指導と評価の一体化を進めることができた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・自主的な読解を促す支援を様々講じてきたが、「適切なヒント」を提示することに難しさを感じたので、今回導入した以外の手法についても、研究と実践を繰り返していきたい。
- ・概要や要点を自分なりに整理できておらず、設問が文中の英語と異なる表現で書かれていると正答できない、という生徒が少なからずいたので、内容を自分の言葉で要約させるなどのタスクにも取り組ませていきたい。
- ・引き続き的確な内容理解を目標としながら、読む速度の向上も目指したい。

まとめ・感想

アクション・リサーチを行うことで日々の授業への向き合い方が変わり、授業改善をしていくきっかけとなった。リーディングを研究のターゲットスキルに据えて課題を探てみると、最低限の語彙力はもちろん、読解を進めるにあたって英文全体の論理展開を考えたり、文章の概要をつかんだりする力がどれだけ重要であるかに改めて気付かされた。英文の内容や構成を的確に理解させるための指導方法を考え、実践していくプロセスは自分自身の勉強にもなり、指導方法を検討する過程で同僚との協働・連携も強化することができた。今後も質の高い授業を追求し、自己研鑽を続けていくことで、一人でも多くの生徒に英語を好きになってもらいたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平他(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』 大修館書店.

会話を続ける力を身に付けさせるためのスピーキング指導

科目名	英語表現 I	学 年	1	形 態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------	-----	---	-----	-----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1年生1クラス20名（男子10名，女子10名）の生徒である。活発な生徒が多くコミュニケーション活動にも積極的に取り組むことができ、英語学習にとっても前向きな姿勢が見られる。ほとんどの生徒が4年制大学への進学を希望しており，全体の約3割の生徒が指定校推薦を利用している。約7割の生徒が英検3級を取得しており，中学校既習の英単語，英文法などの基礎的な言語知識はおおむね身に付いている。

解決すべき課題

多くの生徒がコミュニケーションを通して相手のことを知ることを楽しんでいるが，既習の言語知識を英会話や英作文などの表現活動で使うことには，難しさを感じているようである。教科書英文の読解の過程等で学習した語彙・文法を，基礎的なものであっても，発信の場面で活用できていないように思われる。基礎的な言語知識を，質問したり答えたりするコミュニケーションの場面で，適切に使えるようになるための指導の工夫が必要である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回アンケート調査（4月実施：回答者数20）＊人数(%)

1. あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
5人(25.0%)	9人(45.0%)	3人(15.0%)	3人(15.0%)

2. この授業で特にどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（1つ選択）

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	単語や熟語の知識	文法の知識
2人(10.0%)	8人(40.0%)	4人(20.0%)	3人(15.0%)	0人(0.0%)	3人(15.0%)

3. 英語を話すことについて，どのようなことを話してみたいですか。

自分，家族，学校などの紹介	身近な事柄についての簡単な説明	聞いたり読んだりしたことに対する簡単な意見・感想	身近な話題に関する意見	社会問題に関する意見
0人(0.0%)	8人(40.0%)	5人(25.0%)	7人(35.0%)	0人(0.0%)

<分析と考察>

全体の7割の生徒が英語学習に対して好意的で，授業を通して伸ばしたい力としてはスピーキング能力と回答した生徒の割合が4割と最も高かった。また，全体的に，アカデミックな内容よりも，よ

りカジュアルで身近な事柄について話せるようになりたいと考えていることが分かった。これらの結果から、基礎的な会話力の向上を目指した指導を重点的に行っていく必要があると感じた。

・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数19）

テスト内容：与えられたトピック（“Food”）について、2人1組で1分間自由に会話を行う。

評価方法：ルーブリックによる分析的評価

	質問力	応答力	話し方
A	S+V を含むおおむね正確な文の形で発話ができおり、相手の発言に対して自然な流れになるように適切な質問ができている。	S+V を含むおおむね正確な文の形で発話ができおり、相手の発言に対して自然な流れになるように適切な応答ができている。	相手の目を見ながら、十分な明瞭さ・声量で、言いよどみなく話している。さらに、強勢・速度を調整する、相槌を打つなど、コミュニケーションへの積極性が見られる。
B	単語・語句のみの発話がしばしば見られるが、おおむね適切な質問ができている。	単語・語句のみの発話がしばしば見られるが、おおむね適切な応答ができている。	相手の目を見ながら、十分な明瞭さ・声量で、おおむね言いよどみなく話している。
C	意味伝達に支障をきたす誤り等のため、適切な質問にならないことがある。	意味伝達に支障をきたす誤り等のため、適切な応答にならないことがある。	アイコンタクトや明瞭さ・声量が十分でない、沈黙が長く続くなど、会話の継続に支障をきたすことがある。

結果：人数(割合)

	質問力	応答力	話し方
A	4人(21.1%)	2人(10.5%)	2人(10.5%)
B	13人(68.4%)	15人(78.9%)	13人(68.4%)
C	2人(10.5%)	2人(10.5%)	4人(21.1%)

<分析と考察>

実際に生徒の会話を聞いてみると、「正確な文の形」で発話できる生徒が1～2割で、残りの生徒に関しては、単語での質問・応答が中心であった。また、質問が思いつかず、やり取りが止まってしまう様子も見られた。文の形式での会話が必ずしも自然であるとは言えないが、まずは正確な文の形で、自然なテンポで会話を続ける力を身に付けさせる必要があると感じた。実際に、第1回スピーキングテスト実施後の生徒の感想においても「質問が思い浮かばなかった」「沈黙が続いてしまった」「文を組み立てるのが難しかった」などの記述が目立った。

以上のことから①正確な文を組み立てる力、②その場に適した「質問」「応答」「話し方」をすることができる力、の2点を重点的に指導する必要があると考えた。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について、会話を続ける力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：スピーキングのルーブリック評価のすべての項目で、A 以上の生徒がそれぞれ全体の30%以上になる。

改善のための手だて

- 会話の流れやストラテジーを指導し、短い会話活動を継続して行えば、会話を続ける力が身に付くだろう。
 - ・会話のフレームを使用し、会話の流れを意識させる。
 - ・リアクション表現や聞き返し表現などを指導し、繰り返し練習させる。
- 疑問文等の文構造を明示的に指導し、練習させれば、正確な英語で発話できるようになるだろう。
 - ・ペアでのパターン・プラクティスを、場面設定を変えながら行い、文法や表現の定着を図る。
 - ・事前に発話のモデルを示して、疑問文などの文構造について解説し、使う練習をさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回アンケート調査（12月実施：回答者数18）＊人数(%)

1. あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
1人(5.6%)	7人(38.9%)	9人(50.0%)	1人(5.6%)

2. ペアでする活動についてどう思いますか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
11人(61.1%)	7人(38.9%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

3. 英語を話す力はこれからの生活の中で必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
9人(50.0%)	9人(50.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

<分析と考察>

第1回アンケートに比べて、第2回アンケートでは英語学習に対して苦手意識を持つようになった生徒が増えてしまった。高校で学ぶ新出文法の難しさや、覚えるべき単語の多さに不安を感じたことがその原因ではないかと思われる。一方で、対象生徒全員がペアワークに対して前向きな回答をしており、英語を話す力の重要性について認識していることが分かったことは、とても喜ばしい。これらの結果から、中学校英語とのギャップを少しでも埋めるためにも、教師から生徒へ知識を伝達するというような一方通行の授業ではなく、生徒同士の対話を中心としたより実践的な活動を、これまで以上に多く取り入れ、生徒たちが自身の成長を感じられるような授業にしていく必要があると感じた。

・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数19）

※テスト内容・評価方法は第1回スピーキングテストと同様

結果：人数(割合)

	質問力	応答力	話し方
A	8人(42.1%)	8人(42.1%)	4人(21.1%)
B	11人(57.9%)	11人(57.9%)	15人(78.9%)
C	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

＜分析と考察＞

3観点すべてにおいて向上が見られた。それぞれの比較データを検定（Wilcoxonの符号付順位検定）にかけたところ、統計学的に有意な向上が認められた（質問力： $p=0.02<0.05$ ，応答力： $p=0.01<0.05$ ，話し方： $p=0.02<0.05$ ）。第1回スピーキングテスト時の課題であった「質問が思い浮かばなかった」「沈黙が続いてしまった」「文を組み立てるのが難しかった」などについても、改善の傾向が見られた。しかし、第2回アンケート調査の自由記述でスピーキングテストに言及したコメントには、「簡単な文法しか使えなかった」「一問一答のようになってしまった」などの課題意識も見られた。今後の授業づくりの参考にして、新たな手だてを考える必要があると感じた。

教師の変化

年度初めにアンケート調査を実施し、生徒の現状やニーズを把握し課題を発見することにより、1年間という長期のビジョンをもって授業をデザインしていくことができた。また、事前・事後テストを実施することで、目に見える生徒の成長を実感することができた。さらに、同じ志をもった他の教師と情報をシェアすることができた結果、互いのスキルアップに繋がり、自身の成長を感じることができた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・今回は1年生の英語表現Ⅰの1クラスだけを対象にアクション・リサーチを行ったが、今後は他の科目でも実践できるようになりたい。
- ・個人だけではなく、学校の英語科という組織として取り組んでいく必要があると強く感じた。
- ・より質の高い授業を生徒に提供するためにも、自分自身が英語学習者の一人として、これからも英語を学び続けなければならないと感じた。

まとめ・感想

アクション・リサーチを行うことにより、生徒の課題が浮き彫りになり、単元目標の設定や授業のデザインがしやすくなった。スピーキング能力はすぐに上達するものではないが、生徒たちがスピーキングの重要性を強く感じていることがとても嬉しい。1年間、生徒たちは前向きに粘り強く活動に取り組んでくれたと感じている。また、この研修で学んだこと、経験したこと、知り合うことができた教員が、英語教師としての大きな財産となった。“Practice makes perfect.”を胸に、来年度以降も神奈川県英語教育に貢献していきたい。

論理的・発展的なインタラクションの技能を育てる指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学 年	1	形 態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	-----	---	-----	-----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は、習熟度別基礎クラスの2クラス48名（男子14名、女子34名）の生徒である。学年のおおよそ9割が大学・短大への進学を希望している。多くの生徒が授業に積極的かつ真面目に参加している一方で、これまでのテスト結果などから、英語に苦手意識を持っている生徒も少なからずいることが推察される。

解決すべき課題

準備をしていれば、自分の考えを英語で話すことができるが、質問などをされるとそれ以上の意見を述べるのが難しい。また相手の意見を踏まえて自分の意見を発展させることについても課題がある。そのため会話が途中で止まってしまい、会話の内容が深まらない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・事前アンケート（5月実施：回答者数47）

1. 英語の授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。1～3個選んでください。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	単語・熟語力	文法の知識
11人(23.4%)	35人(74.5%)	11人(23.4%)	11人(23.4%)	9人(19.1%)	1人(2.1%)

2. どのようなことを英語で話せるようになりたいですか。すでにできていると思うこと以外で、1～2個選んでください。

自分・家族・学校などの紹介	身近なことがらについての簡単な説明	聞いたり読んだりしたことへの意見・感想	身近な話題に関する意見	社会的な問題に関する意見
4人(8.5%)	16人(34.0%)	9人(19.1%)	20人(42.6%)	13人(27.7%)

3. あなたは英語が得意だと思いますか、苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
1人(2.1%)	24人(51.1%)	12人(25.5%)	10人(21.3%)

<分析と考察>

7割を超える生徒が「英語を話す力」を伸ばしていきたいと考えており、特に身近なことがらや話題について話せるようになりたいと考えている傾向が見られた。一方、半数近い生徒が英語を苦手と捉えているため、話す力の向上によって、英語に対する苦手意識を減少させたいと考えた。

・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数 47）

テスト内容：What news are you interested in these days?

テスト方法：生徒が自身の興味あるニュースについて説明し，それに対して ALT が質問をする。

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	Content	Delivery	Accuracy
5	✓ opinion with logical reasons ✓ good response		
4	✓ opinion with logical reasons ✓ need more response		
3	✓ opinion without logical reasons ✓ need more practice for response	✓ good eye contact and good speed	✓ well pronounced with good stress on words and good flow with correct usage of English
2	✓ opinion without logical reasons ✓ no response	✓ eye contact and speed are acceptable	✓ sometimes has the wrong pronunciations, stress on words and usage of English
1	✓ no opinion ✓ no response	✓ no attention to eye contact and speed	✓ no attention to pronunciation / incorrect sentence

結果

	Content	Delivery	Accuracy
5	18 人(38.3%)		
4	3 人(6.4%)		
3	23 人(48.9%)	23 人(48.9%)	8 人(17.0%)
2	3 人(6.4%)	23 人(48.9%)	39 人(83.0%)
1	0 人(0.0%)	1 人(2.1%)	0 人(0.0%)

<分析と考察>

「内容」については，論理的に自身の意見を述べ，質問におおむね適切に答えられた生徒（評価 5, 4）は 44.7%であった。「話し方」については，おおむね適切であったが，緊張で言葉が出てこない生徒もいた。「正確さ」については，発音・語法，文構造の誤りも散見されたが，全体的にはコミュニケーションに支障のない発話はできていた。そこで，より論理的，具体的にメッセージを伝え，相手の発話により適切な反応・応答ができるよう，話す内容面の向上に焦点を当てて授業改善を進めることにした。

リサーチ・クエスチョン

論理的・発展的な内容を口頭でやり取りする力を身に付けさせるには，どのような指導をすればよいか。
改善の目安：・評価ルーブリックの項目で，内容の評価が 5 点満点中 4 点以上になる生徒が全体の 8 割以上になる。

・アンケート調査で「話す力が伸びた」と答える生徒が，全体の 8 割以上になる。

改善のための手だて

- 目的・場面・状況を設定した発話練習を継続的に行えば、より主体的に論理的な内容を発話できるようになるだろう。
 - ・単元のパートごとに、徐々に自由度を高めたスピーキングタスク（ペア・グループ）を設定する。
 - ・活動の前に、インターネット等を使用してリサーチさせ、目的に応じた表現や Visual aidsなどを準備させる。
- コミュニケーションの相手の発話に適切に反応した上で、発話内容を踏まえた応答をする練習を行えば、よりスムーズで発展的なやり取りができるようになるだろう。
 - ・相手が話しやすい雰囲気を作るための表現（Wow! / I see. / I agree. / That's a good idea! など）を指導し、使用を促す。
 - ・相手の意見を聞き取り、理解を示しながら、同意したり、対案を述べたりする練習をさせる。
- 意見・考えを構築するための言語的な支援を与えれば、自分の力で論理的に発話内容をまとめることができるだろう。
 - ・話す内容や視点のヒントとして、話題に関連するキーワードをいくつか提示する。
 - ・話題について話すために必須となる（役に立つ）文構造や表現をあらかじめ与えておく。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数43）

テスト内容：グループで研修旅行の行き先を決める（問題解決タスク）。

テスト方法：各自の提案を4人グループで協議させ、一人ひとりの発話を個別に見取る。

評価方法：自作ルーブリック（第1回で使用したもの）による分析的評価

	Content	Delivery	Accuracy
5	22人(51.2%)		
4	14人(32.6%)		
3	6人(14.0%)	28人(65.1%)	9人(20.9%)
2	1人(2.3%)	15人(34.9%)	34人(79.1%)
1	0人(0.0%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

<分析と考察>

第2回のテストでは、他者の発話を踏まえた論理的・発展的なインタラクションの技能を見取るため、形式を「問題解決のためのグループ協議」に変更した。「内容」の評価で5点満点中4点以上になった生徒の割合は83.8%となり、改善の目安に達した。2回のテストを受験した43名の評価データを検定(Wilcoxonの符号付順位検定)にかけたところ、有意な向上が認められた($p=0.00<0.05$)。なお、「話し方」についても全体的に向上した(同検定： $p=0.01<0.05$)が、「正確さ」の評価にはほとんど変化がなかった。発話内容の質や相手意識は高まったものの、まだメッセージを伝えることに多くの注意が向けられていたため、言語的な正確さについては、ほぼ現状のままであった、ということが推察される。

・事後アンケート（１２月実施：回答者数 47）

１．あなたはこの授業を通して英語を話す力が伸びたと感じますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
16 人(34.0%)	27 人(57.4%)	4 人(8.5%)	0 人(0.0%)

２．話す内容に説得力があるように意識して話せるようになりましたか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
7 人(14.9%)	34 人(72.3%)	6 人(12.8%)	0 人(0.0%)

３．４月と比べて英語で話すことに自信を持てるようになりましたか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
8 人(17.0%)	24 人(51.1%)	14 人(29.8%)	1 人(2.1%)

＜分析と考察＞

英語を話す力が伸びたと実感できた生徒は 91.4%となり、改善の目安である 8 割を大きく超えることができた。また、説得力のある内容を話すように意識するようになったという生徒も 8 割を超えている。しかし、その一方で、英語を話すことに自信が持てない生徒が 3 割程度いることから、今後その原因を明らかにして、改善していく必要があるだろう。

教師の変化

これまで、単元ごとの目標は決めていたが、「話すこと」などの技能について、年間の到達目標を決めて授業づくりをすることがなかった。今回そのような目標を設定したことで、大きなゴールに向けた各単元の位置付けや指導・活動の目的や流れが明確になり、授業の段取りを組みやすくなった。また、生徒にアンケートを取ったり、結果を分析したりすることで、今まで以上に生徒の変化に敏感に気付くことができるようになった。その結果、これまで以上に生徒の取組みを観察するようになり、生徒のニーズや困っていることに対応する力も身に付いたと思う。

今後の課題（次の改善点など）

今回のリサーチを通して、英語を話すことについて、「正確さ」と「自信」に向上の余地があることが分かった。正確に話せることが自信につながるとすれば、重要な表現や文構造については繰り返し指導し、使用場面を増やすなど、生徒が自ら使える英語を着実に習得できるような工夫が必要である。

まとめ・感想

この授業改善の中で、様々な教授法についての知識を得られたことは、自分自身の大きな財産になった。しかし、一番大きな収穫は生徒とのつながりがとても強くなったことだと考えている。生徒の「話す力」を向上させるために様々な活動を行い、生徒のニーズや成果を分析した。その過程こそが信頼関係を構築するものであったと実感している。これからも自己研鑽に努め、生徒がより楽しく参加できる、充実した授業づくりに励んでいきたい。

論理的に意見をやり取りする力を養うスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	-----	---	-----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス80名(男子34名、女子46名)の生徒である。年度当初のアンケートでは「英語が好き・どちらかと言えば好き」と答えた生徒は67人(83.8%)、また高校入学前までに英検準2級以上を取得した生徒は65人(81.3%)おり、英語力も学習意欲も非常に高い。9割以上が4年制大学への進学を希望しており、英語4技能の向上を意識して積極的に授業に取り組む生徒がほとんどである。

解決すべき課題

- ・英語を話すことには意欲的であるが、説得力や論理性を持って自分の意見を述べることには苦手意識がある。
- ・前もって準備した内容を英語で発表することは得意であっても、「言いたいことをすぐに英語にできない」等、即興の会話でのスムーズなやり取りが困難な時がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート調査：英語学習について（4月実施：回答者80名）

1. 最も伸ばしたいのは次のうちどれですか。（一つ選択）

聞く力	読む力	話す力	書く力	語彙	文法
12人(15.0%)	15人(18.8%)	36人(45.0%)	3人(3.8%)	12人(15.0%)	2人(2.5%)

2. これまでの英語学習において、読んだり聞いたりした英文を「自分ごと」として捉え、その内容について深く考えたことがありますか。

毎回している	半分以上している	時々している	全くしたことがない
4人(5.0%)	19人(23.8%)	49人(61.3%)	8人(10.0%)

<分析と考察>

アンケート結果から、半数近くの生徒がスピーキング力を伸ばしたいと考えていることが分かった。自由記述のコメントからは、大学入試を意識した4技能試験対策というより、海外旅行や日常会話といった、身近な場面での会話力向上に興味がある生徒が多いことがうかがえた。また、これまでに触れた英文を「自分ごと」と捉えている生徒は少なく、表面的な意味理解にとどまっていることが推察された。そこで、学習した内容についての深い理解を、話す活動につなげることで、統合的に英語力を伸ばしていくことができるのではないかと考えた。

・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数 79 名）

テスト内容：教科書本文（京大教授の山中伸弥氏の座右の銘に関する英文）を読み、自分にとって座右の銘となる「英語の名言」について、自分の経験を踏まえて発表する。発表の内容について教師が英語で質問をし、生徒は即興で答える。

評価方法：自作ループリックによる評価

評価	発表力	応答力
A	フレームを活用して自分の言葉として意見を述べられている。	質問に対し適切に答え、理由や考えなどを補足できている。
B	フレームを用いて意見を伝えられている。	質問に答えられている。
C	意見を全く伝えられていない。	質問に答えられていない。

結果：

評価	発表力	応答力
A	63 人(79.7%)	24 人(30.4%)
B	16 人(20.3%)	55 人(69.6%)
C	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)

<分析と考察>

「発表力」については、内容が既習事項でありフレームを活用した練習も行っていたことから、8割近くの生徒が A 評価になった。一方で、質問に対する即興での「応答力」については、A 評価となった生徒は 3 割程度であった。B 評価の生徒の応答には、①英文の内容理解が表面的で、感想的な意見は言えても、理由や具体例などではなく論理的でない、②一応意見は言っているが、適切な表現が思いつかないため長い沈黙が続く、などの特徴が見られた。

リサーチ・クエスチョン

英文を「自分ごと」として理解し、その内容についての意見を論理的にやり取りできる力を養うためには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：スピーキングテストの「応答力」の評価で A 評価となる生徒が 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 英文の内容を深く考えるポストリーディングタスクを与えれば、能動的な読みを促し自分の意見を持たせることができるだろう。
 - ・内容に関連した推論発問を出題し、意見交換させる。
 - ・内容に関連した課題解決型プロジェクト学習を実施し、意見を発信する力を高める。
- 会話に必要な表現や技能を身に付けさせれば、スムーズな意見交換ができるようになるだろう。
 - ・意見を伝えるためのフレームを活用しながら、言い換え等の方略を指導し練習の機会を増やす。
- 自律的な語彙学習に取り組ませれば、発信のための語彙習得への意識が高まるだろう。
 - ・活動時に英語で言えなかった表現を、継続的に各自の「表現集」に記録させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回スピーキングテスト（11月実施：受験者数 79 名）

テスト内容：教科書本文（カカオプランテーションにおける児童労働問題に関する英文）を読み、その解決のために自分ができる行動について意見を発表する。発表内容について教師が英語で質問をし、生徒は即興で答える。さらに、会話の流れの中で、生徒から教師へ英語で質問をする。

評価方法：自作ループリックによる評価 ※新たに「質問力」を追加

評価	発表力	応答力	質問力
A	フレームを活用して自分の言葉として意見を述べられている。	質問に対し適切に答え、理由や考えなどを補足できている。	会話の流れを踏まえ、自然に質問できている。
B	フレームを用いて意見を伝えられている。	質問に答えられている。	不自然さがあったりスムーズさに欠けたりするものの、質問をすることができている。
C	意見を全く伝えられていない。	質問に答えられていない。	質問をしていない。

結果：

評価	発表力	応答力	質問力
A	77 人(97.5%)	59 人(74.7%)	27 人(34.2%)
B	2 人(2.5%)	20 人(25.3%)	52 人(65.8%)
C	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)

・第2回アンケート調査：英語力の向上について（11月実施：回答者 79 名）

1. 年度当初に比べ、最も伸びたと思う能力は次のうちどれですか。（一つ選択）

聞く力	読む力	話す力	書く力
4 人(5.1%)	26 人(32.9%)	37 人(46.8%)	12 人(15.2%)

2. 最も課題だと思う能力は、次のうちどれですか。（一つ選択）

聞く力	読む力	話す力	書く力
18 人(22.8%)	26 人(32.9%)	23 人(29.1%)	12 人(15.2%)

3. 「Bento プロジェクト」※1 や児童労働撲滅(ACE)に向けた行動計画の発表などの課題解決型学習は、教科書の英文を「自分ごと」と捉えて読み、自分の意見を考えることに役に立ちましたか。

大いに役に立った	ある程度役に立った	あまり役に立たなかった	全く役に立たなかった
41 人(51.9%)	33 人(41.8%)	5 人(6.3%)	0 人(0.0%)

4. 後期の授業で取り入れた「OREO」※2 などのフレームは、他者と論理的に意見のやり取りをすることに役に立ちましたか。

大いに役に立った	ある程度役に立った	あまり役に立たなかった	全く役に立たなかった
57 人(72.2%)	21 人(26.6%)	1 人(1.2%)	0 人(0.0%)

5. 後期の授業で取り入れた「My Dictionary for Speaking English」※3 は、発信のための語彙の増強に役に立ちましたか？

大いに役に立った	ある程度役に立った	あまり役に立たなかった	全く役に立たなかった
29 人(36.7%)	44 人(55.7%)	6 人(7.6%)	0 人(0.0%)

＜分析と考察＞

スピーキングテストでは、「応答力」A 評価の生徒が 7 割を超え、改善の目安に達した。「発表力」については、ほとんどの生徒が A 評価になり、さらなる進歩が見られた。79 名の評価データについて検定（Wilcoxon の符号付順位検定）を行ったところ、統計学的にも有意な向上が認められた（発表力： $p=0.00<0.05$ ，応答力： $p=0.00<0.05$ ）。一方、新たに追加した「質問力」については、7 割近い生徒が「自然な流れで質問すること」に課題があることが分かった。アンケートでは、最も多くの生徒が話す力の向上を実感していたものの、統合的な伸長を目指した読む力には 3 割以上の生徒が課題を感じていた。改善の手だてとしたポストリーディングタスクや論理フレーム、自律的語彙学習ツールについては、いずれも 9 割以上の生徒が有益であると感じていた。自由記述には、「Bento プロジェクトのおかげで、社会貢献という視点で捉えて英文を読めた」「OREO を用いて繰り返し練習したことで、自信を持って自分の意見を述べられた」等のコメントが多かったので、これらの手だては、今後も発展的に継続していきたい。課題として残った読解指導については、読解活動の見直し、読解方略の指導などを積極的に行い、能動的な読みを促していきたい。

※1 オリジン東秀株式会社と協働で「食の多様性」「SDGs」をテーマにした弁当を開発し、英語でプレゼンテーションを実施して、No.1 弁当を決定するプロジェクト（No.1 は同社開発チームによりサンプル化）

※2 O(opinion) / R(reason) / E(example or explanation) / O(opinion) の論理構造を用いた意見を述べるための枠組み

※3 会話に役立つフレーズや言い回しを記録するための冊子（パラフレーズのコツや会話方略等もメモする）

教師の変化

課題解決型学習を中心とした、会話力向上に有効な様々な活動の成果について、生徒の変化を数値化し客観的に検証できたことで、今後の指導方針を深く考え、確立していくことができた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・「自然な流れで質問する力」を向上させるため、効果的なストラテジーの指導や練習を行う。
- ・課題解決型学習について教科横断的取組を図る（「探究の時間」での調べ学習やまとめ作業など）。

まとめ・感想

今回の研修を通じ、生徒のニーズは多岐にわたりすべてを授業内で網羅できないからこそ、授業外でも継続的に学び続けられるよう動機付けを行うことが重要と実感した。生徒の自律的学習を促すために、「英語を学ぶこと自体楽しい」「もっと上達したい」と思える授業、すなわち「メリハリがあり、ワクワクする授業」「ライブ感・一体感があり、協働できる授業」「上達している実感が得られる授業」を、今後もさらに追求していきたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

山本崇雄. (2019). 『「教えない授業」の始め方』アルク.

基礎的なインタラクションの技能を育てる指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	----------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3学年2クラス67名（男子30名、女子37名）の生徒である。中学校で学習した基本的な語彙や文法の理解が十分でない生徒が多く、ペアワークやグループワークにも消極的である。例年8割が大学・短大・専門学校へ進学、2割は就職や進学準備といった進路状況である。進学する者の多くは総合型選抜や学校推薦型選抜を利用しており、一般選抜で進学する生徒は極めて少ない。

解決すべき課題

日常的な事柄について基礎的な英語で会話する力を身に付けさせたい。しかし、人前で話すことに苦手意識を持ち、語彙や文法の知識が不十分であるため、英語によるやり取りが発展しない。生徒が苦手意識を持たずに英語を話せるようになる指導・活動を工夫することが課題である。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回英語学習に関するアンケート（6月実施：回答者数 67）

1. 授業でどのような力を伸ばしたいと思いますか（三つまで回答可）。

話す力	聞く力	読む力	書く力
33人 (49.3%)	22人 (32.8%)	13人 (19.4%)	12人 (17.9%)

2. あなたは英語を話すことが得意だと思いますか、苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
3人 (4.5%)	11人 (16.4%)	22人 (32.8%)	31人 (46.3%)

<分析と考察>

アンケートの結果、授業で話す力を伸ばしたいという生徒が最も多かった。しかし、英語を話すことが「(どちらかといえば) 苦手」と答えた生徒は79.1%おり、多くの生徒が苦手意識を持っていることが分かった。英語を話すことに対する苦手意識を軽減し、その力を向上させるために、授業改善が必要であることを再認識した。

・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数 66）

内容・形式：身近な話題に関して，教師と生徒が1対1で会話する。生徒は，教師からの挨拶に
答し，その後，週末や昨日の出来事について1分間程度会話を続ける。

評価方法：自作ルーブリックによる評価

	会話を続ける力	正確さ	流暢さ
A	会話中，問いに対する適切な回答と二つ以上の質問をすることができる。	文法上の誤りがほとんどなく，正確な文の形で発話している。	沈黙がなく，スムーズに会話することができる。
B	会話中，問いに対する適切な回答と一つの質問をすることができる。	2, 3か所の誤りはあるが，文の形で発話しようとしている。	沈黙はあるが，おおむねスムーズに会話することができる。
C	会話中，問いに対する適切な回答や質問をすることができない。	単語やイディオムを並べるのみで，文の形で発話できていない。	長い沈黙や，何も話せないなど，会話の成立に支障がある。

結果：

	会話を続ける力	正確さ	流暢さ
A	2人（3.0%）	10人（15.2%）	11人（16.7%）
B	33人（50.0%）	27人（40.9%）	23人（34.8%）
C	31人（47.0%）	29人（43.9%）	32人（48.5%）

<分析と考察>

教師からの最初の挨拶（"How are you today?"）に適切な回答ができず，その後も問いに対する適切な回答及び質問をすることができない生徒が半数近くいた。多くの生徒が，中学校既習の基礎的な表現を使用場面と関連させて習得できていない，ということが推察された。「正確さ」の評価では，約4割の生徒が，単語やイディオムを並べるのみで，文の形で発話できていないことが再確認された。また，「流暢さ」については，半数近くの生徒に長い沈黙が見られ，言語知識の不足とともに英語を話すことに対する抵抗感が課題であると考えた。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題についてのやり取りを，臆することなくできるようにするには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・事後アンケートで，「4月に比べ英語を話す力が（どちらかといえば）向上した」と回答する生徒が全体の7割以上になる。

・スピーキングテストのルーブリック評価で，各項目B以上の生徒がそれぞれ全体の7割以上になる。

改善のための手だて

- 身近な話題についてやり取りする練習を継続的に行えば、苦手意識をなくし、即興的に質問・応答ができるようになるだろう。
 - ・帯活動で会話フレームを使用したやり取りの練習をする。
- スピーキングストラテジーを明示的に指導すれば、相手に分かりやすい話し方が身に付き、やり取りを続けることができるようになるだろう。
 - ・リスニング教材にある対話文を活用し、相手の発話に対する反応、聞き返しの表現、会話特有の表現などの指導をする。
 - ・リズムやイントネーションなど、発話の音声指導を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数 67）

問い：あなたは4月に比べ英語を話す力が向上したと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
12 人 (17.9%)	33 人 (49.3%)	11 人 (16.4%)	11 人 (16.4%)

<分析と考察>

4月に比べ英語を話す力が向上したかという質問に対して「(どちらかといえば) そう思う」と答えた生徒は 67.2%であった。改善の目安としていた7割には届かなかったが、一定の効果があったと言えるだろう。アンケートの自由記述には、「授業の帯活動で何度も会話練習することで英語が話せるようになってきた」や「英語のやり取りを続けることで自信がついた」というコメントがあり、帯活動で会話フレームを使用したやり取りの練習をしたことが苦手意識を軽減させたと考えられる。また、「以前より発音のコツがわかってきた」など、音声指導の成果をうかがわせるコメントも見られた。さらに、「コミュニケーションを取ることは苦手だが、多くの人と会話することができてよかった」といったコメントもあった。毎回の帯活動で、スピーキングストラテジーの明示的な指導を継続したことが、生徒の会話に対する積極的な態度につながったと考えられる。

- ・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数 66）

内容・形式と評価方法は第1回と同じ（トピックは「冬休みの予定」）

結果：

	会話を続ける力	正確さ	流暢さ
A	40 人 (60.6%)	42 人 (63.6%)	43 人 (65.2%)
B	26 人 (39.4%)	23 人 (34.8%)	22 人 (33.3%)
C	0 人 (0.0%)	1 人 (1.5%)	1 人 (1.5%)

＜分析と考察＞

全評価項目で、B 評価以上の生徒が 8～9 割超となり、改善の目安としていた 7 割を超えた。また、A 評価の割合も大幅に増えた。この結果から、今回の取組みで、生徒の英語を話す力は向上したといえるだろう。なお、ループリック評価について、事前、事後のデータがそろっている 66 名分について、検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ、すべての評価項目について、統計学的にも有意な向上が認められた（すべて $p = 0.00 < 0.05$ ）。リスニング教材にある対話文を活用し、会話の状況、相手の発話に対する反応、聞き返しの表現、会話特有の表現などの指導を行い、会話練習を継続したことが、場面に応じたやり取りの力の向上につながったと考えられる。

教師の変化

研修受講以前は、生徒が「楽しめる授業」を第一に考えることが多かったが、今は「着実に力が身に付く授業」を心がけるようになった。着実に力が身に付く授業こそが、生徒にとって楽しい授業なのだと気付くことができた。また、生徒が授業で求めていることは何だろうか、どのような計画・準備が必要なのかを常に考えるようになり、私自身の授業に対する意識が変わった。「どのようなことができるようになることを目指すのか」といった、授業全体やそれぞれの活動の目的を生徒に理解させることを意識し、授業計画をより一層綿密に練るようになった。

今後の課題（次の改善点など）

英語が得意な生徒の中には、会話フレームにとらわれず会話を続けることができる生徒もいるため、生徒の技能向上のためにも、一人ひとりの力に合わせた授業づくりをする必要がある。また、会話練習などには熱心に取り組むものの、自分の思ったことをうまく表現できない生徒も見られるため、自己表現のための語彙力を向上させる必要がある。アクション・リサーチを行う仲間を増やし、学校全体で同じ目標に向かっていけるよう努力したい。

まとめ・感想

アクション・リサーチを行うことで、「生徒をどのようにして目標まで到達させるか」という意識を持ちながら授業を行うことができた。また、生徒の実態に応じた活動を行うことで、生徒の学習意欲と技能が向上する、ということを強く実感できた。生徒の成長に励まされ、授業改善に一層努力した。今回この研修を通して、自分自身の授業を見直し、授業のあり方や教師としての役割について改めて考えることができた。このような研修に参加させていただけたことに感謝するとともに、ご指導くださった講師の皆様、ともに学んだ仲間たち、そしてともに 1 年間頑張ってくれた生徒たちに感謝したい。今後もこの研修で学んだことをいかしながら、英語教師としてのさらなる資質・能力の向上を目指していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

泉恵美子・門田修平(編著). (2016). 『英語スピーキング指導ハンドブック』 大修館書店.

基礎的な英語でやり取りする力を伸ばす指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	-----	---	-----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス119名（男子47名、女子72名）の生徒である。大半の生徒が大学進学を希望しているが、指定校推薦をはじめとした推薦入試を考えている生徒が多く、個々の学力の差が大きい。クラスによって授業中の雰囲気に差があるが、ペアワークなどの活動はどの生徒もおおむね積極的に行っており、与えられた課題に熱心に取り組む姿勢が見られる。

解決すべき課題

多くの生徒が英語に対して苦手意識を持っていると思われ、基礎的な英語の知識が身に付いていない。スピーキング活動では、単語だけの発話にとどまる生徒や、正しい語順で文を組み立てられない生徒が多く見られる。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート（4月実施：回答者数112）＊人数(%)

1. あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
19人 (17.0%)	43人 (38.4%)	38人 (33.9%)	12人 (10.7%)

2. あなたは英語が得意だと思いますか、苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
4人 (3.6%)	26人 (23.2%)	41人 (36.6%)	41人 (36.6%)

3. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	単語や熟語の知識	文法の知識
11人 (9.8%)	46人 (41.1%)	10人 (8.9%)	15人 (13.4%)	10人 (8.9%)	20人 (17.9%)

<分析と考察>

英語が好きな生徒が半数以上いる一方で、英語に苦手意識をもっている生徒が70%以上いた。また、英語を話す力を伸ばしたいと思っている生徒が最も多かった(41.1%)ため、生徒の実生活の中でより役立つと考えられる身近な話題についてのスピーキング力の向上に重点を置くことにした。

- ・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数118）

内容：週末の予定についてペアで会話をする。

評価方法：自作のルーブリックによる評価

	質問力	応答力	態度（流暢さ）
A	適切な表現を用いて※1, 相手にスムーズに伝わる※2 ような質問をしている。	相手の質問に対して, 適切な表現を用いて※1 応答している。	声の大きさや速さ, 抑揚など, 相手が理解しやすい話し方を工夫している。
B	表現上の誤りがある※3 が, 会話に即した質問を相手に伝わるようにしている。	相手の質問に対して, 表現上の誤りがある※3 が, 相手に伝わるように応答している。	相手が理解できるような話し方をしている。
C	会話に即した質問ができない, または言いたいことが相手に伝わらない。	相手の質問に対して, 適切な応答ができていない。	沈黙を続けるなど, 相手が理解できるような話し方をしていない。

※1 適切な表現を用いて：will や be going to などの未来表現を用いて, S+V を含んだ文の形で話している。

※2 スムーズに伝わる：相手が努力を要せずに理解できる。

※3 表現上の誤りがある：S+V を含んだ文の形になっていない。語順の誤り・時制の誤りがある。

結果：

	質問力	応答力	態度（流暢さ）
A	22 人 (18.6%)	26 人 (22.0%)	23 人 (19.5%)
B	95 人 (80.5%)	91 人 (77.1%)	87 人 (73.7%)
C	1 人 (0.9%)	1 人 (0.9%)	8 人 (6.8%)

<分析と考察>

「質問力」「応答力」で A 評価の生徒はそれぞれ 20%前後にとどまり、場面にふさわしい表現を用いて英語を話せる生徒は少なかった。話し方の工夫についても、改善の余地があることが分かった。また、多くの生徒が原稿や暗記に頼った発話をしていた。これらのことから、自信をもって、適切な表現を使いながら、聞き手の理解を意識したやり取りができる力を育てたいと思った。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について、相手が理解できる適切な英語を使って、やり取りする力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・スピーキングテストのルーブリック評価で各項目 A 評価の生徒がそれぞれ全体の 50% 以上になる。

・事後のアンケート調査で「以前より英語を話す力が身に付いた」「以前より英語を話すことに対して抵抗が減った」と回答する生徒がそれぞれ全体の 70%以上になる。

改善のための手だて

- 身近な話題や学習した内容について、ペアで会話する練習を継続的に行えば、英語でやり取りを続ける力が身に付くだろう。
 - ・会話のフレームを使用し、場面にふさわしい表現や会話の流れを身に付けさせる。
 - ・相手の発話に対するリアクション表現を指導する。
- 会話活動の中で英文の構造を明示的に指導すれば、正確な英語を発話できるようになるだろう。

- ・事前に発話のモデルとなるフレーズ等を示し、全体で練習する。
- ・生徒に明示的に S+V の構造を示し、発話をする際に意識させる。

○ 明示的な音声指導を行えば、伝わりやすい英語を話せるようになるだろう。

- ・英語らしい発音やリズム、イントネーションなどに注意しながら、教科書本文の音読練習を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回アンケート（12月実施：回答者数 110）

1. あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
24 人 (21.8%)	38 人 (34.5%)	37 人 (33.6%)	11 人 (10.0%)

2. あなたは英語が得意だと思いますか、苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
5 人 (4.5%)	30 人 (27.3%)	37 人 (33.6%)	38 人 (34.5%)

3. この授業を通して、以前より英語を話す力が身に付いたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえば思わない	そう思わない
13 人 (11.8%)	59 人 (53.6%)	27 人 (24.5%)	11 人 (10.0%)

4. この授業を通して、以前より英語を話すことに対して抵抗は減りましたか。

減った	どちらかといえば減った	どちらかといえば減っていない	減っていない
15 人 (13.6%)	57 人 (51.8%)	30 人 (27.3%)	8 人 (7.3%)

<分析と考察>

英語が「(どちらかといえば) 好き」「(どちらかといえば) 得意」と答えた生徒の割合がわずかだが増加した。「以前より英語を話す力が(どちらかといえば) 身に付いた」と答えた生徒と、「以前より英語を話すことに対して抵抗」が「(どちらかといえば) 減った」と答えた生徒はともに 65.4%であり、少なからず授業の効果はあったと考えられる。目標としていた 70%に届かなかった要因として、ペアで会話をする時間は多くあったものの、教師からの適切なフィードバックが十分にできなかったために、話す力について、向上している実感や自信が高まらなかった生徒もいたのではないかと推察される。

・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数 109）

内容：冬休みの予定についてペアで会話をする。

評価方法：第1回テストと同じ

結果：

	質問力	応答力	態度（流暢さ）
A	43 人 (39.4%)	57 人 (52.3%)	73 人 (67.0%)
B	66 人 (60.6%)	52 人 (47.7%)	36 人 (33.0%)
C	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)

＜分析と考察＞

第1回のテストと比較するとそれぞれの項目でA評価の生徒が飛躍的に増加したが、「質問力」だけは目標としていた50%に届かなかった。平叙文では正しい語順で文が組み立てられるが、疑問文では語順の誤りが多く見られた。また、第1回と第2回のデータがそろっている108名の生徒の評価について検定(Wilcoxon 符号付順位検定)を行ったところ、すべての項目で統計学的に有意な向上が見られた($p = 0.00 < 0.05$)。

教師の変化

調査に基づいて指導方針を考え実践する授業改善を経験したことで、指導計画や授業のつくり方が変わった。これまでは教科書英文の内容理解のみを扱っていたが、单元ごとにゴールタスクを設定してそれに向かって授業を組み立てるようにしたことで、生徒たちからも課題の目的が明確で取り組みやすくなったとの声があり、自信をもって授業を行えるようになった。また、毎回の授業の最初にスピーキング活動を行ったことで、授業に活気が出て、メリハリのある授業構成にすることができた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・会話のフレームを用いたスピーキング活動は、友人同士のカジュアルな場面設定のみで行ってきたが、今後はレストランやホテルなどでのフォーマルな場面設定で行う会話練習も取り入れていきたい。
- ・基本的なS+Vでの発話はできるようになってきたので、より正確な英語が話せるようになるために自動詞と他動詞の区別や各動詞の用法やコロケーションなどを指導していく必要がある。
- ・生徒が自分の発話を記録して振り返る機会がなかったので、実際に記録したものを聞いて改善点を意識させるようにしたい。

まとめ・感想

アクション・リサーチの進め方や効果的な手だての考え方などが分かってきたところで今回のリサーチは終了してしまったので、これまでに得た知識をいかして今後もリサーチを続けていきたい。楽しいだけではなく目的をもった活動を行うことの必要性を実感し、生徒が楽しみながら力を身に付けるにはどうしたらよいかを本気で考え、悩みながら実践してきた一年間だった。まだまだ自分の授業には改善の余地があるので、今後は周りの同僚たちを巻き込みながら学校全体でより良い授業を行っていけるようにしたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2005). 『はじめてのアクション・リサーチ 英語の授業を改善するために』 大修館書店.
小菅敦子・小菅和也(著), 金谷憲・谷口幸夫(編). (1995). 『英語教師の四十八手 スピーキングの指導』 研究社出版.

やり取りを深める力を育てる指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	-----------------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は1クラス40名（男子19名，女子21名）の生徒である。9割以上が4年制大学への進学を希望しており，どの授業にも意欲的に取り組み，英語の表現活動においても積極的である。英語力に多少の差はあるが，クラスの雰囲気は非常に明るく，学び合いの中で理解を深める様子が見られる。

解決すべき課題

ほとんどの生徒が英語で自分の意見を述べることはできているが，相手意識が薄く，相手の発言を理解できていなくても会話を進めるなど，一方的なコミュニケーションになりがちである。また，長い沈黙があったり，意見を順番に述べ合うだけになったりするなど，会話が発展しないことも課題である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語学習に関する意識調査（4月実施：回答数40）＊人数(%)

1. これからの社会で生きるにあたり，4技能の中で最も重要だと思う技能はどれだと思いますか。

話す力	聞く力	読む力	書く力
31人(77.5%)	9人(22.5%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

2. 英語でどのようなことを話せるようになりたいですか。1～2個選んでください。

自分・家族・学校などの紹介	身近な事柄についての簡単な説明	聞いたり読んだりしたことに対する簡単な意見・感想	身近な話題に関する意見	社会的な問題に関する意見
6人(15.0%)	11人(27.5%)	11人(27.5%)	11人(27.5%)	1人(2.5%)

3. 英語でどのようなことを聞けるようになりたいですか。1～2個選んでください。

簡単なアナウンス	日常会話での相手の発話	作業や行動のための手順や指示	テレビドラマや映画のセリフ	ニュースや議論
11人(27.5%)	22人(55.0%)	1人(2.5%)	6人(15.0%)	0人(0.0%)

<分析と考察>

これからの社会で最も重要だと思う技能として，対象生徒全員が「話す力」，「聞く力」のいずれかを選択しており，やり取りにかかわる技能の必要性を感じていることがうかがえた。話せるようになりたいこととしては「身近な話題に関する意見」や「身近な事柄についての簡単な説明」を選んだ生徒が多く(27.5%)，聞けるようになりたいこととしては，「日常会話での相手の発話」を選んだ生徒が半数以上になった(55.0%)。このことから，身近な話題について，相手の発話を踏まえながらやり取りをする力の育成に重点を置くことにした。

・第1回スピーキングテスト（5月実施：受験者数 38名）

テスト内容：「オンライン授業」のメリット・デメリットについて体験を踏まえて意見交換をする。

評価方法：自作ルーブリックによる分析的评价

	やり取り（質問力）	やり取り（応答力）	話し方
A	有益な情報を引き出すために 効果的な質問 *1 を適切な英語でしている。	自分の意見を 効果的に適切な英語 *2 で詳しく伝えることができる。	発音の明瞭さや話す速さなどがおおむね適切で、聞き手を意識した話し方をしている。
B	情報を引き出すための質問を適切な英語でしている。	自分の意見や考えを適切な英語で伝えることができている。	発音の明瞭さや話す速さなどがおおむね適切である。
C	情報を引き出すための質問をしていない。	自分の意見を伝えることができておらず、意見交換が出来ていない。	発音の明瞭さや話す速さなどが適切でなく、理解に支障をきたすことがある。

*1 さらに説明や例を求める、議論の新しい視点を与える、意図を確認するなど、議論の発展に必要な、論理的・的を射た質問

*2 詳細な自身の体験や見聞、相手の意見を踏まえて自分の意見を述べ、説得力を高めている応答

結果：人数(%)

	やり取り（質問力）	やり取り（応答力）	話し方
A	4 人(10.5%)	15 人 (39.5%)	3 人 (7.9%)
B	16 人(42.1%)	22 人 (57.9%)	34 人 (89.5%)
C	18 人(47.4%)	1 人 (2.6%)	1 人 (2.6%)

AS ユニット数の分析*

平均値	最大値	最小値	標準偏差
5.6	11	2	2.5

*AS ユニット：話者が発した文（重文・複文を含む）や省略された応答（語句のみ等）を1単位としたもの

＜分析と考察＞

特に「質問力」に課題があることが分かった。質問による会話の継続を指示していたにも関わらず、約 5 割が質問を行わず、一人の生徒が一方的に話し続けたり、主張を述べ合った後は沈黙になってしまっていた。「応答力」については、ほとんどの生徒が B 評価以上であったが、具体性のある応答や相手の発話内容に基づいた応答ができた生徒は 4 割に満たなかった。テスト後に行ったアンケートには「自分の意見を述べるのに精一杯だった」「相手の発言内容が聞き取れなかった」「質問文が思いつかなかった」というコメントが多く見られた。参考までに測定した AS ユニット数（発話の情報量の目安）の平均値は 5.6 であった。これらのことから、発展的にやり取りを継続できるようにするには、相手の意見を踏まえて質問や応答をしていく経験を重ねることが必要であると考えた。聞き手を意識した「話し方」についても課題があり、継続して指導する必要があるが、今回のリサーチでは、会話の発展・継続に必須となる「質問力」「応答力」の向上に焦点を当てることにした。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について、互いに必要な情報を引き出したり、詳細を述べたりしながら、会話や議論の内容を深めていくやり取りをする力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・スピーキングテストの「質問力」の評価が B 以上の生徒が 9 割以上になる。

・スピーキングテストの「応答力」の評価が A の生徒が 6 割以上になる。

改善のための手だて

- 会話や議論の内容を深める質問を考える活動を行えば、発展的にやり取りを続けられるような質問が、即興でできるようになるだろう。
 - ・効果的な質問や会話例を指導し、日常的な会話練習で会話を続けるための質問をする練習させる。
 - ・活動後に、会話や議論の内容を深める質問ができたかどうかを相互評価させ、ペアを変えて再度練習させる。
 - ・教科書英文の読解に際し、深い理解のための推論発問や評価発問を考えて質問し合う活動に取り組ませる。
- コミュニケーション・ストラテジーを指導し、会話や議論の内容を深める応答をする練習を行えば、相手の発話に即時的に対応しながら、その内容を踏まえつつ会話を発展させるような応答が、即興でできるようになるだろう。
 - ・相手の発話に反応したり、自分の発話準備のための時間を稼いだりするための定型表現を明示的に指導した上で、フレームを用いた会話活動の中でそれらを使う練習をさせる。
 - ・応答する際に、理由や詳細、具体例なども話すことを習慣付ける。
 - ・活動後に、会話や議論の内容を深める応答ができたかどうかを相互評価させ、ペアを変えて再度練習させる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回アンケート（12月実施：回答数37）＊人数(%)

1. 1年時に比べて、相手の発話に対して質問をする力は身に付いたと思いますか。

かなりついた	まあまあついた	あまり変わらない	全く変わらない
2人(32.4%)	23人(62.2%)	2人(5.4%)	0人(0.0%)

2. 1年時に比べて、相手の発話に対して応答をする力は身に付いたと思いますか。

かなりついた	まあまあついた	あまり変わらない	全く変わらない
11人(29.7%)	24人(64.9%)	2人(5.4%)	0人(0.0%)

・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数39名）

テスト内容：「部活動」のメリットデメリットについて体験を踏まえて意見交換をする。

結果：人数(%) ＊第1回と同じループリックによる評価

	やり取り（質問力）	やり取り（応答力）	話し方
A	23人(58.9%)	32人(82.1%)	14人(35.9%)
B	15人(38.5%)	7人(17.9%)	25人(64.1%)
C	1人(2.6%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

ASユニット数の分析

平均値	最大値	最小値	標準偏差
9.4	18	4	3.2

<分析と考察>

スピーキングテストの結果を見ると、「質問力」ではほとんどの生徒がB評価以上となり、「応答力」

A 評価の生徒は 8 割を超えており、改善の目安に達した。事前事後のデータが揃っている生徒 38 名について Wilcoxon の符号付順位検定を行ったところ、すべての評価項目において統計学的にも有意な向上が認められた。 $(p=0.00<0.05)$ 。生徒の質問数も増え、一方の生徒が沈黙しても、他方の生徒が発話を引き出すための新たな質問するというケースも見られた。応答についても、多くの生徒が体験や詳細な例を踏まえた発話ができるようになっていた。AS ユニットの分析比較からも、発話の情報量が大幅に増えたことが分かる。アンケートでは、ほとんどの生徒が「質問力」「応答力」が「身に付いた」と実感していることが分かった。自由記述には、「相手の意見について深掘りできるようになった」「相手が熱心に意見を伝えようとしてくれたり、質問や反応を返してくれたりすることでやり取りが楽しくなった」「次に何を言うかを考えて話すようになった」などのコメントが見られ、相手意識を持ちながらやり取りするようになったことがうかがえる。これらのことから、今回の一連の手だてには効果があったと言ってよいだろう。

教師の変化

この研究を通し、科目担当者間で単元目標や指導の重点が共有され、一致した指導ができるようになった。その結果、互いの授業や生徒の様子についての会話が増え、情報共有や意見交換がこれまでよりも活発に行われるようになった。個人としても、毎回の授業で行ったことや生徒の反応や発言を書き留める習慣が身に付き、生徒の様子を振り返りながら、目標達成に向けて授業に必要なことが何であるかを考えて授業改善をするようになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回の研究では、質問や応答についての指導や活動の実施そのものに多くの時間を費やしたため、発話に対するフィードバックを十分に与えられなかった。個々の生徒の疑問やつまづきを全体で共有し、適切な助言をする機会を設けることで、生徒が自信をもって使える英語のレパートリーを着実に増やしていきたい。また、語彙力不足のために、「言いたいこと」が言えずに「言えること」に変えてしまったり、日本語を交えて話してしまったりする生徒が少なからずいたので、メッセージを変えずに、使える英語で言い換える指導や練習なども行っていきたい。

まとめ・感想

これまでは、生徒の反応や活動中の雰囲気を基に授業改善を行ってきた。しかしこの研究を通して、教師の高い改善意識と、目標の達成に向けた根拠ある指導・活動の積み重ねが、生徒の実感を伴う英語力の伸びにつながることを確信した。また、教師と生徒が授業での目標を常に共有し、達成に向けて共に考え、協力して授業の効果を高めていくという過程を重ねることで、クラスの一体感も生まれた。私自身が教師になった理由である「英語を通して相手を思いやる気持ちを育てたい」という初心を忘れず、これからも、教師と生徒だけでなく、生徒同士の心が通ったコミュニケーションが生まれるような工夫をしながら、英語学習を通して生徒の人生を豊かにできる授業を目指したい。

授業改善にあたって参考にした資料等

Foster, P., Tonkyn, A., & Wigglesworth, G. (2000). Measuring spoken language: a unit for all reasons. *Applied Linguistics*, 21, 354–375.

身近な話題についてやり取りする力を養う指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	---

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は4クラス110名（男子61名、女子49名）の生徒である。授業には真面目に取り組むが、中学校既習の基礎的な語彙や表現、文法の理解に苦労している生徒が多い。進路については例年、約5割の生徒が専門学校へ、4割が大学への進学を希望しているが、一般入試を受験する生徒は2～3%である。

解決すべき課題

英語で簡単な質問をすると、尋ねられた疑問文の最初の数語を復唱するだけになってしまう生徒がほとんどで、答え方が分からない生徒に加えて、質問自体を理解できない生徒もいると思われる。質問を理解して応答できる生徒もいるが、中学校既習の表現・文法などが定着しておらず、コミュニケーションの場で使える知識になっていないため、単語のみで答えることが多い。また、少数ではあるが、英語で話しかけられると極度に緊張してしまったり、沈黙が続いてしまったりする生徒もいる。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回アンケート（5月実施：回答者数110）

1. 次の英語の力は、これからの生活の中で必要になってくると思いますか（複数回答可）。

聞くこと	読むこと	話すこと	書くこと
88人 (80.0%)	83人 (75.5%)	91人 (82.7%)	85人 (77.3%)

2. この授業で、どのような力を伸ばしたいと思いますか？（1～3個回答）

聞くこと	読むこと	話すこと	書くこと
67人 (60.9%)	46人 (41.8%)	88人 (80.0%)	45人 (40.9%)

<分析と考察>

アンケート調査から、それぞれ8割以上の生徒が「聞くこと」や「話すこと」に関する英語の力がこれからの生活の中で必要になってくると思っており、さらに「話すこと」については8割の生徒がその力を伸ばしたいと考えていることが分かった。また、自由記述には、「簡単な会話ができるようになりたい」や「簡単な英語を使って自分の思いを伝えたい」などのコメントが見られ、日常的な会話への強い関心がうかがえた。

・第1回スピーキングテスト（5月実施：評価対象者数 98）

＊英検，GTEC など CEFR A2 レベルの試験の問題形式・題材を参考に作成

テスト内容：身近な話題についてのやり取り：「体育祭の実施は6月と10月のどちらがよいか」

テスト形式：設問カード（日本語）を基に，ALT と往復3回程度のやり取りを行う。

評価方法：自作ルーブリックによる評価

	A	B	C+	C	—
質問	相手の発話内容について質問したりして，会話を広げることができる。	ALT からの言葉がけ等の支援があれば，相手へ質問したりして，会話を広げることができる。	会話を広げようとしているが，質問の内容等が適切ではない。	“Do you” や “What” などの発話はあるが，質問をすることはできない。	発話なし
応答	質問に適切に答え，自分の意見を，説得力を持って述べるができる。	質問に答え，意見を述べるができる。	質問に答えているが，一部捉え間違いが見られる。	質問にほとんど答えられない。	発話なし
積極性	相手の発言にリアクションしたりするなど積極的にやり取りをすることができる。	積極的にコミュニケーションを取ることができる。	やり取りはしているが，下を向いたり，聞き取りにくかったりする。	コミュニケーションがほとんど取れない。	発話なし
文法	相手の努力なしでも伝わる英語を話すことができる。	日本人と話すことに慣れている人であれば分かる英語で話すことができる。	理解に支障がある，大きな誤りがある。	単語だけで話している。	発話なし

結果：

	A	B	C+	C	—
質問	0 人 (0.0%)	2 人 (2.0%)	17 人 (17.3%)	52 人 (53.1%)	27 人 (27.6%)
応答	3 人 (3.1%)	46 人 (46.9%)	33 人 (33.7%)	13 人 (13.3%)	3 人 (3.1%)
積極性	12 人 (12.2%)	36 人 (36.7%)	40 人 (40.8%)	10 人 (10.2%)	0 人 (0.0%)
文法	0 人 (0.0%)	24 人 (24.5%)	39 人 (39.8%)	22 人 (22.4%)	13 人 (13.3%)

<分析と考察>

四つの評価項目のうち，「応答」と「積極性」については，それぞれ全体の約5割，「文法」については24.5%の生徒がB以上の評価であった。大きな課題として，「質問」でB以上の評価の生徒の割合が2.0%であることが分かった。「質問」については，ほとんどの生徒がおおむね満足できるレベルに届いていなかった。ALT が “Can you ask me a question?” などと促しても，質問できなかつたり，内容が適切でなかつたりする生徒が多かった。ふだんの授業では，教科書や教師の用意した質問項目があり，自ら質問を考えて会話を広げる力を養えていないと感じた。

リサーチ・クエスチョン

日常的な話題について、基礎的な英語を使ってやり取りする力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：スピーキングテスト（やり取り）のルーブリック評価の各項目で B 以上の評価になる生徒がそれぞれ全体の 70%以上になる。

改善のための手だて

- 会話練習を様々な形式で継続的に行えば、コミュニケーションの際の緊張が緩和され、自信を持ってやり取りができるようになるだろう。
 - ・会話フレームを活用し、やり取りの進め方に慣れさせる。
 - ・通常のペア以外の生徒や ALT, JTE と話す機会を増やす。
- 身近な話題についてまとめた英語で伝え合い、互いに質問をする練習を行えば、やり取りを継続する力が身に付くだろう。
 - ・5W1H を含む情報を話したり、聞き取ったり、不足する情報について質問したりする「1 分間スピーチ」の活動を継続的に行う。
 - ・疑問文の作り方を明示的に指導する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・スピーキング活動：中間調査（7 月実施：対象者数 106）

ALT 1 人と生徒 3～4 人による 5 分間程度の自由会話（前もって 1 人 1 問ずつ質問を作っておく）

<考察>

生徒は第 1 回スピーキングテストよりも積極的に会話を続けようとしていた。これは、自分の考えを、自分の知っている語彙を活用して伝えるよう指導した成果であると思われる。しかし、文法の正確さを軽視する傾向と使用できる語彙の乏しさも明確になった。文法の個別指導として、前日や週末の出来事を書かせる「3 行日記」を 2 学期以降取り入れることにした。また、汎用性の高い既習の動詞について、短いダイアログの中で提示し、使える表現としての定着を図ることにした。

- ・第 2 回スピーキングテスト（12 月実施：受験者数 98）

テスト内容：身近な話題についてのやり取り：「日本の高校生にとって校則は必要か」

＊テスト形式、評価方法は第 1 回と同様

結果：

	A	B	C+	C	—
質問	30 人 (30.6%)	19 人 (19.4%)	18 人 (18.4%)	30 人 (30.6%)	1 人 (1.0%)
応答	59 人 (60.2%)	25 人 (25.5%)	11 人 (11.2%)	3 人 (3.1%)	0 人 (0.0%)
積極性	62 人 (63.3%)	23 人 (23.5%)	9 人 (9.2%)	4 人 (4.1%)	0 人 (0.0%)
文法	32 人 (32.7%)	30 人 (30.6%)	22 人 (22.4%)	13 人 (13.3%)	1 人 (1.0%)

<分析と考察>

「各項目で B 以上の評価」は「質問」50.0%、「応答」85.7%、「積極性」86.8%、「文法」63.8% となった。どの項目も第 1 回に比べて顕著な増加を示し、そのうち「応答」「積極性」の 2 項目については改善の目安に達した。事前、事後のデータがそろっている 98 人について、全項目の評価を検定 (Wilcoxon の符号付順位検定) にかけたところ、統計学的に有意な向上が認められた (すべて $p=0.00<0.05$)。様々な相手との会話練習の継続、会話フレームの活用、疑問文の作り方の指導、「3 行日記」での文法指導など、一連の手だてに効果があったと考えられる。録音した生徒のパフォーマンスを分析したところ、「応答」、「積極性」で B 以上の評価になった生徒のほとんどが、会話フレームで練習した質問への答え方、授業で指導したリアクションを活用していた。伸び悩んだ「質問」の発話を分析すると、B 評価の生徒であっても、授業で指導した複数の表現をうまく活用できていない様子がうかがわれた。相手の発話内容に合わせて即時的に適切な質問をすることは、応答することより複雑な情報処理をとまなうため、引き続き指導・練習の余地があると感じた。

教師の変化

これまでも、生徒の様子を観察し、テスト結果の傾向を分析することにより授業改善を行ってきたが、その成果が不透明なことが多かった。今回、事前と事後のデータを分析することにより、授業改善の成果や課題を明確にすることができた。また、中間調査を行い、効果のある活動を精選し、追加の手だてを考え、授業を修正できたことは自身の大きな成長であった。

今後の課題 (次の改善点など)

「応答」「積極性」については目標を達成したが、「質問」「文法」に課題が残った。今後も、基礎的な語彙・表現の不足に対処しながら、既習の文法知識を活用する練習を継続し、やり取りに慣れさせることが必要である。生徒が、楽しみながら語彙や表現を増やし、既習の基礎的な文法を使って日常的な事柄を英語でやり取りすることで、学習の意義や達成感を感じられるような授業にしていきたいと思う。

まとめ・感想

今までの授業改善では自分の中に確固たる自信がなく、同僚に提案できるほどのアイディアを持てていなかった。しかし本研修で学んだことは、自分だけの考えに基づいたものではないので、「こんな方法があるよ」と躊躇なく提案でき、同僚からの意見や協力も得やすかった。その結果、同じ学年の英語授業を担当する者同士、チームとして授業改善に取り組むことができたことが今回の大きな成果であった。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』 大修館書店.

基本文法を使って会話する力を育てるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	-----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3クラス49名（男子16名，女子33名）の生徒である。教師からの問いかけにあまり反応を示さないような，おとなしい生徒が多い。人間関係を築くことが得意でないため，ペアワーク等に対しても積極的になれない生徒も少なからずいる。進路は，例年の傾向として，大学・短大が2割，専門学校が6割，就職・その他が2割程度である。

解決すべき課題

学習全般に対して苦手意識があり，英語に対しても前向きでない生徒が多数存在する。中学校既習の基礎的な語彙・文法の理解も不十分である。英語は数ある教科の一つに過ぎず，英語が実生活で使えるものであるという意識は薄い。また，4技能のどの技能の習得も十分になされているとはいえず，簡単な英語の発話さえ行うことが難しい様子が見られる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回アンケート調査（6月実施：回答者数 44）

1. あなたは英語が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
9人(20.5%)	17人(38.6%)	15人(34.1%)	3人(6.8%)

2. ペアでする活動についてどう思いますか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
10人(22.7%)	13人(29.5%)	12人(27.3%)	9人(20.5%)

3. 英語で最も身に付けたい力は次のどれですか。

話すこと	聞くこと	読むこと	書くこと
21人(47.7%)	10人(22.7%)	9人(20.5%)	4人(9.1%)

<分析と考察>

英語が「好き」「どちらかといえば好き」が「嫌い」「どちらかといえば嫌い」をわずかに上回っていた。ペアで行う活動については，前向きな生徒がいる一方で，約半数が好意的でなく，英語で最も身に付けたい力としては「話すこと」が47.7%と半数近くを占めていることが分かった。

・第1回 スピーキングテスト（6月実施：受験者数 49）

内容：日常的な話題について，教師と1対1で3分間程度やり取りを行う。

評価方法：自作ルーブリックによる評価

	応答する力	質問する力	態度
A	おおむね文の形での発話ができおり，適切な応答ができている。	おおむね文の形での発話ができおり，適切な質問ができている。	相手の目を見ながら，十分な明瞭さ・声量で，言いよどみなく話している。
B	単語・語句のみの発話がしばしばみられるが，おおむね適切な応答ができている。	単語・語句のみの発話がしばしばみられるが，おおむね適切な質問ができている。	相手の目を見て，分かりやすく話し，伝わる声量がある。
C	意味伝達に支障をきたす誤り等のため，適切な応答にならないことがある。	意味伝達に支障をきたす誤り等のため，適切な質問にならないことがある。	アイコンタクトや声量が十分でなく会話が成り立っていない。

結果：

	応答する力	質問する力	態度
A	9人 (18.4%)	4人 (8.2%)	5人 (10.2%)
B	39人 (79.6%)	28人 (57.1%)	39人 (79.6%)
C	1人 (2.0%)	17人 (34.7%)	5人 (10.2%)

<分析と考察>

質問に対しおおむね適切な応答ができている生徒（B以上の評価）は98.0%に達したが，おおむね適切な質問ができている生徒（B以上の評価）は65.3%で，質問力に課題があることが分かった。「態度」については，89.8%がB以上の評価であったが，時折目線を合わせたり，かろうじて伝わる声量で話したりするなど，十分なパフォーマンスになっていない生徒も多く，英語での会話に対する自信のなさが目線や声量に表れていると推察した。これらの結果を踏まえ，授業改善の焦点を，「日常的な話題について既習の語句や文を用いて簡単な情報を話し伝え合う力」とすることにした。

リサーチ・クエスチョン

学習した表現や文法を使いながら，日常的な話題についてやり取りする力を身に付けさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：スピーキングテストのルーブリック評価において，すべての観点でA以上になる生徒の割合が，それぞれ全体の7割以上になる。

改善のための手だて

○ 帯活動で日常的な話題について会話練習をさせれば，相手の質問を理解し，文の形で発話を行うことに慣れるだろう。

・文の形で応答や質問をするための会話フレームを活用する。

- 疑問文の作り方の明示的指導と練習を繰り返せば、英語での質問ができるようになるだろう。
 - ・ Yes-no question から 5W1H の疑問文へ、段階的な指導を行う。
 - ・ 生徒が楽しく取り組めるように、ゲーム要素のある練習を行う。
- 明示的な音声指導を行い、練習させれば、聞き手を意識した話し方ができるようになるだろう。
 - ・ 教科書の英文を使って、強弱や音変化などの音声指導を行う。
 - ・ 音読のペアワークとして、音声に気を付けながら気持ちを込めて相手に伝える練習を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 第2回 スピーキングテスト（12月実施：受験者数 49）

＊内容・評価方法は第1回と同様

結果：

	応答する力	質問する力	態度
A	45 人 (91.8%)	33 人 (67.3%)	14 人 (28.6%)
B	4 人 (8.2%)	14 人 (28.6%)	35 人 (71.4%)
C	0 人 (0.0%)	2 人 (4.1%)	0 人 (0.0%)

<分析と考察>

「応答する力」の評価が A になる生徒の割合が目標の 7 割を超えて、9 割以上にまで向上した。生徒の振り返りシートには、「S+V で英文を作ることができた」、「主語・動詞を意識するようになった」などのコメントが見られ、会話練習の中でも文の形で応答する様子が見られた。「質問する力」については、改善の目安にはわずかに達しなかったが、評価が A になる生徒の割合は、8.2%から 67.3%まで大きく向上した。これは、定着度が低かった中学校既習の疑問詞の使い方を丁寧に指導し、できる限り簡素化した文法指導と練習を繰り返し行い、さらにゲーム要素を取り入れたペアワークで使う練習をするという取組みの成果であると考えられる。「態度」で A 評価になった生徒は 28.6%で微増に留まり（第1回：10.2%）、目標には及ばなかった。多くの生徒は、内容や言語の正確さに注意を向けることが精一杯で、話し方にまで気を付けることができなかったのだろうと思われる。事前・事後の評価を検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ、すべての項目で統計学的に有意な向上が認められた（すべて $p=0.00<0.05$ ）。全体的には、一連の手だてに効果があったと言ってよいだろう。

- ・ 第2回アンケート調査（12月実施：回答者数 47）

1. 以前より英語が話しやすくなった実感はありますか。

かなりある	少しある	あまりない	全くない
7 人 (14.9%)	31 人 (66.0%)	9 人 (19.1%)	0 人 (0.0%)

2. ペアワークについて気持ちに変化はありましたか。

もともと苦手ではない	苦手意識が減った	苦手なまま変化なし	苦手になった
14 人 (29.8%)	18 人 (38.3%)	12 人 (25.5%)	3 人 (6.4%)

＜分析と考察＞

取組み前より英語が話しやすくなった実感について、8割以上の生徒が「かなりある」または「少しある」と回答した。ペアワークについても、苦手意識が減ったという生徒が4割近くいて、「もとから苦手ではない」を合わせると7割近くになった。帯活動としての会話練習で話すことに慣れるとともに、音声指導に基づく音読練習によって、相手を意識した発話のポイントをある程度体得できたことで、他者に英語で話して伝えることに対する抵抗感が減ったのではないと思われる。

教師の変化

「英語を話せるようになろう」というシンプルな目標を生徒と共有し、彼らの能力を見取りながら、その目標に向かって共にスモールステップを積み重ねることができた。アクション・リサーチを行うことで、生徒に確かな成長を実感させる授業改善の手法を学ぶことができた。

何よりも最大の収穫は、目の前の生徒たちにとって英語の学習とは一体何なのか、ということを変えて考える機会を得たことである。今回の取組みは、どのような力をつけるためにどのような指導が生徒たちに必要なかを客観的に考え、それを同僚と共有するきっかけとなった。現在、「CAN-DO リスト」の形による学習到達目標の改訂を行っている。実効的な CAN-DO リストを同僚と共有することができれば、ゴールタスクの設定方法、授業、定期試験の設問の在り方なども見直す指針となり、学校全体として一貫した体系的な指導を行うことができると考えている。

今後の課題（次の改善点など）

ある程度の時間をかけ、丁寧に、やり取りの指導・練習を行ってきたが、言いよどみを減らし、流暢さを向上させるには、さらなる練習を積ませる必要がある。音声指導にもさらに時間を取りたい。スピーキングテストで質問が聞き取れなかった生徒から、聞く力の強化を望む声が聞かれたため、より自然なスピードの英語の聞き取りに慣れさせるよう、会話のためのリスニング指導もしていきたい。

まとめ・感想

第2回スピーキングテストを行った際、想定したほどの改善が見られず、悔しいという思いが強かった。しかし、第2回アンケート調査の自由記述には、「もっと英語を話せるようになりたい」「これからもこの取組みを続けてほしい」などの前向きなコメントが圧倒的に多く、このような生徒の声に救われた気がした。生徒たちはたとえ英語が苦手であったとしても、英語を話したいという気持ちがあるのだと改めて感じた。その気持ちに答えるべく、できる限り教師間で連携し合って授業改善を続けていきたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

根岸 恒雄(編著). (2019). 『英語授業・全校での協同学習のすすめ』 高文研.

身近な事柄について即興で話す力を育てるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語 I	学 年	1	形 態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	---------------	-----	---	-----	-----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3クラス60名（男子21名，女子39名）の生徒である。基礎的な文法知識や語彙が十分に身に付いておらず，英語について苦手意識を持っている生徒も多い。授業については多くの生徒が前向きに取り組むが，学習意欲があまりない生徒や，ペア活動などに対して消極的な生徒もあり，教師の配慮や支援が必要な場面が多くある。推薦入学での大学・短大進学を希望している生徒が3割ほどで，他の多くが専門学校への進学や就職を目指している。

解決すべき課題

英語を話すことに自信がなく，他者とのコミュニケーション自体にも苦手意識を持っている生徒が多い。また，多くの生徒が基礎的な語彙・文法を身に付けていないため，英語での質問に対して答えられなかったり，答えられても単語のみの応答であったりするなど，文の形で話すことが難しい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第1回 英語の授業にかかわるアンケート調査（4月実施：回答者数52）

1. この授業でどのような知識や力を一番伸ばしたいと思いますか。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	単語・熟語力	文法の知識
9人 (17.3%)	18人 (34.6%)	3人 (5.8%)	14人 (26.9%)	3人 (5.8%)	5人 (9.6%)

2. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
2人 (3.8%)	7人 (13.5%)	20人 (38.5%)	23人 (44.2%)

3. 中学での英語の授業の内容はどれくらい理解できていますか。

ほぼ全部できている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
1人 (1.9%)	13人 (25.0%)	29人 (55.8%)	9人 (17.3%)

・第1回 スピーキングテスト（5月実施：評価対象者数58）

テスト内容：教科書で学んだ行事食に関連して，日本の行事について即興で説明する。

評価方法：自作ルーブリックによる評価

	内容	デリバリー
A	「必要な内容」＋「2 つ以上の追加説明や例示」を, S+V のある文で答えられる。	相手を見ながらおおむね適切な発音・声量・速度で話し, さらに強勢・速度を調整するなど理解を促す工夫がみられる。
B	「必要な内容」＋「1 つの追加説明」を, S+V のある文で答えられる。	相手を見ながらおおむね適切な発音・声量・速度で話している。
C	「必要な内容」しかない, または「必要な内容」がない。	理解のための聞き手の努力を要するような英語を話している。

結果：

	内容	デリバリー
A	0 人 (0.0%)	0 人 (0.0%)
B	1 人 (1.7%)	4 人 (6.9%)
C	57 人 (98.3%)	54 人 (93.1%)

<分析と考察>

アンケートの結果, 授業を通じて伸ばしたい力は「英語を話す力」と回答した生徒が一番多かった。また, 8 割以上の生徒が「英語の学習が（どちらかといえば）嫌い」であることが分かった。中学までの英語の授業の内容を理解できていた生徒は 2 割以下であった。

スピーキングテストにおける発話の「内容」については, ほぼ全員が与えられたテーマについて文で答えることができず, 単語で断片的に答えたり, 沈黙してしまったりしていた。「デリバリー」についても, 聞き手のことを意識して英語を発話することができた生徒はごくわずかだった。

それぞれの結果から, 基礎的な語彙・文法の知識が身に付いていないため, 英語での質問に対して文で答えることが困難な生徒が多いことを再認識した。また, 英語を話せるようになりたい気持ちはあっても, それを英語で言えないため, 結果的に断片的に単語のみで答えたり, 沈黙したりしてしまう生徒が少なからずいることが推測された。多くの生徒が, 中学校時代に, 授業内容が分からないために, 英語学習が嫌いになるという悪循環に陥ってしまっていたのだと考えられる。

リサーチ・クエスチョン

生徒が自信を持って, 身近な話題について自分の考えや意見を話せるようになるには, どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・ループリック評価の各項目で, B 以上になる生徒が全体の 7 割以上になる。

・アンケートで授業の内容を「ほぼ全部理解できている」「まあまあ理解できている」と答える生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 生徒の思考・判断・表現が深まるように授業展開を工夫すれば, 自分の考えや意見を英語で表現できるようになるだろう。

・ポストリーディング活動として, 教科書で学んだ内容を基に生徒にとって身近な目的・場面・状況を設定して, 英語を話したり, 書いたりするような自己表現の場を設ける。

- ・ポストリーディング活動のための練習として、モデル文の読解や聴解、英作文などを行い、関連表現の定着を図る。

○ 会話活動を帯活動として継続的に行えば、自信をもって英語を話せるようになるだろう。

- ・ペアでやり取りすることに加えて、その内容を他者に報告したり本人に確認したりする活動を行うことで、英語での発話に慣れさせ、正確さにも注意を向けさせる。

○ 基礎的な語彙・文法を明示的に指導し、練習させれば、より正確な英文で話せるようになるだろう。

- ・英語の意味順（意味のまとまりの順序）を黒板に掲示し、語順を視覚化して指導する。
- ・不規則変化動詞の活用形をリズムに合わせて継続的に口頭練習することで定着を図る。
- ・学習した文法を会話活動（帯活動）に組み込み、場面の中で使わせることで定着を図る。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回 英語の授業にかかわるアンケート調査（12月実施：回答者数 52）

1. この授業でどのような知識や力を伸ばせたと思いますか。（複数回答可）

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	単語・熟語力	文法の知識
22 人 (42.3%)	20 人 (38.5%)	31 人 (59.6%)	22 人 (42.3%)	19 人 (36.5%)	18 人 (34.6%)

2. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
5 人 (9.6%)	30 人 (57.7%)	14 人 (26.9%)	3 人 (5.8%)

3. 英語の授業の内容はどれくらい理解できていますか。

ほぼ全部できている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
4 人 (7.7%)	38 人 (73.1%)	8 人 (15.4%)	2 人 (3.8%)

・第2回 スピーキングテスト（12月実施：評価対象者数 52）

テスト内容：教科書で学んだ人物紹介に関連して、日本の有名人について即興で紹介する。

評価方法：自作ループリックによる評価

結果：

	内容	デリバリー
A	14 人 (26.9%)	7 人 (13.5%)
B	33 人 (63.5%)	41 人 (78.8%)
C	5 人 (9.6%)	4 人 (7.7%)

<分析と考察>

アンケート調査では、授業内容の理解について「(まあまあ) できている」と答えた生徒が全体の 8 割以上になり、改善の目安を超えた。多くの生徒が中学校時に英語学習に対する自信を失っていることが、「話すこと」を始めすべての技能の習得に影響していると考え、研修で学んだことを取り入れな

がら、目標と目的を明確にした授業を作り上げたことで、より多くの生徒の理解度を高められたのかもしれない。その結果として、授業で比較的多くの時間を指導・活動に使っている「英語を読む力」に最も多くの生徒がその向上を感じたと推測できる。

スピーキングテストにおいても、両方の観点の評価で大きな向上が見られた。事前、事後のデータがそろっている 52 名分について検定（Wilcoxon の符号付順位検定）を行ったところ、統計学的にも有意な伸びが認められた（「内容」「デリバリー」とともに $p = 0.00 < 0.05$ ）。明示的な指導と帯活動として継続してきた会話活動によって語順など正確さへの注意が高まり、同時に英語でのやり取りに慣れ、コミュニケーションの成功体験を積み上げることで、自信をもって適切に発話できるようになってきたと思われる。

教師の変化

- ・授業で身に付けさせたい力を明確にして、そのための授業展開を逆算して考えられるようになった。
- ・同僚の教員と指導方法について話したり、情報共有したりする時間が増えた。
- ・今までと比べてより生徒を観察するようになり、理解や定着を確認しながら授業をするようになった。

今後の課題（次の改善点など）

身近な内容の事柄であれば文の形で言えるようになったものの、多くの生徒の発話できる内容はまだまだ限定的である。より多くのことを表現できるようにするための、語彙・文法指導を工夫することが必要であると感じた。また、より聞き手に理解しやすい発話を促すために、発音やアクセントについても、もっと時間を確保して指導していきたい。組織的な授業改善については、同僚と教材を共有することはできたものの、一緒に教材を作るまでには至らなかった。次年度は各単元の目標設定から教材作成まで、協働して授業づくりをしていきたい。

まとめ・感想

この1年間の研修を通じて多くのことを学べた。今までは研修などで知った活動を場当たりに授業で実践し、授業改善をしているつもりになっていた。しかし今年度はアクション・リサーチの手法で授業改善を行うことで、本当の意味での授業改善に初めて取り組むことができたと感じている。当初は英語に苦手意識を持っていた生徒たちが、いきいきと英語で活動している姿や、集中して授業に取り組んでいる姿を見られるようになったことで、改めて自分の英語教師としての役割を認識することができた。

英語教育中核教員育成研修修了者として、今後も研鑽を続け、神奈川の英語教育に貢献できる英語教師になれるように努力を続けていきたい。最後に、この研修に参加できたことや、指導していただいた講師の皆様、研修を通じて出会えた他校の皆様方へ感謝申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

上山晋平. (2018). 『はじめてでもすぐ実践できる！ 中学高校英語スピーキング指導』 学陽書房.

日常的な会話をする力を育てるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	H R ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	-----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス40名（男子33人，女子7人）である。全体的に授業への取り組みは良いものの，基礎的な英語力が不足しているため，英語でのコミュニケーションを取ることが難しい。卒業後は，例年，ほとんどが就職，もしくは専門学校への進学を目指している。専攻科及び大学進学希望者も数名いる。生徒の英語学習を支援するため，教師のすべきことが多くある。

解決すべき課題

授業には取り組むものの，全体的に英語へのアレルギーが強い。ALTが質問しても，黙っていて返事をしない生徒も多い。英語への自信のなさが背景にあると考える。将来は外国人と英語で簡単なコミュニケーションを取れるようになってもらいたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語学習に関するアンケート（5月実施：回答者数42）

質問内容	当てはまる	やや 当てはまる	やや 当てはまらない	当てはまらない	無回答
Q1 英語の勉強が好きである	2人（4.8%）	19人（45.2%）	13人（31.0%）	7人（16.7%）	1人（2.4%）
Q2 英検などの資格に興味がある	3人（7.1%）	10人（23.8%）	17人（40.5%）	10人（23.8%）	2人（4.8%）
Q3 ペアワークなどの活動が好きだ	2人（4.8%）	14人（33.3%）	13人（31.0%）	12人（28.6%）	1人（2.4%）
Q4 英語の授業の内容は理解できている	1人（2.4%）	18人（42.9%）	14人（33.3%）	8人（19.0%）	1人（2.4%）
Q5 ALTの英語の指示は理解できている	0人（0.0%）	7人（16.7%）	22人（52.4%）	12人（28.6%）	1人（2.4%）
Q6 英語を読むことは大事だ	11人（26.2%）	20人（47.6%）	5人（11.9%）	5人（11.9%）	1人（2.4%）
Q7 英語を聞くことは大事だ	18人（42.9%）	16人（38.1%）	2人（4.8%）	5人（11.9%）	1人（2.4%）
Q8 英語を話すことは大事だ	20人（47.6%）	16人（38.1%）	1人（2.4%）	4人（9.5%）	1人（2.4%）
Q9 英語を書くことは大事だ	11人（26.2%）	20人（47.6%）	3人（7.1%）	8人（19.0%）	0人（0.0%）

<分析と考察>

英語の勉強が好きな生徒の割合は全体の約半分であり（Q1）、英検などの資格に興味がある生徒は約3割であった（Q2）。約6割の生徒が、ペアワークを好きだと思っていない（Q3）ことが分かった。英語の授業の内容が理解できていない生徒の割合が全体の約半分（Q4）、ALTの英語の指示を理解できていない生徒は8割以上いることが分かった（Q5）。一方で、英語を話すことは大事だと思っている生徒も8割以上いることが分かった（Q8）。これらのことから、英語で指示・質問されたことに適切に答えられるスピーキングの力を身に付けさせたいと考えた。

・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数39）

テスト内容：教師からの日常的な話題に関する三つの質問に文の形で応答する（一問一答式）。

①Please tell me where you live.

②Please tell me what you ate for breakfast this morning.

③Please tell me when your birthday is.

評価方法：自作ループリックによる評価

	内容の適切さ	文法・語彙の正確さ
A	質問に対し適切な応答をしている。単に1文でなく、自分なりの情報を付け加えている。	主語、動詞のある正確な英文で応答している。
B	質問に対し適切な応答をしている。	語順、時制などに誤りがあるが、主語、動詞のある英文で応答している。
C	質問に対し適切な応答をしていない。	主語、動詞のある英文で応答していない。

結果：

	内容の適切さ	文法の正確さ
A	1人（2.6%）	8人（20.5%）
B	22人（56.4%）	9人（23.1%）
C	16人（41.0%）	22人（56.4%）

<分析と考察>

三つの質問のうち、一つでも適切な応答をしていれば「内容の適切さ」をC評価としていないが、41.0%の生徒がC評価となった。すべての質問に対し黙ってしまう生徒が多くおり、それらの生徒は質問の意味が分からなかったと思われる。「文法の正確さ」も同様に、三つの質問のうち、一つでも主語、動詞のある英文で応答していればC評価としていないが、56.4%の生徒がC評価となった。多くの生徒が主語、動詞のある英文で応答せず、単語のみで応答していた。

①の質問では、半数以上の生徒が質問の意味を理解し、適切な応答をした。“I live in ～.”と、文の形で答えられた生徒はその半数程度、残りは場所のみを答えた。②の質問では、およそ半数の生徒が“breakfast”を聞き取ることができ、朝食を単語で答えた生徒が多かった。文の形で、“I ate”と過去形で答えた生徒が1人いた。③の質問では、およそ4割の生徒が“My birthday is ～.”と正確に答え、日付を序数で言える生徒も多かった。慣用表現として定着していることが分かった。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について、自信を持って聞き手に伝わるように正確な文の形で話す力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：スピーキングテストの評価ルーブリックのそれぞれの観点で、評価が向上する生徒の割合が 50%以上になる。

改善のための手だて

- 毎回の授業で会話練習を行えば、英語でやり取りすることに慣れ、自信も高まるだろう。
 - ・「英語会話」の検定教科書を参考にして、対話例を準備する。
 - ・活動の目的を明確にして、意欲的に取り組ませるようにする。
- ALT による指導を効果的に導入すれば、楽しみながら英語を話すことで、抵抗感や緊張感が和らぐだろう。
 - ・ALT の主導でゲーム形式の会話練習を行う。
 - ・1 ターンのやり取りに続いて、さらに発話を促す質問や支援を ALT が行う。
- 発話に対して様々なフィードバックを与えれば、正確さに注意が向くようになるだろう。
 - ・会話練習やスピーキングテストの後で、クラス全体に、文の形での発話を促すなどの指導を行う。
 - ・ALT との個別の会話では、誤った発話に対して ALT が recast（言い直し）を行う。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数 38）

＊第1回と同じ内容・評価方法で実施（以下の8問から3問を出題）

- | | |
|---|---|
| ①What did you [eat / drink / do] yesterday? | ⑤What country do you want to go to? |
| ②What time did you go to bed yesterday? | ⑥Where do you want to live? |
| ③What is your favorite subject? | ⑦How do you come to school? |
| ④What is the date today? | ⑧How long does it take from your house to school? |

結果：

	内容の適切さ <第1回との増減>	文法の正確さ <第1回との増減>
A	4 人 (10.5%) <↑ 7.9%>	19 人 (50.0%) <↑ 29.5%>
B	30 人 (78.9%) <↑ 22.5%>	15 人 (39.5%) <↑ 16.4%>
C	4 人 (10.5%) <↓ 30.5%>	4 人 (10.5%) <↓ 45.9%>
向上した生徒	計 14 人 (36.8%) C→B : 11 人 B→A : 3 人 C→A : 0 人	計 26 人 (68.4%) C→B : 15 人 B→A : 9 人 C→A : 2 人

＜分析と考察＞

「内容の適切さ」で評価が向上した生徒の割合は 36.8%, 「文の正確さ」で評価が向上した生徒の割合は 68.4%であり, 「文の正確さ」では改善の目安(全体の 50%)を上回った。事前, 事後の評価がそろっている 37 人のデータについて検定(Wilcoxon の符号付順位検定)を行ったところ, 二つの項目で統計学的に有意な向上が認められた(ともに $p=0.00<0.05$)。「内容の適切さ」, 「文の正確さ」それぞれ, ほぼ 9 割の生徒が B 評価以上となり, 質問に対し正確な文の形で, 適切な応答をした。これは継続的なやり取りの練習と指導の成果であろう。一方で, 「内容の適切さ」で A 評価の生徒の割合は 7.9 ポイントの増加に留まった。自分の言葉で情報を付け加えるというのは, 今の生徒たちには改めてハードルが高いように感じた。また, テストに身構えてしまい, 緊張のあまり本来の力が十分発揮できない生徒も見られた。相手を変えながらペアワークを繰り返したり, グループの中で発表させたりするなど, 段階的な形式で活動を行うことで, 話すことに対する緊張感を和らげる必要があると思った。

教師の変化

今回の授業改善で, 指示の出し方の重要性を学んだ。スピーキング活動をさせるためには「何を, どのタイミング(いつ)で, なぜ, どうやってやるのか」を明確にしなければ生徒は動かない。以前は指示通りに動かない生徒に対してもどかしく思ったが, それは自分自身の指示の出し方に工夫がないためであることが分かった。また, 生徒に対し個別に改善すべき点を指摘し, 粘り強く向き合うことがいかに重要であるかを改めて認識した。

今後の課題(次の改善点など)

スピーキング活動を通して生徒の質問に対する答え方のスキルはある程度向上したものの, さらに説明を加えたり, 理由を述べたりなど, 自分自身で考えて情報を加えて質問に応答するスキルが十分ではなく, 課題として残った。スピーキング活動の際に, 事前準備の時間を設けたり, 設問内容を工夫したりして, 英語での発信力をさらに高めていきたい。

まとめ・感想

この研修を振り返り, 生徒の視点に立った授業づくりの重要性を再認識した。私は英検準 2 級の取得及び, 定期テストでの点数の向上を目指した指導を行ってきた。しかし, 事前のアンケートで, 生徒は英語の検定にはあまり興味がなく, 英語を話すことの重要性を感じていることが分かった。今回, スピーキング活動をする上で生徒に対し, 「外国人に話しかけられても逃げないで頑張って英語で対応できるようにしよう」というメッセージを伝え, それを目標にした。生徒と目標を共有して授業をデザインしたことが, 大きな成果につながったと考える。

また研修の中で ICT を使った授業について多くの教員から学ぶことができた。折しも私の学校では電子黒板が導入されたので, ICT を使った授業が非常にやりやすくなり, 研修で学んだことを実際の授業で実施することで, 自分の授業の幅が大きく広がったように思える。

生徒が自信を持って自分の意見を話すスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	-----	---	-----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス80名（男子35名、女子45名）の生徒である。ペアワークやグループワークが好きな生徒が多く、授業内での活動に積極的に参加しているが、自分の意見を述べることに抵抗がある様子が見られる。約7割の生徒が4年制大学への進学を希望している。

解決すべき課題

英語を話すことに自信がなく、質問に対して単語のみの返答で終わってしまったり、文の形で返答することに時間がかかってしまったりする生徒が多い。定期試験で高得点を取るためのリーディングスキル向上にばかり注力し、これまでスピーキングに特化した指導をあまりしてきていない。スピーキング活動を多く取り入れ、まずは英語を話すことに慣れさせる必要がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回 アンケート調査（4月実施：回答者数69）

1. 授業でどのような知識や力を伸ばしたいですか（1～3個選択）。

英語を聞く力	英語を読む力	英語を話す力	英語を書く力	文法の知識	語彙の知識
29人 (42.0%)	19人 (27.5%)	45人 (65.2%)	17人 (24.6%)	17人 (24.6%)	9人 (13.0%)

2. 英語を話す力はこれからの生活の中で必要だと思いますか。

そう思う	どちらかと言えば そう思う	どちらかと言えば そう思わない	そう思わない
52人 (75.3%)	15人 (21.7%)	1人 (0.1%)	1人 (0.1%)

<分析と考察>

アンケートの結果から、6割以上の生徒が「英語を話す力」を伸ばしたいという意識を持っており、9割以上の生徒がこれからの生活に英語を話す力が求められると考えていることが分かった。英語を話す力を伸ばすために、スピーキング活動を積極的に取り入れる必要があると考えた。

・第1回 スピーキングテスト（5月実施：受験者数80）

テスト内容：英検準2級の二次試験過去問より出題。

テスト形式：回答の動画ファイルを Google Classroom に提出

評価方法：自作ループリックによる分析的評価

	内容	話し方	正確さ
A	質問に対して二つ以上の理由や例を挙げながら、自分の考えを詳しく話している。	意味のまとまりや強弱を意識しながら、相手に伝わる発音・声量・速度で話している。	S+V 構造の欠如等，意味理解に支障をきたす誤りがなく，しっかりと言いたいことが伝わる。
B	質問に対して理由や例を一つ挙げながら、自分の考えを話している。	相手に伝わる発音・声量・速度で話している。	S+V 構造の欠如等，意味理解に支障をきたす誤りが 1～2 個あるが，おおむね言いたいことは伝わる。
C	質問に対して自分の考えを話していない。話していても理由・例がない。	発音・声量・速度が適切でなく，発話が相手に伝わりにくい。	S+V 構造の欠如等，意味理解に支障をきたす誤りが多く，言いたいことが伝わりにくい。

結果：

	内容	話し方	正確さ
A	0 人 (0.0%)	2 人 (2.5%)	10 人 (12.5%)
B	42 人 (52.5%)	62 人 (77.5%)	42 人 (52.5%)
C	38 人 (47.5%)	16 人 (20.0%)	28 人 (35.0%)

生徒による自己評価：

	内容	話し方	正確さ
A	3 人 (3.8%)	3 人 (3.8%)	8 人 (10.0%)
B	13 人 (16.3%)	27 人 (33.8%)	28 人 (35.0%)
C	64 人 (80.0%)	50 人 (62.5%)	44 人 (55.0%)

<分析と考察>

自分の意見に対する理由を 2 文以上で答えられた生徒は 1 人もいなかった。「話し方」については B 以上の評価を得た生徒が 8 割を超えたが、「内容」「正確さ」についてはいずれも、B 以上の評価を得た生徒が 7 割に満たなかった。また、生徒による自己評価との比較から、全般的に生徒は自分のスピーキング力に対して過小評価をする傾向にあることが分かった。より多くの生徒が自信を持って英語を話せるようになるために、正確な英語で自分の考えを話して伝えるスキルを身に付ける指導の工夫が必要であると感じた。

リサーチ・クエスチョン

生徒が身近な話題について、自信を持って、文の形で分かりやすく自分の考えを伝える力を身に付けさせるためには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・英検準 2 級の二次試験過去問を用いたスピーキングテストで、すべての項目で B 評価以上の生徒がそれぞれ 8 割を超える。
 - ・スピーキングテストの自己評価で、すべての項目で B 評価以上の生徒がそれぞれ 8 割を超える。

改善のための手だて

- 生徒が主体的に話す会話練習を継続すれば、自信を持って自分の考えを伝える力が身に付くだろう。
 - ・身近な話題や教科書の内容に関連した話題について、自分の意見を相手に伝える会話活動（ペアワーク）を継続的に行う。
 - ・会話活動の難易度を段階的に上げる（メモを見ること可→不可）ことで、発話の「内容」、「正確さ」に加えて聞き手の理解に配慮した「話し方」へも注意を向けさせる。
- 目的・場面・状況に応じた会話の流れや言語材料を提示すれば、発話への負荷が少なくなることで積極的にやり取りすることができ、英語を話すことに慣れるだろう。
 - ・会話のフレームをいくつか用意し、場面に応じて活用させる。
 - ・話題に関連する単語や表現のリストを示し、自発的な発話のための足場掛けを行う。
- 基本的文構造を使う言語活動を様々な場面で導入すれば、文の形での発話の意識が高まるだろう。
 - ・スピーキング活動前のプランニングとして、自分の考えを書いてまとめる活動を行う。
 - ・読解活動としての Q&A で、必ず S+V の文の形で回答することを習慣付ける。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回アンケート（12月実施：回答者数 78）

1. 授業でどのような知識や力を伸ばしたいですか（1～3個選択）。

英語を聞く力	英語を読む力	英語を話す力	英語を書く力	文法の知識	語彙の知識
43 人 (55.1%)	23 人 (29.5%)	61 人 (78.2%)	29 人 (37.2%)	23 人 (29.5%)	30 人 (38.5%)

2. 4月と比べて英語は話せるようになったと思いますか。

そう思う	どちらかと言えば そう思う	どちらかと言えば そう思わない	そう思わない
17 人 (21.8%)	43 人 (55.1%)	15 人 (19.2%)	3 人 (3.8%)

・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数 80 名）

＊テスト内容・形式は第1回と同様

結果：

	内容	話し方	正確さ
A	24 人 (30.0%)	23 人 (28.8%)	16 人 (20.0%)
B	49 人 (61.3%)	51 人 (63.8%)	52 人 (65.0%)
C	7 人 (8.8%)	6 人 (7.5%)	12 人 (15.0%)

生徒による自己評価：

	内容	話し方	正確さ
A	14 人 (17.5%)	13 人 (16.3%)	19 人 (23.8%)
B	46 人 (57.5%)	55 人 (68.8%)	42 人 (52.5%)
C	20 人 (25.0%)	12 人 (15.0%)	19 人 (23.8%)

＜分析と考察＞

すべての項目で B 評価以上の生徒がそれぞれ 8 割を超え、改善の目安に達した。事前・事後の評価データを比較すると、各項目で統計学的に有意な向上が認められた (Wilcoxon の符号付順位検定: いずれも $p = 0.00 < 0.05$)。生徒による自己評価では、内容と正確さの項目では B 評価以上の生徒は 8 割には届かなかったものの、第 1 回の自己評価と比較すると、すべての項目で 30 ポイント以上の改善が見られた。また、アンケートで「英語を話す力を伸ばしたい」と回答する生徒が 13 ポイント増えたことや、「スピーキング力が伸びた」と実感している生徒が多くいたことから、英語を話すことへの意欲が向上した生徒が増えたと言えるだろう。

教師の変化

今回の研修を通して、感覚的に生徒の変化を見ようとするのではなく、データに基づいて考えるようになったことは大きな変化の一つである。生徒の実情に合わせて目標や課題を設定し、評価規準を示した上で授業を展開していくことを意識するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

Information gap や、より現実的な場面を設定するなど、会話活動の種類を増やしていく必要がある。また、フレームに沿った発話だけでなく、相手の発話に応じた即興的な質問・応答ができるようになるための練習も、発展的に行っていきたい。さらに、個別の指導があまりできていないため、特に英語を苦手としている生徒への支援の仕方を考えていきたいと思う。

まとめ・感想

これまでは授業を通して「生徒に英語を学ぶ楽しさを伝えたい」と思っていただけだったが、「生徒にどのような力を身に付けさせたいのか」「そのためにはどのような活動が必要なのか」「授業を通してどのようなことを学んでほしいのか」など、考えなければならないことがたくさんあることに気付かされた。そのためには、目の前にいる生徒の現状や求められる力を教師である私自身が適切に判断し、目標を設定し、そこに一緒に向かっていくような授業を展開していかなければならないと痛感した。その実現には、同僚とのコミュニケーションや組織としての協力体制も欠かせない。目の前にいる生徒としっかり向き合いながら、他の教員と協働して、生徒の英語力向上に向けて尽力していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』大修館書店.

金谷 憲(編集代表). (2021). 『英語授業ハンドブック 〈高校編〉』大修館書店.

教科書のオーラルサマリーを活用したスピーキング活動

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は7クラス275名（男子166名，女子109名）の2学年全員である。真面目に授業に取り組み，ペアワークやグループワークにも前向きな生徒が多い。例年ほとんどの生徒が大学進学を希望している。

解決すべき課題

入学当初より学年全体で，教科書本文の内容を的確に理解し，学習した表現を適切に使えるようになることを目的に，キーワードや写真を参照しながら行う「オーラルサマリー活動」を継続している。今年度からは「印象に残った箇所の要約＋意見・感想」という形式にしているが，まだ，自信のなさからか，即興の活動であるにもかかわらず文を準備して読んでしまう生徒がいる。また，使える語彙や表現が少なく，言いたいことをなかなか伝えられずにいる生徒も見受けられる。既習の表現を適切に使って，聞き手に分かりやすく自分の意見や考えを即興的に話して伝える力を育成する必要がある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回 英語の授業にかかわるアンケート調査（5月実施：回答者数270）

1. 英語の授業でどのような力を最も身に付けたいと考えていますか

聞く力	読む力	話す力	書く力
36人 (13.3%)	61人 (22.6%)	149人 (55.2%)	24人 (8.9%)

2. 英語を話すことに自信がありますか

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
11人 (4.1%)	83人 (30.7%)	73人 (27.0%)	103人 (38.1%)

<分析と考察>

アンケートの結果から，4技能のうち「話す力」を身に付けたいと答えた生徒が最も多かった。一方，「英語を話すことに自信がありますか」という質問では，「自信がある」，「どちらかといえば自信がある」と回答した生徒の割合が，合わせて34.8%であった。これらのことから，「話すこと」に関わるこれまでの指導や活動を見直し，改善策を考える必要があると考えた。

- ・第1回 スピーキングテスト（7月実施：評価対象者数267）

内 容：教科書の英文を読んで印象に残った内容を説明し，それに対する意見や感想を述べる。
評価方法：ループブリックによる分析的評価

	読んだ内容の説明	意見や感想	デリバリー
A	内容をほぼ正確な英語（SV 構造を含む正確な文）で述べている。	意見や感想をほぼ正確な英語（SV 構造を含む正確な文）で述べている。	聞き手が理解できる声量・発音で話し、さらに聞き手の理解を促す工夫（強調や繰り返し）が見られる。
B	英語に多少の誤りはあるが、おおむね理解できる内容を述べている。	英語に多少の誤りはあるが、おおむね理解できる意見や感想を述べている。	聞き手が理解できる声量・発音で話している。
C	内容を述べていない、または理解に支障をきたす誤りがある。	意見や感想を述べていない、または理解に支障をきたす誤りがある。	声量や発音の正確さが十分でない。

結果：＊人数（割合）

	読んだ内容の説明	意見や感想	デリバリー
A	84 (31.5%)	65 (24.3%)	35 (13.1%)
B	174 (65.2%)	189 (70.8%)	227 (85.0%)
C	9 (3.4%)	13 (4.9%)	5 (1.9%)

＜分析と考察＞

ループリックの 3 項目とも、B 評価以上の生徒がそれぞれ 90%を超えた。この時点で現状の A 評価を次の目標とすべきであるが、A 評価の生徒のパフォーマンスを分析すると、その質に幅があり、さらなる向上のための適切な評価を行うには、ループリックの到達レベルを増やす必要があると考えた。具体的には、「読んだ内容の説明」については、ほぼ正確であっても教科書の英文をそのまま繰り返した生徒が多く、言い換えたり、自分なりにまとめたりするなどの工夫があまり見られなかった。「意見や感想」については、ほぼ正確に意見を述べる中で、その理由や根拠に言及した生徒もいたが、数は少なかった。また、「デリバリー」については他の 2 項目と比べて A 評価の生徒の割合が少なかったが、これは、多くの生徒が、内容伝達が精一杯で、聞き手を意識することに注意が向かなかったことによると推察した。質的に見ると、英語らしさ（より自然な発話）という面での違いが見られた。

リサーチ・クエスチョン

読んで印象に残った内容について、自分の言葉で要約しながら、意見・考えなどを口頭で相手に分かりやすく伝える力を身に付けさせるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：スピーキングテストのループリック評価のすべての項目で、A 以上の評価を取る生徒がそれぞれ全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

- 読んだ英文について、自ら選んだ部分を英語で口頭要約し、意見や考えを述べる活動を継続的に行えば、主体的に内容を捉え、論理性に注意しながら話す力が身に付くだろう。
 - ・教科書本文のパートごとに「選択要約＋意見・考え」の口頭発表をペア、グループで行わせる。
- 英語の音声の特徴について明示的な指導を行い、練習させれば、聞き手の分かりやすさを意識した話し方で話すことができるようになるだろう。
 - ・教科書本文の音読に際し、強弱や音変化、抑揚等を明示的に指導し、ペアで練習させる。

- 様々な形式のスピーキング活動に取り組ませれば、英語での発話に慣れ、自信も高まるだろう。
- ・英検 2 級二次試験の問題（No.3, 4：自分の考えを話す問題）を使った「Q&A 活動」を行わせる。
ペアでの Q&A①→モデル回答の分析（全体）→ペアでの Q&A②→会話スタイルのペアワーク
→振り返り・パートナーからの助言
 - ・毎回の授業で、与えられたトピックについて即興で話す「1 分間スピーチ」をペアワークとして行わせる（発話語数、言えなかった表現、パートナーからの助言を記録させる）。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第 2 回 スピーキングテスト（1 2 月実施：評価対象者数 260）

内 容：第 1 回と同様（テーマの英文は別）

評価方法：ループブリックによる分析的評価（第 1 回のループブリックに以下の A+ の尺度を追加）

	読んだ内容の説明	意見や感想	デリバリー
A+	内容をほぼ正確な英語で述べ、本文の表現を自分なりに言い換え、まとめる等の工夫が多く見られる。	意見や感想をほぼ正確な英語で述べるのに加え、その理由や根拠も適切に、また論理的に述べている。	聞き手が理解できる声量・発音で話し、さらに聞き手の理解を促す工夫が見られ、リズムやイントネーション（意味のまとまりごとのポーズや音声変化）にも工夫が見られる。

結果：* 人数（割合）

	読んだ内容の説明	意見や感想	デリバリー
A+	51 (19.6%)	71 (27.3%)	41 (15.8%)
A	164 (63.1%)	133 (51.2%)	80 (30.8%)
B	43 (16.5%)	51 (19.6%)	134 (51.5%)
C	2 (0.8%)	5 (1.9%)	5 (1.9%)

< 分析と考察 >

「読んだ内容の説明」と「意見や感想」で A 評価以上の生徒の割合は、第 1 回を大きく上回る 8 割前後となり、改善目標を達成した。「デリバリー」で A 評価以上の生徒の割合もかなり増えたものの、改善目標には届かなかった。事前・事後のデータがそろっている 260 人の評価を検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ、3 項目とも統計学的に有意な向上が認められた（すべて $p = 0.00 < 0.05$ ）。この結果から、一連の手だてには効果があったと言ってよいだろう。一方、話し方については、ビデオ撮影したモデルとなるパフォーマンスを共有・分析するなどして、聞き手への意識や英語らしい発話の具体的なイメージを与える必要があったと考える。

- ・第 2 回 英語の授業にかかわるアンケート調査（1 2 月実施：回答者数 265）

1. 授業で行った次の四つの活動は英語を話す力を伸ばすのに役立ちましたか。

	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
オーラルサマリー活動	64 人 (24.2%)	138 人 (52.1%)	55 人 (20.8%)	8 人 (3.0%)
Q&A 活動	68 人 (25.7%)	135 人 (50.9%)	55 人 (20.8%)	7 人 (2.6%)
1 分間スピーチ	73 人 (27.5%)	137 人 (51.7%)	51 人 (19.2%)	4 人 (1.5%)
音読活動	74 人 (27.9%)	154 人 (58.1%)	30 人 (11.3%)	7 人 (2.6%)

2. 英語を話すことに自信がついてきましたか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
55 人 (20.8%)	92 人 (34.7%)	79 人 (29.8%)	39 人 (14.7%)

<分析と考察>

手だてとして行ったどの活動に対しても、75%以上の生徒が、英語を話す力を伸ばすのに（どちらかといえば）役立ったと思うと答えている。昨年度から行っている教科書本文の「オーラルサマリー活動」と「音読活動」を発展的に継続し、教科書以外の話題についても意見交換や発表をする活動（「Q&A 活動」、「1 分間スピーチ」）に取り組んだことで、生徒は様々な事柄に対する自分の意見や考えを改めて自覚したり、自分の言語的な弱点に気付いたりすることができたように思う。それは、多くの生徒がどの活動にも主体的に取り組むようになったことからもうかがえた。また、英語を話すことに（どちらかといえば）自信がついてきたという生徒が、55.5%と全体の半分以上を超えた（第1回アンケートでは34.8%）。「1 分間スピーチ」や「Q&A 活動」によって、即興的に意見や考えを話す練習を継続してきたことで、英文を産出する瞬発力が向上し、自信も高まったのではないかと考える。

教師の変化

研修を通して、教科書の内容理解に終始するのではなく、生徒に身に付けさせたい力を明確にし、それぞれの単元目標を達成するためにどのような指導・活動が必要か、どのように教科書を使うかを考えるようになり、教材研究の視点が変化した。

今後の課題（次の改善点など）

本実践では、発表準備を行う一定の期間を与えた上でテストを実施したため、暗唱テストのようにとらえた生徒もいた。今後は、その場で与えられたテーマについて、話す内容や構成などを即興で考えてパフォーマンスをするテストも実施したい。また、教科として3年間でどのような生徒を育てていくかということについて英語科全体で改めて話し合い、共通の目標を設定して、その達成に取り組みたい。

まとめ・感想

リサーチ・クエスション（目標）を設定し、改善の手だてを考え、実行することで、生徒の技能面において一定の向上が見られた。教師が目標を見据えて、それを生徒と共有し、授業を行うことが生徒の英語力向上には非常に大切であると実感した。今後もこのことを考えながら授業をしていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐々木啓成. (2020). 『リテリングを活用した英語指導-理解した内容を自分の言葉で発信する』 大修館書店.

表現する喜びを実感できるライティング指導を目指して

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	----------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は2クラス76名（男子38名，女子38名）の生徒である。学年全体としては，まじめで物静かな生徒が多く，落ち着いた雰囲気があるが，対象クラスは，その中でも比較的明るく，授業に対して積極的な生徒が多い。例年，約6割が4年制大学へ，3割が短期大学及び専門学校へ進学している。

解決すべき課題

英語に対して興味を持ちつつも，苦手意識が強い。基礎的な語彙や文法の正確さにも課題があり，また自分で考えて表現するということにも慣れていない。英語で自己表現をすることの楽しさに触れさせ，英語を使ってどのようなことができるようになるのかという目標を示すことで，英語を使って自分の可能性を拡げることができるという意識を育みたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

- ・第1回アンケート（4月実施：回答者数76）

Q：授業でどのような知識や力を伸ばしたいか。（複数回答可）

聞く力	読む力	話す力	書く力	語彙	文法
14人(18.4%)	23人(30.3%)	35人(46.1%)	37人(48.7%)	14人(18.4%)	24人(31.6%)

<分析と考察>

発表技能（話す力，書く力）を伸ばしたいという生徒が多かった。同時に「将来，どのような力が必要になるか」といった質問をしたところ，4技能すべてにおいて，97%以上の生徒が肯定的な回答をした。この結果と英検準2級を全員が受験するという状況を踏まえ，まとまった英文を書く力の向上をアクション・リサーチのテーマにすることにした。

- ・第1回ライティングテスト（5月実施：受験者数76）

テスト内容：英検準2級程度の英作文「グループ学習は個人学習よりも有効である」

時間／条件：制限時間20分／50～60語で，意見と2つの理由を述べる

評価方法：自作ループリックによる評価

<評価ルーブリック>

	パラグラフの構造	内 容	正確さ
A	「主題文+支持文+結論文」の構造で書いている。	意見および二つの理由が具体的に述べられている。	内容伝達に支障をきたす誤りがない。
B	「主題文+支持文」／「支持文+結論文」の構造で書いている。	意見および二つの理由が述べられている。	内容伝達に支障をきたす誤りが一〜二つある。
C	主題文，支持文，結論文からなる構造で書いていない。	理由が一つしか述べられていない，または意見，理由がない。	内容伝達に支障をきたす誤りが三つ以上ある。

結果：

	パラグラフの構造	内 容	正確さ
A	22 人 (28.9%)	12 人 (15.8%)	3 人 (3.9%)
B	42 人 (55.3%)	29 人 (38.2%)	17 人 (22.4%)
C	12 人 (15.8%)	35 人 (46.1%)	56 人 (73.7%)

＊語数条件(50～60 語)を満たした生徒：28 人 (36.8%)

・第1回ライティングテストの自己評価（5月実施：回答者数 76）

1. 上手に書くことができたか。

よく書けた	大体書けた	あまりよく書けなかった	全く書けなかった
0 人 (0.0%)	7 人 (9.2%)	53 人 (69.7%)	16 人 (21.1%)

2. どのようなことが難しいと感じたか（複数回答可）。

パラグラフの構造	内 容	語 彙	文 法
22 人 (28.9%)	29 人 (38.2%)	57 人 (75.0%)	48 人 (63.2%)

<分析と考察>

まず、6 割強の生徒が、指定された語数で書くことができなかったことが大きな課題であると思った。まとまった量の英文を書く活動が足りていなかったことを痛感したが、授業内のテストであるため、語数条件を満たしていないものを含め、すべての作文を評価した。「パラグラフの構造」については、主張と理由・例のつながりが見られれば B とし、8 割以上の生徒が B 評価以上であった（語数条件を満たした生徒のみでは、96.5%）。「内容」では B 評価以上が 5 割強にとどまった。これには語数が関わっていると思われたため、50～60 語書けた生徒と書けなかった生徒の B 評価以上の割合を分けて算出してみると、それぞれ 71.4%，43.8%で、やはり大きな差があった。語数が足りない作文には、論理が矛盾している，経験や好みに終始し説得力に欠けるといった特徴が見られ，物事を論理的に考えることに慣れていないことがうかがえた。「正確さ」については，B 評価以上の生徒は 3 割に満たなかった。語数条件を満たしているものに限定してもおよそ 5 割であった。未完成の文，語順の誤り，S+V が成り立たない文も多く見られ，言語知識を技能にいかせるようになるための指導の工夫が必要であると再認識した。すべての観点で B 評価以上だった生徒の割合は 42.9%であった。生徒の自己評価はテスト結果をよく反映しており，生徒の力を伸ばすことで達成感も高めたいと思った。

リサーチ・クエスチョン

日常的な話題についての自分の意見を，論理的でおおむね正しい英語で書く力を身に付けさせるにはどのような指導をしたらよいか。

- 改善の目安：・ライティングテストで語数条件を満たす作文が書ける生徒が 9 割以上になる。
・ライティングテストの評価が 3 観点ですべて B 以上になる生徒が 7 割以上になる。

改善のための手だて

- パラグラフの構造を明示的に指導すれば、論理的な文章を組み立てる力が身に付くだろう。
 - ・ 書画カメラで生徒の英作文を提示し、その場で添削する。
 - ・ パラグラフの枠組みを支援として使った作文練習を行う。
- プレライティング活動の工夫をすれば、自分の意見をまとめる力が身に付くだろう。
 - ・ マッピングによって、論理的で一貫性のある内容の準備をさせる。
 - ・ トピックについてグループディスカッションを行い、意見交換によって考えを深めさせる。
- 既習の文法を使う練習を継続すれば、正しい英語で書く力が身に付くだろう。
 - ・ 教科書の文法項目を用いた自由英作文（1 文）を書かせ、Google Forms を使って回収・共有する。
 - ・ 帯活動の Mini Presentation, Small Talk（自己表現活動）で、基礎的な文法項目を使わせる。
- まとまった英文を書かせる機会を定期的に設定すれば、英文を書くことに慣れるだろう。
 - ・ 教科書単元の終わりに、内容に関する意見文などを書かせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 第 2 回ライティングテスト（1 2 月実施：受験者数 73）

テスト内容：英検準 2 級程度の英作文「高校生は留学すべきであるか」

* 時間／条件、評価方法は第 1 回と同じ

結果：

	パラグラフの構造	内 容	正 確 さ
A	69 人 (94.5%)	64 人 (87.7%)	14 人 (19.2%)
B	4 人 (5.0%)	6 人 (8.2%)	40 人 (54.8%)
C	0 人 (0.0%)	3 人 (4.1%)	19 人 (26.0%)

* 語数条件(50～60 語)を満たした生徒：65 人 (89.0%)

- ・ 第 2 回ライティングテストの自己評価（1 2 月実施：回答者数 73）

1. 上手に書くことができたか。

よく書けた	大体書けた	あまりよく書けなかった	全く書けなかった
2 人 (2.7%)	23 人 (31.5%)	42 人 (57.5%)	6 人 (8.2%)

2. どのようなことが難しいと感じたか。（複数回答可）

パラグラフの構造	内 容	語 彙	文 法
13 人 (17.8%)	21 人 (28.8%)	52 人 (71.2%)	45 人 (61.6%)

＜分析と考察＞

指定された語数で書くことができた生徒は、36.8%から89.0%に大幅に増加した。目標の9割にはわずかに届かなかったが、ライティング活動を充実させたことに効果があったと言ってよいだろう。評価では、「パラグラフの構造」「内容」でA評価となった生徒が9割前後になり、最も課題であった「正確さ」でも7割以上の生徒がB以上の評価になった。事前・事後のデータがそろっている73人について、各項目の評価を検定（Wilcoxon の符号付順位検定）にかけたところ、3観点すべてにおいて有意な向上が認められた（それぞれ $p=0.00<0.05$ ）。3観点ですべてB評価以上になった生徒の割合は77.0%に伸び、改善の目安に達した。しかし、肯定的な自己評価をした生徒はかなり増えたものの、まだ4割を下回っており、語彙・文法に難しさを感じている生徒が依然として多かった。書くスキル自体は向上し、複雑なことを表現しようという姿勢は育ってきているが、使いこなせる言語知識が追い付いていないという状況が推察される。

教師の変化

今回の研修を通じて、授業づくりの意識が変わった。身に付けさせたい知識・技能を明確にした上で、一つひとつの活動の目的とつながりを考えて授業設計をするようになった。また、目標を設定することで、その目標に向かって計画的に授業を行うことができるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

英語の基礎的な言語知識がライティングの技能につながるような指導、そして身近なことや社会についての知識や関心を高めるような活動を継続したい。また、もう一つの発表技能であるスピーキング力の向上にも取り組んでいきたい。

まとめ・感想

少しの意識改革で授業は改善できるということ、そしてそれによって生徒は着実に成長できるということを確信した。以前は、生徒から「英作文は面倒」と言われがちであったが、最後のライティングテストでは誰もそのようなことは言わず、ライティング活動に積極的でなかった生徒が「このレッスンの感想どこに書くの？」と聞いてくるようなこともあった。英作文への抵抗感がなくなり、英語で表現することの「喜び」を感じてくれる生徒が増えたことを実感している。さらなる成果として、1月に行われた英検準2級のライティング問題では、多くの生徒が高得点を取ることができた。この研修で学んだことを今後も授業で実践するとともに、同僚の教員とも共有し、これからの英語教育の発展に力を尽くしていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

細 喜朗. (2020). 「グラフィック・オーガナイザーとピア・レビューシートを活用したライティング指導実践」『英語教育』2020年12月号. 大修館書店.

一貫性のある正確な意見文を書くためのライティング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	-----------------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は1クラス39名（男子21名、女子18名）の生徒である。生徒のほぼ全員が国公立大学や私立難関大学への進学を目指しており、学習に前向きで知的好奇心が高く、中学校既習の基礎的な言語知識は定着している。一方、応用力や表現力に関しては生徒間に差がみられる。

解決すべき課題

論理的で正確な意見文を書けない生徒が多い。ある程度の量を書くことができて、意見と理由、理由と例などの整合性が取れていなかったり、そもそも質問にそぐわない意見を書いていたりする場合がある。また、文法の正確さに関しては、3人称単数現在形(-s)、複数形や時制など、知識としては習得している事項についての誤りが多く出現する。前年度1月に対象生徒が受験したベネッセ模試の表現力の平均点は、県内の他の進学校と比べて低かった。30語程度の意見文で「理由を具体的に述べることができる」生徒は56.0%であった。前年度、授業で扱った作文の課題は「学生服」「行きたい場所」「将来の夢」などの身近な話題のみであったため、これまで論理性について指導する機会を設けてきていない。社会的話題について、論理性に注意して意見を述べる力を養っていく必要がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・英語に関する意識調査（5月実施：回答者数 24）

Q：授業でどの能力を一番伸ばしたいと思っていますか。

聞くこと	読むこと	話すこと	書くこと	語彙	文法
5人 (20.8%)	6人 (25.0%)	5人 (20.8%)	2人 (8.3%)	1人 (2.1%)	5人 (20.8%)

<分析と考察>

書く能力を一番伸ばしたいと答えた生徒は8.3%と少なかった。書く能力は、高等教育機関への進学を志望する多くの生徒にとって必須であると思われるが、その能力への意識が低いことが明らかになった。

- ・第1回 意見文テスト（5月中旬実施：受験者数 34）

テスト内容：（ハンムラビ法典とガンディの考えを踏まえ）「報復が必要であるか」について、80語程度の意見文を書く。

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	内 容	文 法
A	内容に一貫性があり，意見をサポートする理由に説得力がある。	軽微な誤りを含む文がほとんどなく，読み手の理解に大きく影響する誤りを含んだ文はない。
B	内容に一貫性がある。	軽微な誤りを含む文が複数あるが，読み手の理解に大きく影響する誤りを含んだ文はほとんどない。
C	内容に一貫性がない。	軽微な誤りを含む文が複数あり，読み手の理解に大きく影響する誤りを含んだ文が多い。

※B レベルは「おおむね満足できる状況」である。

結果：人数 (%)

	内 容	文 法
A	8 (23.5%)	4 (11.8%)
B	18 (52.9%)	17 (50.0%)
C	8 (23.5%)	13 (38.2%)

<分析と考察>

「内容」と「文法」において B 以上になる生徒は，それぞれ全体の 76.4%，61.8%であった。「内容」A となった生徒は全体の 23.5%に留まり，多くの生徒が説得力をもって自身の意見を述べる事ができていない。「文法」A となった生徒は全体の 11.8%で，多くの生徒の英文について，その文法の正確性に課題がある。原因として演習不足が考えられることから，生徒が書いた英文に対し，内容と文法に関する助言を適切に与え，それに基づいて自ら考え，A レベルの作文に仕上げていく経験を積み重ねることが大切だと考えた。

リサーチ・クエスション

論理的で説得力のある意見文を書く力を身に付けさせるには，どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・意見文テストの評価ルーブリックの各項目で，B 以上になる生徒が，それぞれ全体の 8 割以上になる。
 - ・意見文テストの評価ルーブリックの各項目で，A になる生徒が，それぞれ全体の 4 割以上になる。

改善のための手だて

- 読んだ英文の内容について意見交換する活動を行えば，自分の意見を論理的に形成できるようになるだろう。
- ・教科書本文の内容を簡単にまとめ，自分の意見を理由とともに述べるスピーキング活動を各単元のパートごとに行う。

- 意見文を書く機会を定期的に与えれば、自分の考えを構築し、英文で表現することに慣れるだろう。
 - ・教科書の単元ごとに、内容に関連するトピックについて意見文を書かせる。
- プロセス・ライティング活動に取り組ませれば、論理性、説得力、正確さが高まるだろう。
 - ・単元ごとに書かせた意見文について、論理性、説得力、正確さにかかわるフィードバックを全体、個別に与える。
 - ・フィードバックに基づいて書き直しをさせる。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回 意見文テスト（11月中旬実施：受験者数 34）

テスト内容：「高齢化社会においてロボットは役立つか」について、80語程度の意見文を書く。

評価方法：自作ループリックによる分析的評価（第1回意見文テストのものと同一）

結果：人数（%）

	内容	文法
A	19 (55.9%)	15 (44.1%)
B	9 (26.5%)	15 (44.1%)
C	6 (17.6%)	4 (11.8%)

<分析と考察>

「内容」と「文法」においてB以上の生徒の割合は、それぞれ全体の82.4%、88.2%となり、改善の目安に達した。また、「内容」と「文法」でA評価になった生徒の割合は、それぞれ全体の55.9%、44.1%と大幅に向上し、目標を達成することができた。特に、「内容」Aの生徒の割合は半分を超えるまでになった。スピーキング活動での意見交換やプロセス・ライティングの活動の効果によって、理由と例を示しながら、説得力をもって自分の意見や考えを書いて伝えられる生徒が増加したことがうかがえる。特に、プロセス・ライティングの活動は、自分の作文を見直ししながら、自分の力で少しずつ論理性を高めることにかなり効果的であったと考える。また、文法の正確さについても、プロセス・ライティングの活動で書く機会を増やしたこと、正確さに関するフィードバックを与えりライトさせたことが効果的であったと思われる。3人称単数現在形(-s)や複数形などの軽微な誤りも減り、自分で正しく表現できる英文のレパートリーが増えたことが、生徒の答案から推察された。

教師の変化

前年度、対象生徒が1年生の時のライティング指導には、主に外部業者による個別の英文添削サービスを利用した。今回のリサーチ結果を受け、授業を担当する教師による直接の指導は、生徒の英語力向上のために重要であると再確認した。外部業者による添削サービスを利用すれば教師の労力は減るが、生徒に伝えるべきことを適切に伝えられているとは限らない。英文の論理的矛盾について考えることは深い思考を必要とする行為であり、教師がフィードバックの与え方を工夫し、一人ひとり丁寧に信念を

もって教えていくことが必要であると感じた。同じ学年を担当する他の教師と目標を共有し、多くの労力を必要とする添削活動を継続することができたことが、最も良かったことであると考えている。

今後の課題（次の改善点など）

今回のリサーチでは「内容」、「文法」の両観点で向上が見られ、一連の手だてが有効であることを確認することができた。しかし、生徒が志望する国公立大学や難関私立大学で要求されるライティング能力を考えると、さらに高いレベルでの論理性の追求が必要となる。説得力のある意見文を書くために、問題を分析する力やどのようにして結論に至ったかを説明する力を高めるよう指導していきたい。また、トピックが変わると、論理性や正確性が下がってしまう生徒がいるため、幅広い分野のトピックでライティングの機会を提供していくべきと考える。

まとめ・感想

今回のアクション・リサーチを通して、授業計画や指導法を工夫することの重要性を再認識することができた。まずは、生徒に機会を提供することの大切さである。ライティングだけでなく、スピーキングでも、支持文を加えて意見を述べさせることで、生徒が論理的に書いたり話したりすることに慣れてくるのを実感することができた。特に、意見を述べた後に理由を付け加え、例示や詳細説明をしていく流れを習慣化させることが重要であると感じた。二つ目は、知的好奇心をくすぐる内容を授業に取り入れることの大切さである。授業をしながら、論理性についての学びには難しさもある反面、面白さもあると感じた。深い学びを実現する言語活動を行うことにより、授業は面白くなる。そして、その過程で基礎的内容の定着を図ることもできると実感した。三つ目は、一斉授業の中で個人を見ていくことの大切さである。一人ひとり内容が異なる作文の指導をするには、それぞれの生徒とコメント等で関わることが重要である。そして、そこで知り得た生徒の実情を教師が把握した上で指導計画を立てることで、一斉指導をより良いものにすることができると実感した。これらの気付きは、自分の授業をもう一度振り返り、新たにデザインしていく上で大変貴重な経験となった。ご指導いただいた皆様には感謝を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐藤ヒロシ. (2013). 『英語が面白くなる 東大のディープな英語』 中経出版.

読んだ内容を深く思考させるライティング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団
-----	--------------	-----	---	-----	-----------------------

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は3クラス103名（男子42名，女子61名）の生徒である。多くの生徒は授業以外での学習習慣が身に付いておらず，英語に苦手意識を持っている生徒が多い。活発な雰囲気があり，興味・関心を抱いた内容に対して積極的に発言をすることができるが，私語につながってしまうこともある。進路については，総合型選抜や推薦入試による進学が多いが，進路の選択や関連する科目選択の際，深く考えずに決定してしまう生徒も見られる。

解決すべき課題

相手の気持ちを深く考えずに，思ったことをそのまま言葉にする傾向があり，人間関係のトラブルにつながることもある。また，自分の意見を書く際，内容が具体性に欠け説得力がないことや，具体例だけを列挙して要旨がつかみにくいことが課題である。意見の述べ方について明示的な指導を行い，自己表現の機会を増やすことで改善につなげたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・事前アンケート調査①（4月実施：回答者数94）

Q：物事について考える力はこれからの生活の中で必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
68人(72.3%)	24人(25.5%)	2人(2.1%)	0人(0.0%)

・事前アンケート調査②（6月実施：回答者数89）

Q：英語を書く力はこれからの生活の中で必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
43人(48.3%)	37人(41.6%)	8人(9.0%)	1人(1.1%)

<分析と考察>

アンケートの結果から，ほとんどの生徒が思考力の重要性について認識していることが分かった。また，英語を書く力についても，9割近い生徒が必要になると考えていた。アンケート調査や生徒の特徴，解決すべき課題を踏まえ，ライティング力の育成を通して，物事を深く考える力も育てることができるのではないかと考えた。

・第1回ライティングテスト（6月実施：受験者数93）

テスト内容：英検準2級の英作文問題（制限時間20分）

「勉強は一人でする方がよいか、グループでする方がよいか」

評価方法：自作のルーブリックによる評価

＜評価ルーブリック＞

	内容(思考力)	構成(論理性)
A	内容に一貫性があり，理由や具体例などによって深められている。	「主題文－支持文－結論文」の構造が確立して，論理の流れを示す表現を適切に使うなどの工夫が見られる。
B	内容に一貫性はあるが，内容が十分に深められていない。	「主題文－支持文－結論文」の構造が確立している。
C	分量が少なく，内容に一貫性がない。	「主題文－支持文－結論文」の構造が確立していない。

※付帯事項として，語数を調べる

結果：

内容			構成		
A	B	C	A	B	C
28人(30.1%)	41人(44.1%)	24人(25.8%)	12人(12.9%)	27人(29.0%)	54人(58.1%)

※平均語数：52.1語

＜分析と考察＞

「内容」に関して，ある程度伝わる内容の英文を書いた生徒（A評価・B評価）は74.2%いたが，理由や具体例などを挙げながら内容を十分に深められている生徒（A評価）は30.1%であった。一方で，「構成」に関しては，論理的な構造で英文を書くことができた生徒（A評価・B評価）は41.9%であり，ディスコースマーカーの使用や，結論文での工夫が見られる生徒（A評価）は12.9%と非常に少なかった。このことから，根拠を具体的に示しながら自分の考えを表現できるようにすること，内容が相手に説得力をもって伝わるように，論理構造を明示的に指導することが必要であると考えた。繰り返し英作文に取り組ませることで，生徒の力の伸長を図ることにした。

リサーチ・クエスチョン

自分の考え・意見を論理的にまとめた英語で書く力を身に付けさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：与えられたトピックに関する意見を書く英作文テストにおいて，8割以上の生徒が「内容」「構成」の項目でB以上の評価となる。

改善のための手だて

- 教科書本文の読解の指導を工夫すれば，思考が深まり，論理的な英文を書くことにつながるだろう。
 - ・読解活動において，生徒に思考や判断を促すよう，推論発問や評価発問を与える。
 - ・それらの発問に基づき，教科書のパートごとに意見文を書かせる。

- ライティングの構成を指導すれば、より論理的な英文が書けるようになるだろう。
 - ・ 基本的な論理構造（主張，理由・具体例，再主張）を指導する。
 - ・ 解答例をスクリーンに映し，ディスコースマーカーや結束性について確認させる。
- 書いた英文の読み手を設定し，生徒へのフィードバックを工夫すれば，内容の深化，構成や文構造の修正につながり，書く意欲が高まるだろう。
 - ・ 内容が深められているか，基本的な論理構造に沿って書けているかをクラス全体で共有する。
 - ・ Google Classroom で互いの英作文を読み，コメントし合うことで，自身の英作文の分かりやすさについて振り返りをさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

- ・ 事後アンケート調査（１２月実施：回答者数 93）

Q：物事について考える力はこれからの生活の中で必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
79 人(84.9%)	11 人(11.8%)	3 人(3.2%)	0 人(0.0%)

<分析と考察>

教科書本文の内容について深く思考し，自分の意見を持つよう指導してきた結果，「物事について考える力はこれからの生活の中で必要だと思いますか」の問いに「そう思う」と回答した生徒が 72.3% から 84.9%へ増加した。自由記述にも，「いろいろな意見に対する自分の意見を持つことができた」「英語を通して社会問題などを学び自分の意見を言えるようになった」「思考力を高めることは，他の科目にも，将来にも繋がることだと思う」など考える力について前向きな意見が多数見られた。

- ・ 第２回ライティングテスト（１２月実施：受験者数 96）

テスト内容：英検準２級の英作文問題（制限時間 20 分）

「本は買った方がよいか，図書館で借りる方がよいか」

評価方法：自作のルーブリックによる評価

結果：

内容			構成		
A	B	C	A	B	C
64 人(66.7%)	27 人(28.1%)	5 人(5.2%)	36 人(37.5%)	44 人(45.8%)	16 人(16.7%)

※平均語数：61.9 語

「内容」「構成」の項目でB以上の評価となった生徒の割合の比較：

項目	内容		構成	
実施月	第１回（６月）	第２回（１２月）	第１回（６月）	第２回（１２月）
A/B 合計	74.2%	94.8%	41.9%	83.3%
A	30.1%	66.7%	12.9%	37.5%

＜分析と考察＞

「内容」「構成」とも改善の目安を達成することができた。特に「内容」に関しては、理由や具体例などを用いて十分に深められている生徒（A 評価）の割合が 30.1%から 66.7%へ大幅に増加した。「構成」の項目でも、ディスコースマーカーの使用や、結論文での工夫が見られる生徒（A 評価）は 12.9%から 37.5%へ大きく増えた。事前・事後のデータが揃っている生徒の評価について検定（Wilcoxon 符号付順位検定）を行ったところ、どちらも統計学的に有意な向上が認められた（ $p=0.00<0.05$ ）。これらは、教師の発問を通して教科書本文に関する理解を深め、自分の意見を表現する活動を 20 回以上繰り返した成果であると考えられる。授業での課題への取組状況からも、回数を重ねるにつれ内容の具体性が増してきたと感じられた。付帯事項として語数を調べたところ、52.1 語から 61.9 語と約 10 語平均語数が増えており、より詳細に意見を述べようとしたことが推察された。

教師の変化

これまでは、学期末にアンケートを実施して記述内容を授業改善に反映させてきたが、アンケートの数値を細かく分析することで、より客観的に生徒の思いを把握することができた。また、事前事後でテストを実施し、検証をすることによって、生徒の変化を知ることができた。自分の取組を同僚と共有し、お互い意見を交換しながら授業改善に向けて取り組むことができたことは大きな財産となった。

今後の課題（次の改善点など）

日頃の授業では、分からない単語や文法などを生徒自身が調べながら英作文をする活動を行ってきた。しかし、ライティングテストでは、生徒自身が使える表現を用いて英作文をせざるを得ない状況となる。自分の考えを深めることができたとしても、基礎的な英語力が定着していないため、「言いたいことが英語にできない」という葛藤が生じている様子が見られた。日々の授業を通して、英語力の基礎を固めていく必要性を改めて感じた。

まとめ・感想

「英語を通じて、生徒の思考を深めさせる」ということが自分のテーマであるが、この研修でのアクション・リサーチの取組を通して、それを実践できたと感じている。英語の教科書のトピックは多岐に渡るので、それぞれのトピックについて自分の意見を持つことが幅広い視野を持つことにつながると再認識した。英語が使えるようになると同時に、生徒のこれからの人生に必要な「考える力」を育成することができたと考える。

授業改善にあたって参考にした資料等

- 大井恭子. (2008). 「思考力育成の試み—中学生の英語ライティング指導を通して」『千葉大学教育学部研究紀要』第 56 巻, 175-184.
- 大井恭子・田畑光義. (2012). 「中学生へのパラグラフ・ライティング指導の効果の検証」『関東甲信越英語教育学会誌』第 26 巻, 79-91.
- 今井理恵・峯島道夫. (2017) 『『コミュニケーション英語 I』で批判的思考力を育てる CT スキルズ一覧表と核となるパフォーマンス課題の開発』『全国英語教育学会紀要』28 巻, 365-380.

令和3年度 英語教育中核教員育成研修 担当講師（50音順）

大石 智子（おおいし ともこ）

グエン, トアー（NGUYEN, Thoa）

高取 純子（たかとり じゅんこ）

パリセ, ピーター（PARISE, Peter）

福富 正人（ふくとみ まさと）

村越 亮治（むらこし りょうじ）

村山 温美（むらやま あつみ）

令和3年度 英語教育中核教員育成研修
授業改善プロジェクト 報告書
ーアクション・リサーチによる高等学校英語授業での実践研究ー

発行日 令和4年3月31日
編集 神奈川県立総合教育センター
（担当）高取 純子
発行 神奈川立総合教育センター
藤沢市善行7-1-1
TEL 0466(81)1635
